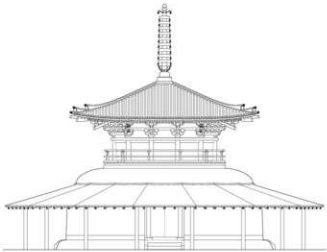
菅原遺跡

－令和２年度発掘調査報告書－



2023

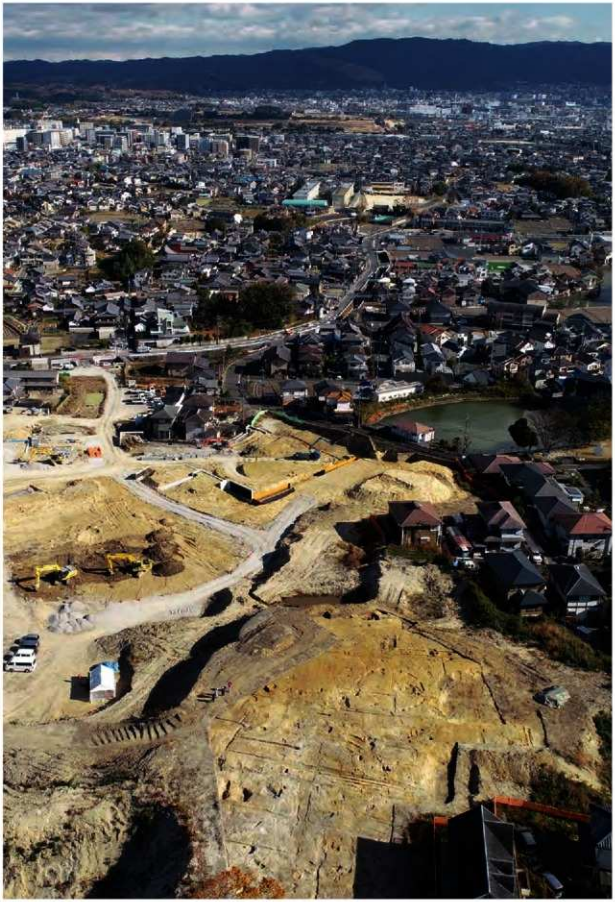
公益財団法人　元興寺文化財研究所

菅原遺跡

－令和２年度発掘調査報告書－

2023

公益財団法人　元興寺文化財研究所



菅原遺跡から東大寺を望む（西から）

序

このたび、菅原遺跡の発掘調査報告書が完成いたしました。

調査の結果から、この遺跡が行基に関わりの深い四十九院の一つ「長岡院」である可能性が高いことが示唆されるだけでなく、「長岡院」が行基を供養するために建立されたとまでも考えを進めることができるという成果をあげました。

調査が行われた2020年は行基が亡くなられて1270年となる節目の年でした。行基入寂の地・喜光寺を眼下にみる菅原遺跡からは、その建立に行基が尽力した東大寺大仏殿を東方遠くに眺めることができ、その手前には当時の政治の中心である平城宮跡が広がっています。往時の景観を想像すると、この遺跡がいかに恵まれた場所に位置するかが分かります。

発掘調査中には、文化財関係者だけでなく奈良の仏教関係の方々も多く訪れ、この遺跡が歴史上だけでなく、現在につながる信仰においても重要視されていることが分かります。

また、報告書刊行にあたっては、考古学に加えて建築史学などの方々からも助力を受けました。遺跡を理解するということは、多岐にわたる視点と協同が必要だと改めて認識いたしました。これからも一層の学際的研究が深まっていくことを望みます。

最後になりましたが、今回の発掘調査に際し多大なご協力をいただきました開発事業者様、調整・指導をいただきました奈良県、奈良市教育委員会をはじめ関係各位に深く感謝の意を表します。

令和5年3月31日

公益財団法人元興寺文化財研究所
理事長　辻村泰善

例　言

1. 本書は奈良市疋田町４丁目において、宅地造成に先立ち実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良県奈良市疋田町４丁目 143 の一部他に所在し、開発面積 29,884.89㎡のうち、調査面積は 1,960㎡である。
3. 調査は三都住建株式会社から委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、令和２年 10 月 26 日～令和３年１月 15 日を現地調査、令和３年５月 13 日、15 日、同年８月 24 日、９月１日、９月６日を現地確認調査、同年１月 16 日～令和５年３月 31 日を整理期間とした。
4. 発掘調査は佐藤亜聖（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、村田裕介・坂本俊・武田浩子（同）、小林友佳（奈良大学大学院）、岸上維颯・松田青空・宮崎健太・横山裕紀（奈良大学）が補佐した（所属は当時）。
5. 調査地の座標および基準点測量は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社文化財サービスが分担した。
6. 発掘調査における土工部門は安西工業株式会社が担当した。
7. 遺構写真撮影は佐藤が、遺物の写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
8. 出土遺物の実測および浄書、ないし図面等の整理作業は仲井光代、武田、芝 幹、山本知佳（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
9. 本書に使用した土器・瓦の分類、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類名、年代標記はこれらに依拠している。

   古代の土器研究会 1992『古代の土器（１）都城の土器集成』

   古代の土器研究会 1993『古代の土器（２）都城の土器集成』

   神野恵・森川実 2010「土器類」『図説平城京事典』柊風社

   菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室 1982『菅原遺跡：平城京西方丘陵基壇建物跡の発掘調査』奈良大学平城京発掘調査報告書 I

   奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』

   奈良国立文化財研究所 1982『平城宮発掘調査報告書Ⅺ』

   奈良国立文化財研究所他 1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』

   奈良市教育委員会 1999『史跡平城京朱雀大路跡－発掘調査・整備事業報告』

   奈良市教育委員会 2021『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 30（2018）年度

   西大寺 1990『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』

   原田憲二郎 2021「平城京出土の刺突痕がある土製品」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 30（2018）年度』奈良市教育委員会
10. 発掘調査および整理報告書作成にかかる費用については、三都住建株式会社が全額負担した。
11. 当該調査において出土した遺物、実測図、写真は奈良市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆は第１章第１～３節、第２章を江浦洋（公益財団法人元興寺文化財研究所）、第１章

第４節を村田、第３章の遺構を江浦、佐藤亜聖（滋賀県立大学）、遺物を江浦が行った。第４章は、第１節は箱崎和久氏（奈良文化財研究所）、北脇翔平氏（文化財建造物保存技術協会）から玉稿を賜った。第２節を松田が行い、江浦・佐藤がこれを補った。第３節を江浦が行った。本書の編集は江浦が行い、芝がこれを補佐した。

13. 発掘調査および報告書に際しては以下の方々からのご助言、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい（敬称略、順不同）。

奈良市教育委員会、奈良県教育委員会、相原嘉之、浅川滋男、網伸也、李陽浩、石田太一、市川秀之、市本芳三、上井佐妃、上野邦一、植野浩三、宇野隆志、近江俊秀、大西貴夫、大林潤、小笠原好彦、岡田雅彦、尾田栄章、小田裕樹、海邉博史、鐘方正樹、金田明大、北脇翔平、工楽善通、古関正浩、小林澤應、小山田宏一、近藤康司、佐伯俊源、坂井秀弥、栄原永遠男、狭川真一、白神典之、神野恵、鈴木景二、鈴木公成、清野孝之、積山洋、竹内亮、建石徹、舘野和己、田中俊明、塚本浩司、東野治之、禰宜田佳男、箱崎和久、原田香織、原田憲二郎、菱田哲郎、廣岡孝信、前園実知雄、光石鳴巳、村元健一、森川実、森下浩行、山岸常人、山田法胤、山本崇、横内裕人、吉兼千陽、吉川真司、和田一之輔

目次

第１章　調査に至る経緯と調査体制 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　調査の経過（調査日誌抄） …… 2
　第４節　現地調査終了後から報告書刊行までの経過 …… 4
第２章　周辺環境と既往の調査 …… 5
　第１節　遺跡の立地と環境 …… 5
　第２節　周辺の既往の調査 …… 8
　第３節　本調査の課題 …… 9
第３章　調査の成果 …… 10
　第１節　調査区の設定と基本層序 …… 10
　第２節　奈良時代の遺構と遺物 …… 13
第４章　遺構・遺物の分析 …… 60
　第１節　菅原遺跡 SB140 の復元考察 …… 60
　第２節　出土瓦の検討 …… 77
　第３節　鉄製円盤の検討 …… 83
第５章　調査のまとめ－要点の整理と課題 …… 87

図版目次

図１　調査地位置図（S=1/4,000） …… 5
図２　調査地の位置と地形分類（S ＝ 1/25,000） …… 6
図３　調査地と東大寺・菅原寺との関係 …… 7
図４　調査地周辺の等高線図（S=1/6,000） …… 7
図５　今回の調査地と既往の調査地（S=1/6,000） …… 8
図６　調査区位置図（S=1/2,000） …… 10
図７　土層断面図（縦 S=1/40、横 S=1/80） …… 11
図８　土層断面位置図と土層注記 …… 12
図９　SB140 平面図（S=1/100） …… 14
図 10　南区全体平面図（S=1/200） …… 15
図 11　SB140 内周土坑列土層断面図（S=1/40） …… 17
図 12　SB140 外周柱穴列土層断面図（S=1/40） …… 18
図 13　SB140 平面図（S=1/200） …… 19

図 14　SB140Aj 掘方の角度（S=1/100）…… 19
図 15　SB150 平面・断面図（S=1/100）…… 20
図 16　SB150 柱穴土層断面図（S=1/40）…… 21
図 17　SC160c・d 根固め石検出状況（S=1/40）…… 22
図 18　SC160 平面図（S=1/100）…… 23
図 19　SC160 柱穴土層断面図（1）（S=1/40）…… 24
図 20　SC160 柱穴土層断面図（2）（S=1/40）…… 25
図 21　SC180 平面図（S=1/100）・柱穴土層断面図（S=1/40）…… 26
図 22　SA170 平面図（S=1/100）…… 27
図 23　SA170 柱穴土層断面図（S=1/40）…… 28
図 24　SD034 平面・断面図（S=1/40）…… 29
図 25　SK049 平面・断面図（S=1/40）…… 30
図 26　整地土の分布状況 …… 30
図 27　SB150 出土遺物実測図（1）（S=1/2・1/3）…… 32
図 28　SC160 出土遺物実測図（1）（S=1/3）…… 33
図 29　SC160 出土遺物実測図（2）（S=1/3）…… 34
図 30　SC160 出土遺物実測図（3）（S=1/3）…… 35
図 31　SC160 出土遺物実測図（4）（S=1/2・1/3）…… 36
図 32　SC180 出土遺物実測図（S=1/3）…… 36
図 33　SA170 出土遺物実測図（1）（S=1/3）…… 36
図 34　SA170 出土遺物実測図（2）（S=1/2・1/3）…… 37
図 35　SD034 出土遺物実測図（1）（S=1/3）…… 39
図 36　SD034 出土遺物実測図（2）（S=1/3）…… 40
図 37　SD034 出土遺物実測図（3）（S=1/3）…… 41
図 38　SD034 出土遺物実測図（4）（S=1/3）…… 42
図 39　整地土出土遺物実測図（1）（S=1/3）…… 43
図 40　整地土出土遺物実測図（2）（S=1/3）…… 44
図 41　整地土出土遺物実測図（3）（S=1/3）…… 45
図 42　整地土出土遺物実測図（4）（S=1/3）…… 46
図 43　北区全体平面図（S=1/200）…… 48
図 44　SK100 平面・土層断面図（S=1/40）…… 49
図 45　SK102 平面・土層断面図（S=1/40）…… 49
図 46　SK103 土層断面図（S=1/40）…… 49
図 47　SK100 出土遺物実測図（1）（S=1/3）…… 51
図 48　SK100 出土遺物実測図（2）（S=1/3）…… 52
図 49　SK100 出土遺物実測図（3）（S=1/3）…… 53
図 50　SK100 出土遺物実測図（4）（S=1/3）…… 54
図 51　SK100 出土遺物実測図（5）（S=1/3）…… 55
図 52　SK100 出土遺物実測図（6）（S=1/3）…… 56

図 53　SK100 出土遺物実測図（7）（S=1/3）…… 57
図 54　SK102 出土遺物実測図（S=1/3）…… 57
図 55　表採遺物実測図（1）（S=1/3）…… 58
図 56　表採遺物実測図（2）（S=1/3）…… 59
図 57　建物の配置（1）（5 尺メッシュ）…… 63
図 58　建物の配置（2）（5 尺メッシュ）…… 64
図 59　SB140 復元案（上段：上層平面図、下段：下層平面図）…… 66
図 60　SB140 復元案（上段：立断面図、下段：見上図）…… 67
図 61　慈光寺開山塔　平面図　断面図　組物詳細図 …… 68
図 62　金剛三昧院多宝塔断面図 …… 69
図 63　根来寺多宝塔（大塔）　下層平面図　断面図 …… 70
図 64　池上本門寺宝塔断面図 …… 71
図 65　堂庭廃寺宝塔跡遺構平面図…… 72
図 66　堂庭廃寺宝塔復元図…… 72
図 67　『高野春秋編年輯録』所収　高野山根本大塔平面図…… 73
図 68　菅原遺跡出土の軒瓦…… 78
図 69　菅原遺跡出土の軒瓦相関図…… 79
図 70　菅原遺跡出土の中型軒瓦型式の分布 …… 80
図 71　菅原遺跡出土の小型・超小型軒瓦型式の分布 …… 81
図 72　鉄製円盤の出土位置…… 83
図 73　鉄製円盤の類例…… 84
図 74　地鎮祭鎮物 …… 85
図 75　敦煌莫高窟第 217 窟（盛唐）壁画多宝塔（近藤 2014）…… 90
図 76　南区上層検出遺構配置略図（S=1/300）…… 95
図 77　南区検出遺構配置略図（S=1/300）…… 96
図 78　北区検出遺構配置略図（S=1/200）…… 97

表目次

表 1 ～ 3　報告遺物一覧（1）～（3）……98 ～ 100
表 4 ～ 7　検出遺構および出土遺物一覧（1）～（4）…… 101 ～ 104

写真目次

写真 1　SD002 出土礫 …… 38
写真 2　SD034 出土礫 …… 38

写真図版目次

巻頭図版
　菅原遺跡から東大寺を望む（西から）
図版 1
　調査前風景（西から）
　重機掘削状況（西から）
図版 2
　調査地全景（北から）
　調査地全景（西から）
図版 3
　南区全景（西から）
　南区全景（北から）
図版 4
　調査地垂直写真（右が北）
　南区垂直写真（上が北）
図版 5
　SB140・150 垂直写真（左が北）
　北区垂直写真（右が北）
図版 6
　南区西半遺構検出状況（南東から）
　SB140 検出状況（北から）
図版 7
　SB140 内周土坑列 Aj・Ak 検出状況（北西から）
　SB140 内周土坑列 Aj 検出状況（西から）
図版 8
　SB140 内周土坑列 Aa 土層断面（北東から）
　SB140 内周土坑列 Ab 土層断面（北東から）
図版 9
　SB140 内周土坑列 Ac 土層断面（北東から）
　SB140 内周土坑列 Ag 土層断面（南西から）
図版 10
　SB140 内周土坑列 Aj 土層断面（西から）
　SB140 内周土坑列 Al 土断面（北から）
図版 11
　SB140 内周土坑列 Aa 完掘状況（北東から）
　SB140 内周土坑列 Ab 完掘状況（北東から）
図版 12
　SB140 内周土坑列 Ag 完掘状況（南西から）
　SB140 内周土坑列 Ah 完掘状況（南西から）
図版 13
　SB140 内周土坑列 Ai 完掘状況（西から）
　SB140 内周土坑列 Aj 完掘状況（西から）
図版 14
　SB140 内周土坑列 Ak 完掘状況（北西から）
　SB140 全景（北東から）
図版 15
　SB140 全景（西から）
　SB140 全景（西から）柱あり
図版 16
　SB140 全景（北東から）
　SB140 全景（北東から）柱あり
図版 17
　SC160 北辺全景（西から）
　SC160 北辺・SB150 全景（東から）
図版 18
　SC160 西辺全景（北から）
　SC180 全景（東から）
図版 19
　SB140 外周柱穴列 b 土層断面（南から）
　SB140 外周柱穴列 d 土層断面（南から）
図版 20
　SB140 外周柱穴列 e 土層断面（南西から）
　SB140 外周柱穴列 o 土層断面（東から）
図版 21
　SB150b 土層断面（東から）
　SB150m 土層断面（東から）
図版 22
　SB150c 検出状況（西から）
　SB150g 土層断面（東から）

図版 23
SB150d 掘方内須恵器出土状況（北西から）
SC160c 土層断面（南から）
図版 24
SC160d 土層断面（南から）
SC160h 土層断面（南から）
図版 25
SC160l 土層断面（西から）
SC160s 土層断面（南から）
図版 26
SC160v 土層断面（南から）
SC160w 土層断面（南から）
図版 27
SC160x 土層断面（南から）
SC160s 遺物出土状況（東から）
図版 28
SC160c 根固め石検出状況（南から）
SC160d 根固め石検出状況（南から）
図版 29
SC160v 掘方内土師器出土状況（南から）
SC160g 掘方内鉄製品出土状況（北西から）
図版 30
SA170f 土層断面（西から）
SD034 遺物出土状況（南から）
図版 31
SD034 遺物出土状況（西から）
SD034 土層断面（西から）
図版 32
北半部全景（南から）
南半部全景（北から）
図版 33
SK100 遺物出土状況（北から）
SK100 完掘状況（北西から）
図版 34
SK100 土層断面（西から）
SK102 遺物出土状況（南西から）
図版 35
SB150 出土遺物
図版 36・37
SC160 出土遺物
図版 38
SC160・180 出土遺物
図版 39
SA170 出土遺物
図版 40
SD034 出土遺物
図版 41
SD034、整地土出土遺物
図版 42・43
整地土出土遺物
図版 44 ～ 48
SK100 出土遺物
図版 49
SK100・102 出土遺物
表採遺物
図版 50・51
表採遺物

第１章　調査に至る経緯と調査体制

第１節　調査に至る経緯

令和元年７月23日付けで三都住建株式会社より、奈良市疋田町四丁目143の一部他で行う宅地造成に伴う遺跡有無確認踏査願が提出された。これを受けて同年８月８日付けで奈良県教育委員会（以下奈良県）から奈良市教育委員会（以下奈良市）に踏査依頼が出され、奈良市が踏査を実施した結果、複数個所で遺物が散布、採集されたことから、同年９月10・11日に２箇所で試掘調査を実施した。試掘調査は丘陵上の２箇所の平坦面を対象として行われ、北平坦面には尾根方向に幅２ｍ、長さ41ｍ（面積82㎡）の発掘区を、南平坦面には十字方向に幅２ｍ、東西長55ｍ、南北長40ｍの発掘区を設定、遺構確認のために一部が広げられている（面積216㎡）。試掘調査の結果、両調査区ともに遺構の存在が判明し、本調査が必要との報告がなされた。

この結果を踏まえて、奈良市は発掘調査実施に向けた協議を開始したが、工期を勘案した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断されたため、公益財団法人元興寺文化財研究所へ発掘調査を依頼することとなった。

令和２年９月30日に奈良県より発掘調査の依頼を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所は、同年10月15日、菅原遺跡発掘調査業務に係る委託契約を三都住建株式会社と締結、発掘調査届出を提出のうえ、同年10月26日より現地調査を開始した。

現地調査は令和３年１月15日に終了したが、同年５月13～15日に現地での確認調査を実施した。この間、奈良県、奈良市で遺跡の重要性を鑑み、事業者との保存協議が行われたが、保存至難との結論に至った。同年５月20日には報道提供を行い、動画配信という形で遺跡の公開を行った。その後、同年８月24日、９月１日、９月６日には、現地での造成工事の進捗状況に合わせて、現地での最終確認調査を実施し、すみやかに整理・報告書作成業務に移行した。

現地調査から報告書作成に至る間、三都住建株式会社の全面的な支援･協力があった。また、奈良県、奈良市からの適切なご指導を賜った結果、調査・整理作業を無事に終了することができた。関係各位に感謝する次第である。

第２節　調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

（発掘調査）

調査指導：奈良県・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　田邉征夫

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　塚本敏夫
文化財調査修復研究グループ
リーダー　金山正子
主　務　佐藤亜聖（現地調査担当）
研究員　村田裕介
研究員　坂本　俊
現地作業員：安西工業株式会社
測　　量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社文化財サービス

（整理報告）
調査指導：奈良県教育委員会・奈良市教育委員会
調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所
理 事 長　辻村泰善
所　　長　田邉征夫
事務局長　江島和哉
総合文化財センター長　山田哲也
文化財調査修復研究グループ
総括マネージャー　雨森久晃
主　務　村田裕介
研究員　坂本　俊
研究員　瀬戸哲也
技　師　江浦　洋（整理報告担当）

第３節　調査の経過（調査日誌抄）

令和２年

10 月 26 日（月）重機、機材搬入。調査区の設定および重機掘削を行う。
10 月 27 日（火）重機掘削。西半遺構検出。南端付近で奈良時代の遺構検出。
10 月 28 日（水）重機掘削と並行して遺構検出を継続。大型の柱穴列を検出。
10 月 30 日（金）重機掘削と並行して遺構検出。八角堂とも考えられる円形の建物遺構を検出。
11 月 6 日（金）調査区西半部遺構検出。二列の柱穴列を確認。円形建物を囲繞する回廊か。
11 月 10 日（火）攪乱、素掘溝を掘削、遺構検出。略図作成。
11 月 11 日（水）遺構検出作業。堺市海邉博史氏、近藤康司氏、白神典之氏来訪。
11 月 12 日（木）遺構検出作業。円形建物検出状況写真撮影。大阪大谷大学狭川真一氏来訪。
11 月 13 日（金）遺構検出作業、略図作成。中心の建物は特異な円形建物である可能性が高くなる。奈良市鐘方正樹氏、森下浩行氏、原田憲二郎氏、大阪府文化財センター江浦洋氏来訪。
11 月 17 日（火）遺構精査、略図作成。東側の柱列は不明瞭。橿原市上井佐妃氏、京田辺市吉兼千陽氏来訪。

11 月 18 日（水）　調査区南端を拡張して遺構検出。南端で東西の柱穴列を検出し、南北約 30 mの区画であることを確認。中央の建物については、木造基壇の可能性も示唆される。奈良文化財研究所箱崎和久氏、神野恵氏、小田裕樹氏、和田一之輔氏、山本崇氏、金田明大氏来訪。

11 月 19 日（木）　南東部遺構掘削。奈良県宇野隆志氏、光石鳴巳氏、岡田憲一氏、奈良市原田憲二郎氏、大阪府文化財センター坂井秀弥氏、江浦洋氏来訪。

11 月 20 日（金）　雨天のため現場図面の点検、整理を行う。

11 月 24 日（火）　中央建物の柱穴の掘削。奈良県、奈良市、三都住建株式会社で保存に向けた協議。

11 月 25 日（水）　中央建物の内側方形土坑掘削。奈良市松浦五輪美氏、原田憲二郎氏、奈良大学植野浩三氏、小山田宏一氏、狭山池博物館工楽善通氏来訪。

11 月 26 日（木）　中央建物の内側方形土坑掘削。大阪大谷大学狭川真一氏来訪。

11 月 27 日（金）　調査区南端、東端部の拡張。北区重機掘削開始。

11 月 30 日（月）　中央建物の内部方形土坑、写真撮影、完掘。北側回廊柱穴掘り下げ。

12 月 1 日（火）　北側で回廊柱穴が続かない部分を検出。門もしくは建物となる可能性を確認。

12 月 3 日（木）　北区重機掘削、遺構検出。東野治之氏、奈良市原田憲二郎氏来訪。

12 月 4 日（金）　北区遺構掘削。SK102 からⅢ期の土器出土。

12 月 7 日（月）　SK102 断面、写真、実測。SK101 断面図作成。北区略図作成。奈良文化財研究所山本崇氏、大林潤氏、清野孝之氏、京都大学吉川真司氏、奈良県立万葉文化館竹内亮氏、京都府立大学菱田哲郎氏来訪。

12 月 10 日（木）　南区東端部掘削。軒平瓦２点出土。北区遺構写真撮影。奈良文化財研究所箱崎和久氏来訪。

12 月 11 日（金）　北区 SK100 遺物出土状況実測。南区東端部掘削。奈良大学相原嘉之氏、大阪府文化財センター市本芳三氏来訪。

12 月 16 日（水）　南区全景写真。ドローン撮影。

12 月 17 日（木）　北区全景写真。堺市近藤康司氏、大阪府文化財センター鹿野塁氏来訪。

12 月 18 日（金）　回廊柱穴半掘。SP71、73 から鉄製円盤出土。橿原考古学研究所関係者来訪。

12 月 19 日（土）　南区回廊柱穴土層断面図作成。北区壁面土層図作成。薬師寺関係者来訪。

12 月 23 日（水）　柱穴掘削。奈良文化財研究所箱崎和久氏、大阪歴史博物館李陽浩氏、東大寺関係者、喜光寺関係者来訪。

12 月 24 日（木）　回廊柱穴完掘作業。滋賀県立大学市川秀之氏、奈良文化財研究所関係者、京都府立大学山岸常人氏来訪。

12 月 25 日（金）　回廊柱穴完掘作業。大山崎町古関正浩氏、大阪市文化財協会積山洋氏、大阪歴史博物館村元健一氏来訪。

令和３年

1 月 5 日（火）　南区、南端柱列検出、写真撮影。近畿大学網伸也氏、滋賀県立大学田中俊明氏来訪。

1 月 7 日（木）　調査区を拡張し、重機掘削後に移行検出。大阪府立弥生文化博物館禰冝田佳男氏、塚本浩司氏、大阪府立近つ飛鳥博物館舘野和己氏来訪。

1 月 8 日（金）　北側で検出した柱穴列は門ではなく、東西五間の堂である可能性が高くなる。

1 月 12 日（火）　降雪のため作業中止。現場図面の点検、整理を行う。

1月15日（金）　機材撤収作業。調査終了。
5月13日（木）　南区北東部の確認調査。柱穴検出、記録作業を行う。
5月14日（金）　南区北東部の確認調査。柱穴掘削、記録作業を行う。
5月15日（土）　南区北東部の柱穴掘削、記録作業を行う。北面の東側は回廊にはならず、掘立柱塀であることを確認。
5月20日（木）　報道提供を行うとともに、動画による調査成果の公開を行った。
5月24日（月）　奈良市教育委員会池田裕英氏の案内で浅川滋男氏来訪。
8月24日（火）　奈良市教育委員会原田香織氏立ち会いのもと、宅地造成工事で切られた南区の北東側断面を精査、盛土層を確認し、遺物を採集。
9月1日（水）　奈良市教育委員会原田香織氏立ち会いのもと、宅地造成工事で切られた南区の東側断面を精査、写真撮影。
9月6日（月）　最終確認調査。事業者の協力のもと、南区北東側の表土を重機で除去し、盛土ラインを平面で確認し、サブトレンチによる断面観察を行う。北東部は盛土による平坦面の造成が行われていたことを確認する。

第4節　現地調査終了後から報告書刊行までの経過

令和3年1月15日の現地調査終了後、奈良県と奈良市は事業者と現地保存のための協議を複数回行ったが、合意に達することができず、同年5月7日に現地保存の断念の決定がなされた。これを受けて、同年5月13日から15日にかけて、南区北東部の平面検出のみに留めていた柱穴の掘削、記録作業を行い、北面区画施設のうち東側については回廊ではなく、掘立柱塀であることを確認した。

同年5月20日には、現地調査成果を報道発表するとともに、コロナ禍のため実施することが出来なかった現地説明会に替わるものとして、現地調査を開設した動画を研究所ホームページに公開した。

宅地造成工事の進行した段階では、同年8月24日、9月1・6日に、南区で整地土が確認されていた北東部の断面精査、遺物採取を行うとともに、整地土にはサブトレンチによる断面確認、記録を行った。

円形建物の復元にあたっては、奈良文化財研究所箱崎和久氏、公益財団法人文化財建造物保存技術協会北脇翔平氏の協力を得て、令和4年10月13日、12月5日、12月26日、令和5年1月15日に検討会を行った。その成果として、両氏からは第4章第1節の玉稿を賜った。

また、遺物に関して、瓦については令和4年7月22日、11月4日に奈良市埋蔵文化財調査センター原田憲二郎氏、土器については同年12月5日に奈良文化財研究所神野恵氏、森川実氏、小田裕樹氏よりご教示を頂いた。

検討会のひとこま（2022.12.26）

第２章　周辺環境と既往の調査

第１節　遺跡の立地と環境

調査地は奈良市疋田町に所在する。平城京との関係では京域外となり、二条大路から二条条間小路の延長上の丘陵上に位置する。推定西四坊大路からの距離は約 390 mを測る。

地理的には奈良盆地の北西側、秋篠川と富雄川に挟まれた西ノ京丘陵の北端部に近い東麓に位置する。東側では低地を西堀河に比定される秋篠川が直線的に南流し、蛙股池から流れ出た大池川が菅原遺跡付近から東に向かって流れ、東で秋篠川に合流する。現状では明確な河川はないものの、菅原遺跡が所在する台地の南北には樹枝状開析谷が東西にのびており、部分的に段丘崖を形成している。とくに、調査

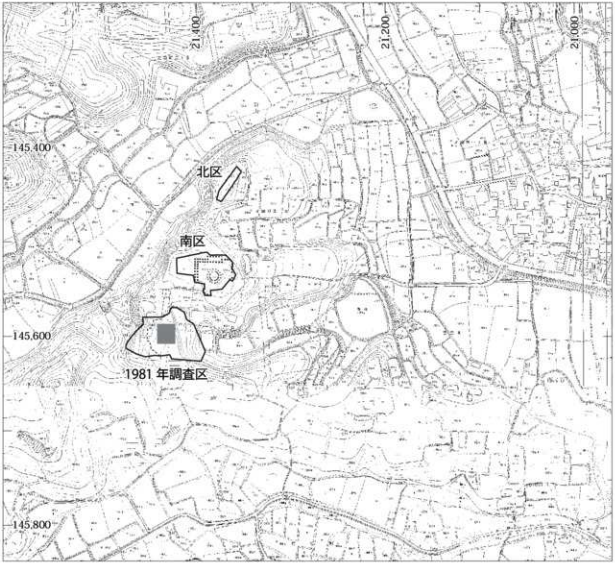


図１　調査地位置図（S=1/4,000）
（「平城京条坊総合地図 18「疋田」「畑」を改変）

地北西側の段丘崖はかなり急峻である。

西ノ京丘陵は南北 20km、東西 5 km、標高 150 m前後の細長い紡錘形で、最高地点は京都府と奈良県の境界付近にあり、標高約 311 mである。全体に洪積層よりなり、東に緩傾斜する。北部は東に隣接する奈良丘陵に、南部は奈良盆地の沖積地に漸移する（堀井 1961）。

西ノ京丘陵は近年住宅地化が著しく、調査地周辺も 1980 年代の宅地造成により景観が大きく変化している。住宅地化する以前は標高 75 mを境として土地利用の景観が一変していたとの指摘がある（北畠 1981）。具体的には 75 m以上の地域は、ほぼ全域がアカマツの自然林で、所によりクヌギ・カシ林が混在していた。旧集落付近の日向緩斜面には、広いタケ林と小規模な野菜畑が開墾され、階段状耕作景観が卓越していた。75 m以下に広く発達する樹枝状開析谷は、谷頭部の小溜池灌漑により棚田化されていたとされる。

菅原遺跡周辺での景観についてもおおむね同様ではあるが、円形建物が検出された丘陵頂部に関しては、標高が 105 mを超え、水を得にくい環境にありながらも、遅くとも近世には耕作地（畑地）とされていた状況が看取される。これは奈良時代の造成により、かなりの面積の平坦面が確保でき、省力で耕作地に転換できたことに起因するものといえる。

なお、上記のように建物遺構が検出された地点の標高は約 105 mで、菅原寺（現在の喜光寺）との標高差は約 30 mであるが、平城京を挟んで東西に対峙する東大寺大仏殿とはほぼ同じ標高に立地している。

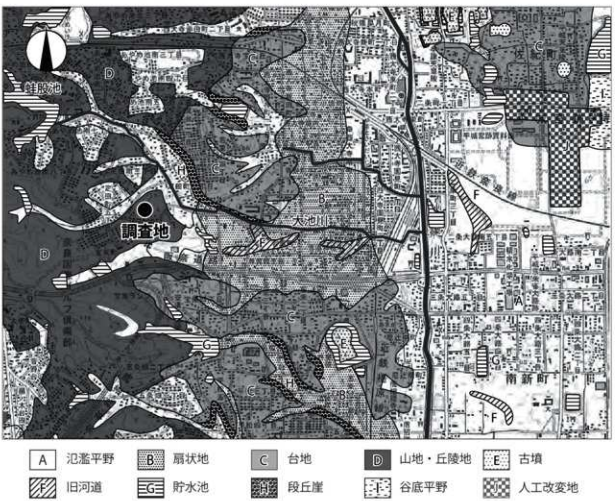


図 2　調査地の位置と地形分類（S ＝ 1/25,000）

（国土地理院「奈良」1/25,000 に奈良県 1983 の地形分類図を一部改変して投影）

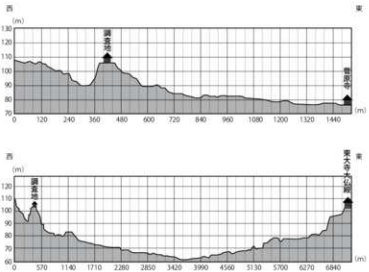


図３　調査地と東大寺・菅原寺との関係

（地理院地図 断面図ツールで作成）

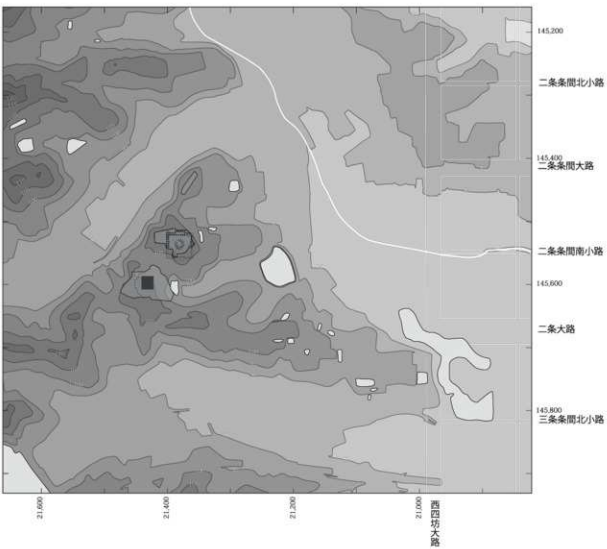


図４　調査地周辺の等高線図（S=1/6,000）

（「平城京条坊総合地図 18「疋田」「畑」を改変）

第２節　周辺の既往の調査

今回の調査地の南西では 1981 年に奈良大学による調査が行われ、奈良時代中頃から９世紀代に属する瓦が出土している。また奈良時代中期に建てられた建物基壇が見つかっており、奈良時代の高僧行基が設けた四十九院の一つ、「長岡院」の候補地のひとつとされている（菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室 1982）。ここからは通常の大きさの瓦のみならず、小型、さらには超小型の瓦が出土している（菅原遺跡調査会 1983）。

このほか隣接地では、奈良市教育委員会によって東側の今池に向かってのびる南側の尾根での調査が平成 28・29 年度に行われている。平成 28 年度は第１～３発掘区、平成 29 年度には第４～６発掘区の調査が行われているが、このうち、南側斜面に設定された第５発掘区からは奈良時代の土坑が検出され、ほぼ完全なものを含み土馬が９個体分以上出土している。丘陵頂部にもトレンチを設定して調査が行われているが、顕著な遺構・遺物は確認されていない。（奈良市教育委員会 2019）。

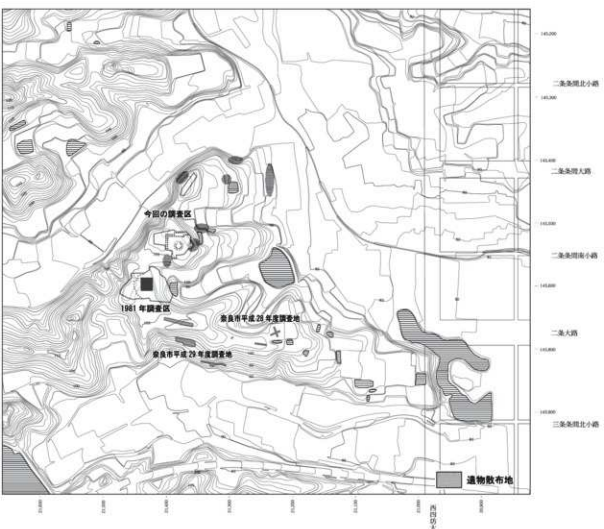


図５　今回の調査地と既往の調査地（S=1/6,000）
（「平城京条坊総合地図 18『疋田』を改変）

平城京右京北辺一条四坊六坪からは軒丸瓦 6316M 型式が 4 点、それと組み合う軒平瓦 6710D 型式が 8 点の出土している（奈文研 1984）。当該地については、藤原武智麻呂の習宜の別業がその死後、何らかの経緯で称徳天皇の山荘として利用されるに至ったという考えや西大寺嶋院にあてる考えもある（橋本 1984）。

軒平瓦 6710D 型式は右京一条三坊八坪の調査でも 2 点が確認されているほか（奈文研 2007）。右京北辺四坊三・四坪の第 647 次の調査でも出土の報告がある（奈良市 2014）。

また、菅原遺跡から東に約 1.3km の平城京右京三条三坊八坪の調査（257-1 次）では、菅原遺跡と同范の瓦が複数出土している（奈良市 1994）。この調査では瓦類が整理箱で 45 箱分出土、菅原遺跡と同范の小型軒丸瓦 6299A 型式が SE206 掘方と SE207 井戸枠抜き取り穴から 1 点ずつ出土している。同じく同范の小型軒平瓦 6765A 型式が SE206 枠内から 2 点、SE206 掘方から 13 点、SE207 井戸枠抜き取り穴から 4 点、SD208 から 2 点、SD210 から 1 点、遺物包含層から 1 点出土している。また、菅原遺跡と同范の小型の鬼面文鬼瓦の下顎部分の小片が SE206 掘方から出土している。瓦の生産年代と転用年代には 650 年ほどの隔たりがあり、室町時代に至っても、奈良時代の瓦が埋没することなく転用可能な状態であったことを考えると、菅原遺跡の来歴を考える上でも重要な成果であるといえる。

第３節　本調査の課題

今回の調査地周辺の地形環境ならびに既往の調査成果を踏まえ、本調査では、 試掘調査で検出された建物跡の全容解明、1981 年に行われた菅原遺跡調査会・奈良大学調査時の建物との関連性の追求、推定「長岡院」との関連性とその可能性の検証、京外隣接地における奈良時代遺跡の構造と展開の解明を課題とした。

《参考文献》
江浦　洋 1989「行基建立四十九院考―長岡院推定遺跡を中心とした考古学的検討―」
『大阪文化財論集』（『財団法人大阪文化財センター設立 15 周年記念論集』）（財）大阪文化財センター
北島潤一 1981「奈良盆地の北西部丘陵における住宅地化― 1965 ～ 1976 年―」『地理学評論』54-8
菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室 1982『菅原遺跡　平城京西方丘陵基壇建物跡の発掘調査』『奈良大学平城京発掘調査報告書』1
菅原遺跡調査会 1983「菅原遺跡の小型瓦」『古代研究 25・26　特集：小型瓦』元興寺文化財研究所
独立行政法人 文化財研究所奈良文化財研究所 2007『西大寺食堂院右京北辺発掘調査報告』
奈良県（企画部開発調整課）　1983『土地分類基本調査　奈良、大阪東北部、大阪東南部』
奈良国立文化財研究所 1984『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告 』
奈良市教育委員会 1994「平城京平城京右京三条三坊八坪・菅原東遺跡の調査　第 257-1 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 5 年度』
奈良市教育委員会 2014「平城京跡（右京北辺四坊三・四坪）の調査　第 647 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 23 年度』
奈良市教育委員会 2019「菅原遺跡の調査　試掘 2016-5・2017-2 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 28（2016）年度』
橋本義則 1984「西大寺古図と「称徳天皇御山荘」」『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告 』奈良国立文化財研究所
堀井甚 一郎 1961『最新奈良県地誌』大和史蹟研究会

第３章　調査の成果

第１節　調査区の設定と基本層序

調査地では開発予定地全域を対象に令和２年８月に奈良市教育委員会による遺跡有無確認踏査が実施された。この結果を踏まえて、同年９月に丘陵頂部の試掘調査が行われ、いずれも遺構が確認されたことから、丘陵頂部２か所に調査区を設定することとなった。

本調査では、それぞれ、「北区」「南区」として調査を行った。なお、南区に関しては古代の柱列の展開に合わせて、部分的に調査区の拡張を行っている。

調査区はいずれも丘陵頂部の平坦面であったことから、両調査区ともに基本的には耕土の直下が地山面という状況を呈している。

南区では、地山を覆う耕土は北東側では層厚 30 ～ 40cm であるが、南西側では薄く、10cm に満たないところもある。なお、調査地の北東側では図 26 に示した範囲で盛土による整地が行なわれていた状況を確認している（整地土Ⅰ）。建物造営にあたって、北東側には盛土を行う地業がなされていたこ

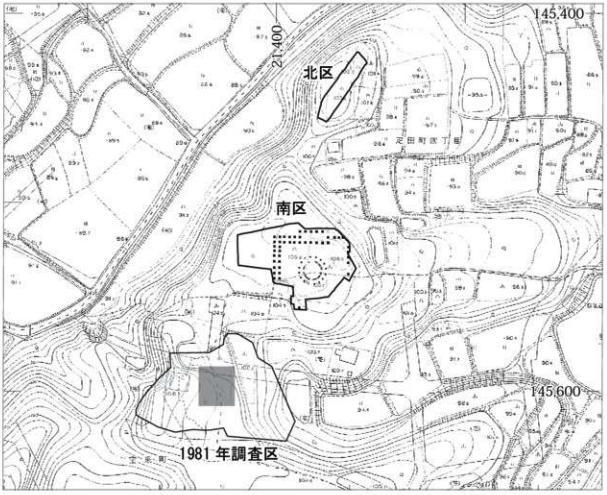


図６　調査区位置図（S=1/2,000）

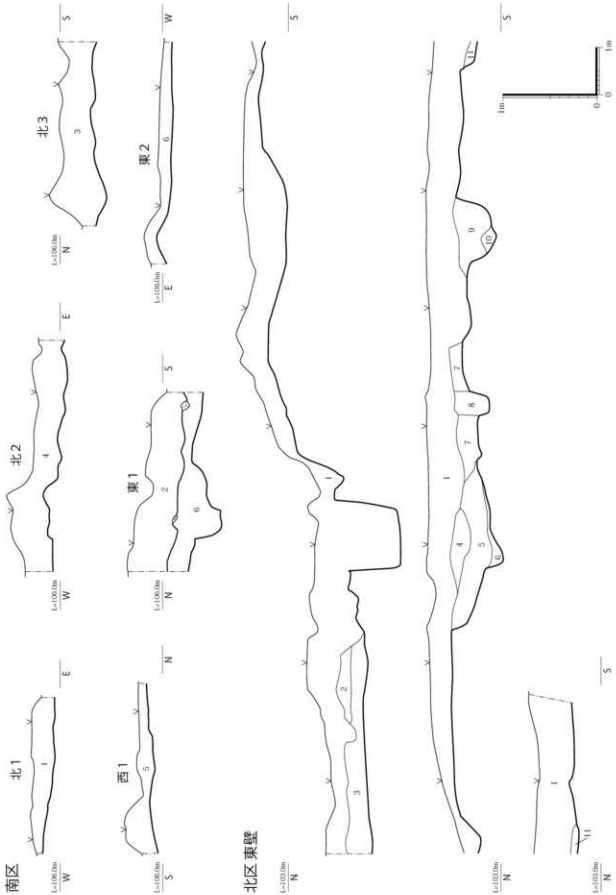


図７　土層断面図（縦 S=1/40、横 S=1/80）

南区

1. 黄褐 2.5Y5/4 中粒砂（径 30 mm程の角礫を含む）
2. 黄褐 2.5Y5/4 中粒砂（径 3 ～ 5 mm程の亜円礫を含む）
3. 褐 10YR4/4 中粒砂（径 3 ～ 5 mmの亜円礫を含む）
4. 黒褐 2.5Y3/1 中粒砂（径 50 mmの亜円礫、径 3 ～ 5 mm程の円礫を含む）
5. 黒褐 2.5Y3/1 中粒砂（径 5 ～ 7 mm程の亜円礫を含む）
6. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中粒砂（地山ブロックを主とする）

北区

1. 灰 5Y6/1 中粒砂（有機物を大量に含む）
2. にぶい黄褐 10YR5/3 中粒砂（径 20 ～ 40 mmの礫を多く含む）
3. 灰黄褐 10YR5/2 中粒砂（径 20 mmの前後の礫を多く含む）
4. 灰褐 10Y7/1 中粒砂（径 10 ～ 40 mmの亜角礫状地山ブロックを多く含む）
5. 明黄褐 10YR6/8 中粒砂（地山ブロックを主とする）
6. にぶい黄褐 10YR7/2 中粒砂（薄層介在し上部には有機物を多く含む：整地土Ⅰ）
7. 黄褐 10YR5/6 中粒砂
   （径 30 ～ 50 mmの亜角礫状地山ブロック・径 50 mm前後の暗褐色ブロックを多く含む）
8. 褐 10YR4/6 中粒砂（径 20 ～ 40 mmの亜角礫状地山ブロックを少量含む）
9. 灰黄褐 10YR4/2 中粒砂（径 30 ～ 50 mmの亜角礫状地山ブロックを多く含む）
10. 灰黄褐 10YR5/2 中粒砂（地山ブロックをほとんど含まない）
11. にぶい黄褐 10YR5/4 中粒砂（有機物を多く含む）

図 8　土層断面位置図と土層注記

とが判明している。また、宅地造成の基礎造成工事が進行する段階で行った現地での最終確認調査では南区の北側、SB150 から北に約 12m の地点でも遺物を包含する土層を確認している（整地土Ⅱ）。当該層に関しては局地的な掘削に留まったこともあり、整地土としているが斜面に堆積した流入土、いわゆる包含層であった可能性もある。

北区は丘陵頂部から斜面にかけて設定した調査区であり、調査区南端での標高は 103.3m、北端では 102.1m で 1m を超える比高差がある。土層の状況は元々地山が高かった南半では南区と同様に層厚 10 ～ 50cm の表土（旧耕土）直下が地山面となる。地山が下降する北端部では表土下に層厚 30cm 前後の黄褐色中粒砂の堆積が見られる。

南区・北区ともに、古代の遺構が検出される地山面は耕作等による削平が及んでいるとともに、現代にいたるまでの攪乱が顕著である。

第２節　奈良時代の遺構と遺物

第１項　南区

(1) 南区全体概要

南区において大規模な回廊と塀で取り囲まれた区画と、その中心に円形建物と考えられる建物痕跡を検出している。

円形建物（SB140）を方形に画する回廊（SC160・SC180）と塀（SA170）はいずれも 80 ～ 100cm 四方の方形掘方を持つ柱穴で構成されており、柱穴総数は北側建物（SB150）を除いて 35 基を検出している。柱は掘立柱構造で、柱間約 3m 前後を測り、柱痕跡からは直径 30cm 程度の柱が想定できる。柱はいずれも抜き取りが行われ、抜き取り後は丁寧に埋め戻されている。東・南面では一部の柱穴が斜面の崩壊により失われている。

調査の当初段階では単廊構造の回廊が全周していたと推定したが、のちの最終確認調査で北面東半分が塀（SA170）であったことが判明し、東面と南面東半分も塀構造であった可能性が高まった。南面西半が回廊であった場合、回廊中心間の推定距離は南北 37.4m を測り、内法は 34.6m となる。これに対し、東西方向は内法 36.5m を測る。

東面掘立柱列（SA170）の東面掘立柱列では円形建物（SB140）の東側正面に位置する部分で、柱穴が検出できない部分がある。攪乱が著しく断定はできないが、当該箇所には門が存在していた可能性がある。この柱穴が存在していない部分に並行して雨落ち溝と考えられる溝（SD050）が確認されている点も門の想定を補強するものである。さらにこれに直交する溝（SD002）が確認されており、門と中心建物を結ぶ参道の側溝である可能性がある。回廊（SC180）の北側で検出した溝（SD034）は当初、雨落ち溝の可能性も想定していたが、柱列との間隔や傾斜変換点に掘削されていることなどを勘案し、排水溝としての役割を持つものと判断している。これらの溝埋土からはいずれも直径 2 ～ 4cm の白色の玉石がまとまって出土しており（写真 1・2）、区画内は本来玉石敷きであったと推定される。

北面回廊・塀には東西 5 間、南北 2 間、南北梁行約 6m、東西桁行約 15m を測る東西棟の建物（SB150）が取り付く。同様の建物が南面回廊にも存在していた可能性が考えられるが、攪乱による破壊のため明確ではない。

円形建物（SB140）は 15 基（推定 16 基）の柱穴が円形に取り巻き（外周柱穴列）、その内部には長方形を基調とした浅い土坑（内周土坑列）が芯々で直径約 9.5m の円周上を巡る二重構造である。当該土坑の内側からは柱穴などの遺構は検出されなかった。この土坑からはごく少量ではあるが凝灰岩の破片が出土している。外周の柱列は直径 14.7m の円周上を巡り、柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径は長短はあるが、60cm 前後のものが多い。柱痕跡からは直径 20cm 前後の柱材の存在が推定できる。

(2) 遺構

建物

SB140（図 9 ～ 14、図版 5・7 ～ 16・19・20）

調査区中央やや南東よりで検出した円形の建物跡である。

上部を大きく削平され、部分的に攪乱により遺構が欠失していることもあり、建物構造を含めて、基壇などの下部構造についても不明確な部分が多い。

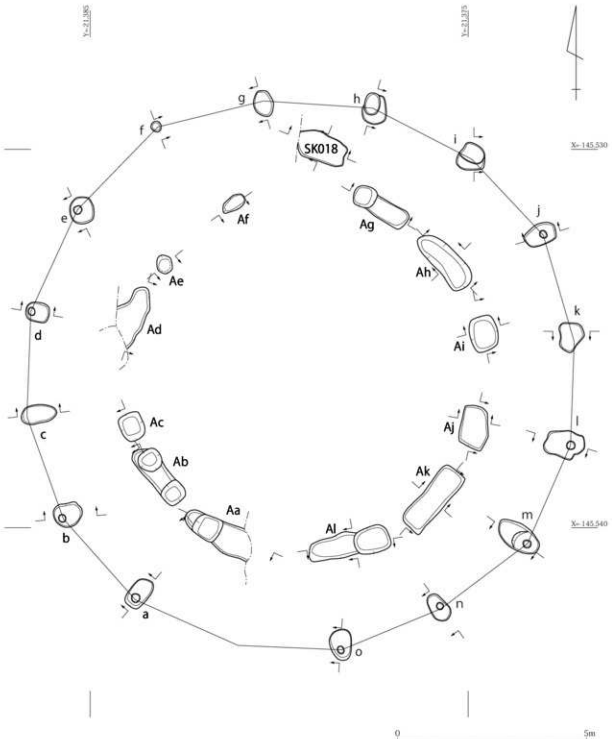


図 9　SB140 平面図（S=1/100）

当該建物の遺構は内周の坑列とその外周を巡る柱穴列で構成される。

内周土坑列は 12 基を確認しているが、北東部をはじめとして、部分的に後世の攪乱、削平によって消失もしくは不明瞭となっている。各土坑間の間隔も不均衡であり、全体の配置を俯瞰すると、内周土坑列と外周柱列は同心円状に展開する以外、放射状に直列するなどの状況は看取できない。

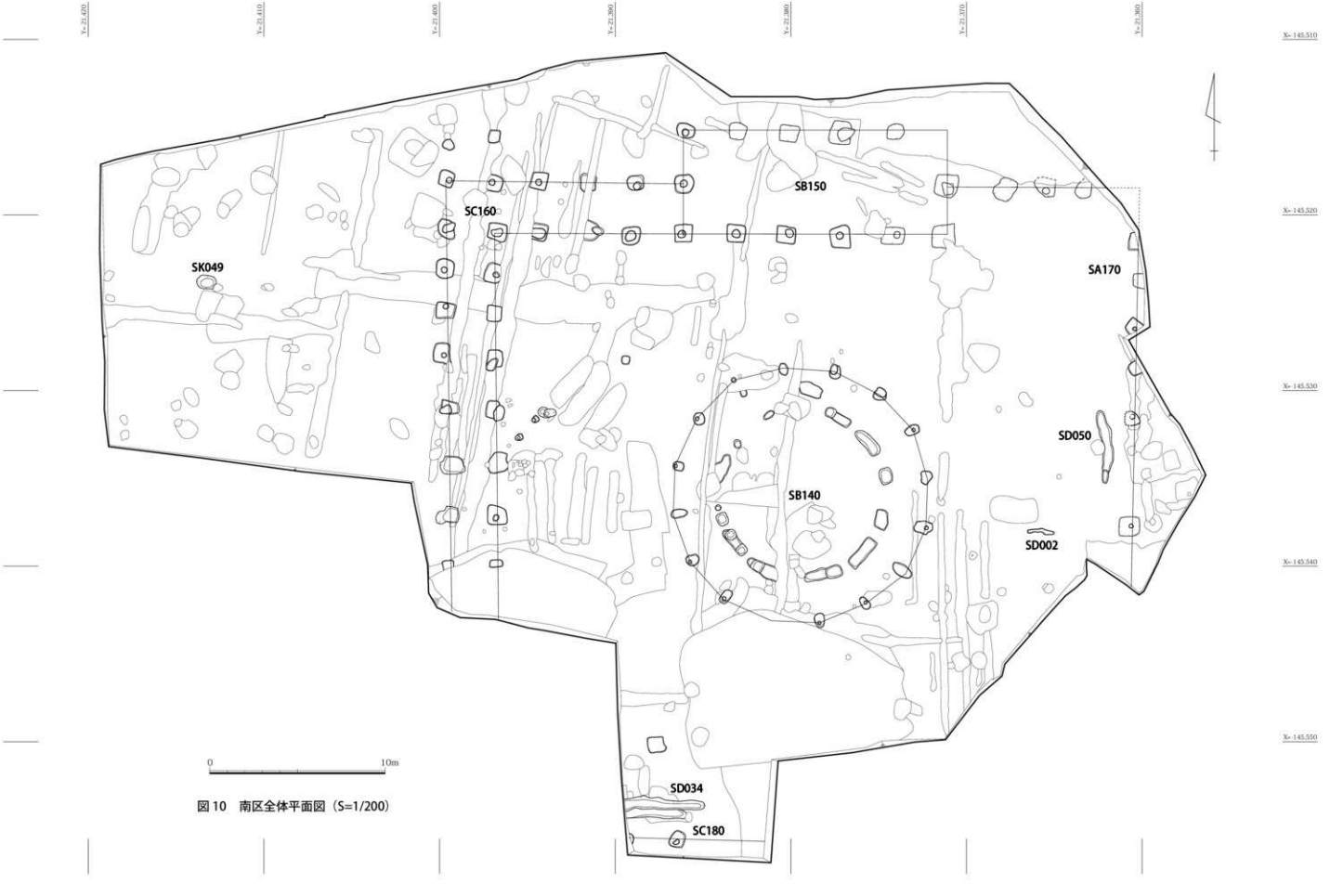


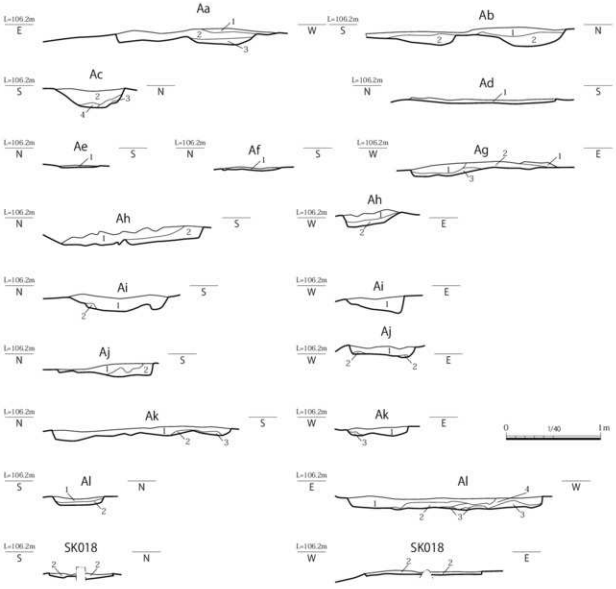
図 10　南区全体平面図（S=1/200）

平面形は基本的には矩形を呈し、円周方向に長辺をもつ長方形のを呈するものが多い。長さはばらつきがあり、1m 前後のものと 2m を超えるものもある。幅は比較的まとまっており、残りのよいものを平均すると約 70.5cm を測る。

深さに関しては上面の削平の度合いで変化しており、一様には扱えないものの、最も深い Ac で 18.3cm を測り、平均は約 13cm である。また、Ab のように部分的に土坑状に深く掘られるものもある。底面は若干の起伏はあるものの比較的平滑なものが多い。

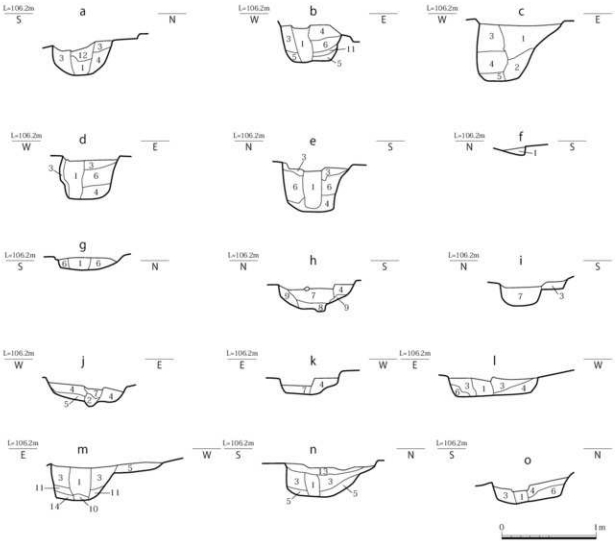
また、当該土坑列の内側からは柱穴などの痕跡はまったく検出されていない。いずれも上面を削平された状態での検出であり、整地土や盛土の痕跡は確認できていない。埋土中からの土器・瓦などの出土遺物は皆無である一方、微細ながらも凝灰岩の破片が出土している。

壁の立ち上がりはほぼ垂直で、特に Ag、Aj、Ak ではその傾向が顕著であるが、複数の土坑に円周内



1. 黄褐 10YR5/6 粗砂混中粒砂（径 10mm 前後の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
2. 黄褐 10YR5/6 粗砂混中粒砂（径 5 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
3. 黄褐 10YR5/6 中粒砂（地山ブロックを主体とする）
4. 黒褐 10YR3/1 中粒砂

図 11　SB140 内周土坑列土層断面図（S=1/40）



1. 黄褐 10YR5/6 細砂混中粒砂（径 10 ～ 20mm 亜角礫状地山ブロックを多く含む）
2. 褐 10YR4/4 中粒砂(径 10 ～ 20mmの亜角礫状地山ブロックを少量含む)
3. 明黄褐 10YR6/6 中粒砂（板状の地山ブロックを多く含む）
4. 褐 10YR4/4 中粒砂混細砂（径 5 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）
5. 明黄褐 10YR6/6 中粒砂（地山ブロックを主体とする）
6. 黄褐 10YR5/6 中粒砂（地山ブロックの含有量少ない）
7. 黄褐 2.5Y5/3 中粒砂（礫を多く含む）
8. にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂（径 5 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
9. にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂（径 20mm 前後の亜角礫状地山ブロックを多く含む）
10. 褐 10YR4/4 シルト（炭化物を少量含む）
11. にぶい黄褐 10YR5/4 中粒砂（褐色土ブロックを少量含む）
12. 黄褐 10YR5/6 中粒砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
13. 明黄褐 10YR6/6 シルト部中粒砂(径 10mm 前後の亜角礫状地山ブロックを大量に含む)

図 12　SB140 外周柱穴列土層断面図（S=1/40）

側へ石材を抜き取った痕跡が確認できる。Aj は 147°前後の角度で角を持つ痕跡も見られる。これらの事から上記の土坑については凝灰岩切石を埋設していた痕跡と判断した。Aa、Ab は長方形土坑の短辺底部にそれぞれ隅丸方形土坑が穿たれており、方形石材の上に長方形石材を埋設した可能性が考えられる。

これらの石材について、これを基壇地覆石埋設痕とみる意見もあるが、Aj の切石側辺の角度は石材の円周に合致しない（図 14）。さらに石材の規模・形状は統一性がなく、これをそのまま地覆石の下部痕跡とすることはできない。これらの土坑は基壇や亀腹造成に際して様々な形状、規模の石材（転用材）

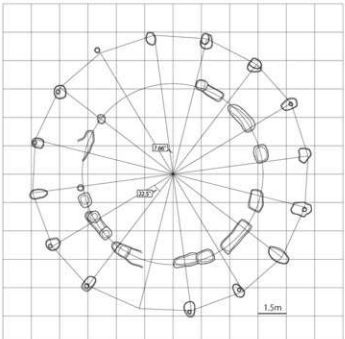


図 13　SB140 平面図（S=1/200）

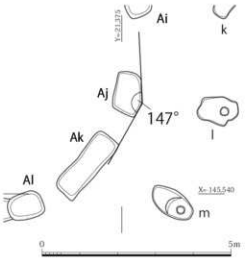


図 14　SB140Aj 掘方の角度（S=1/100）

を埋設した内護列石のような機能を想定したい。

また、北側では少し外れて SK018 を検出している。長辺 132cm、短辺 77cm、深さ 5cm で、他の土坑と共通した規模と形状をもち、当該建物に帰属する可能性がある。礼拝石の痕跡かとも考えたが、長軸方向の角度が建物全体の方位とは全く合致せず、現状ではその機能は不明である。

外周の柱列は 15 基を検出している。正確に円周を 16 等分した位置に配置されており、南南西の一つが攪乱によって消失している。

柱配置の割付は図 13 に示したとおりで、当該建物を囲繞する回廊や塀がほぼ座標系と平行するのに対して、外周柱列の基準線は座標北から西に 7.66°の振れがみられる。

柱穴は直径約 14.7m の円周上に配置されており、明瞭に柱痕跡が残る柱穴 d とその対角にあたる柱穴 l の芯々間距離は 14.71m、同様に柱穴 b-j 間は 14.78m、柱穴 e-m 間は 14.79m を測る。

個々の柱穴の平面形は放射方向に長軸をもつ楕円形、もしくは隅丸長方形を呈するものが多い。削平により旧状を留めない柱穴 f を除いた平均は長辺 83.1cm、短辺 62.2cm を測る。

深さは削平の度合いにより一様ではなく、最も深い柱穴 c では 65.0cm を測り、平均すると 31.4cm である。また、柱痕跡に関しては掘方のやや外側寄りから検出されることが多い。柱痕跡の直径は最大で約 20cm、最小で約 12cm、平均すると約 17cm である。柱はいずれも抜き取られている。

遺物は柱穴 b・g・o から土師器細片、柱穴 h から土師器細片に加えて、柱抜き取り痕から瓦片が出土しているが、いずれも細片で図化に耐えるものではない。

SB150（図 15・16、図版 5・17・21 ～ 23）

調査区北側で検出した桁行 5 間、梁行 2 間の東西棟掘立柱建物で、西側では SC160、東側では SA170 に接続する。規模は桁行 14.99m、梁行 5.81m を測る。

柱間は桁行方向では若干のばらつきはあるものの、およそ 3m を前後するものが多い。平均すると 3.03m であり、10 尺で設計されていた状況が看取される。梁行方向は、平均では 2.90m となり、桁

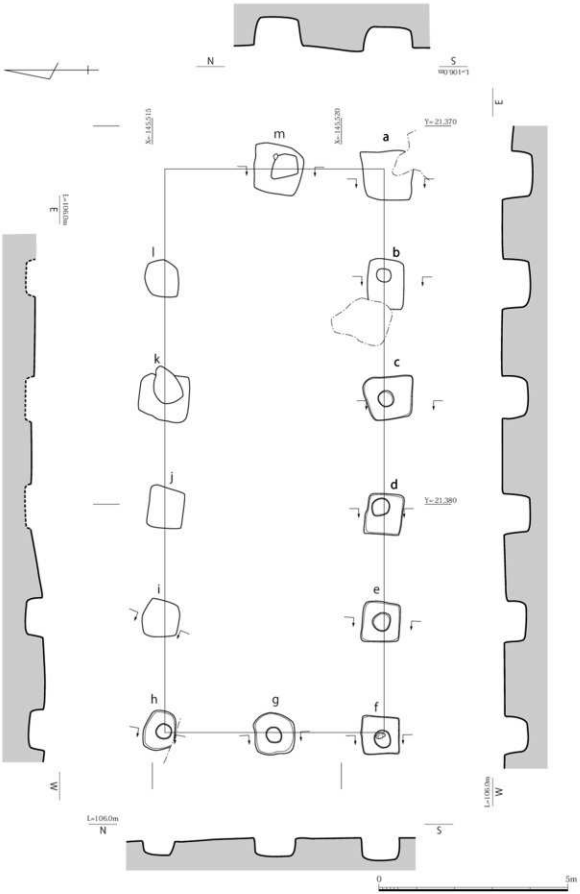
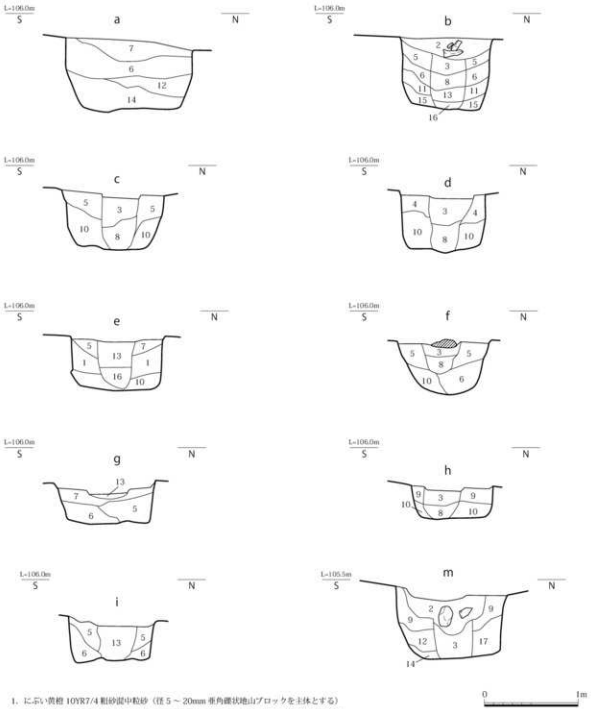


図 15　SB150 平面・断面図（S=1/100）



1. にぶい黄橙 10YR7/4 粗砂混中粒砂（径５～20mm 亜角礫状地山ブロックを主体とする）
2. 明黄褐 10YR6/6 粗砂混中粒砂（径 10mm 前後の亜角礫状地山ブロック・炭化物少量含む）
3. 黄褐 10YR5/6 シルト混中粒砂（炭化物を少量含む）
4. 明黄褐 10YR6/6 粗砂混中粒砂（径 5mm 前後の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
5. 明黄褐 10YR7/6 粗砂混中粒砂（径５～ 30mm 前後の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
6. 黄褐 10YR5/6 粗砂混中粒砂（径５～ 30mm 前後の亜角礫状地山ブロックを多く含む）
7. 明黄褐 10YR6/6 粗砂（径５～ 10mm の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
8. 浅黄 2.5Y7/4 中粒砂（径５～ 10mm の亜円礫状地山ブロックを多く含む）
9. 浅黄 2.5Y7/4 中粒砂（８層に比して地山ブロック少ない）
10. 浅黄 2.5Y7/3 粗砂混中粒砂（径５～ 20mm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）
11. 明黄褐 10YR6/6 中粒砂（地山ブロックを主体とする）
12. 浅黄 2.5Y7/3 粗砂混中粒砂（10 層に類似）
13. 浅黄 2.5Y7/3 中粒砂（地山ブロックを主体とする）
14. 黄褐 10YR5/6 粗砂混中粒砂（径３～ 10mm の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
15. 黄褐 10YR5/6 粗砂（径５～ 30mm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）
16. 黄褐 10YR5/4 中粒砂混粗砂（径５～ 10mm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）
17. 浅黄 2.5Y7/3 中粒砂（地山ブロック少なく径 20mm 前後の角礫を多量に含む）

図 16　SB150 柱穴土層断面図（S=1/40）

行の柱間に比してやや短めである。

柱穴は東西方向にやや長い傾向がみられるものの、ほぼ正方形を呈し、一辺 1.1m 前後のものが多い。深さも最深のものは 78cm を測り、平均すると約 58cm である。柱痕跡は平均して直径約 43cm である。西側棟持柱にあたる柱穴 g では根固め石を検出している（図版 22 下）。

遺物の出土は南東側の柱穴で顕著で、柱穴 a ～ d・m から土器片、瓦片が出土している。多くは細片であるが、柱穴 c からは土師器杯 B、柱穴 m からは軒平瓦（6711B）が出土している。

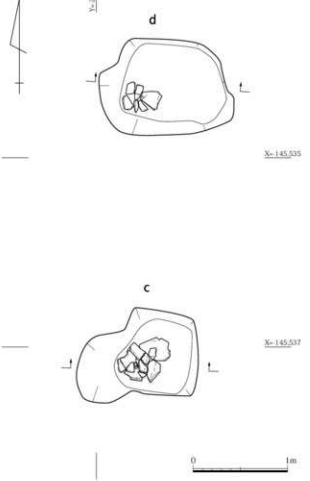


図 17　SC160c・d 根固め石検出状況（S=1/40）

回廊

SC160（図 17 ～ 20、図版 17・18・23 ～ 29）

調査区北西で検出した掘立柱の回廊である。

構造は単廊で、北辺では 5 間分を検出し、西辺では 8 間分を検出している。西辺は調査区南端で大きく攪乱、削平されているほか、調査区外へとのびているため全容は不明である。

北辺は SB150 との接合部分から西端までで約 13.5m を測る。柱間にはややばらつきがあり、北辺の北側柱列の柱間は、最長が 2.80m、最短が 2.47m で平均すると 2.63m、標準偏差は 0.1263 である。南側柱列の柱間は最長 2.90m、最短は 2.26m で平均 2.76m、標準偏差 0.2499 でばらつきが大きい。とくに西辺との接続部である柱穴 k-l 間、柱穴 q-r 間は柱間が短い。延長が 13.5m で 5 間であることからすると、計算上の 1 間は 2.7m となり、9 尺を基本に設計されていた可能性もある。

西辺は調査範囲内で北端からの検出長 22.24m を測る。西辺の西側柱列の柱間は、最長が 3.15m、最短が 2.34m を測り、平均すると 2.78m、標準偏差は 0.2283 である。また、東側柱列の柱間は、最長が 3.00m、最短が 2.40m で平均すると 2.74m で標準偏差は 0.2718 である。北辺同様に設計上は柱間 9 尺を基本として設計されていた可能性が高い。

また、回廊幅の柱間寸法に関しては、比較的近似しており、最長は 2.98m、最短は 2.70m を測る。平均は 2.83m で標準偏差は 0.0923 で、ばらつきは少ない。

柱穴はほぼ正方形を呈するものが多く、攪乱により原形を留めない柱穴 a・b を除く平均は東西 96.1cm、南北 101.1cm を測る。なお、北東側の柱穴掘方は柱穴 j ～ l、柱穴 q ～ s などでは回廊の軸線に対して、斜めに触れている状況が看取される。振れ幅は北側で東に 7.6 ～ 17.4°であり、平均は 12.9°である。深さは柱穴 a・b を除くと、最深のものが 91cm、平均すると 56cm を測る。柱穴 c・d の底面からは板状の石材がまとまって出土しており、柱痕跡と対応している状況が看取される。このような造作は一部の柱穴に限られ、地山は比較的堅固であることなどを勘案すると、柱の不陸調整のために柱下面に埋置されたものの可能性もある（図 17）。柱痕跡の直径は SB150 よりも若干細い傾向がみ

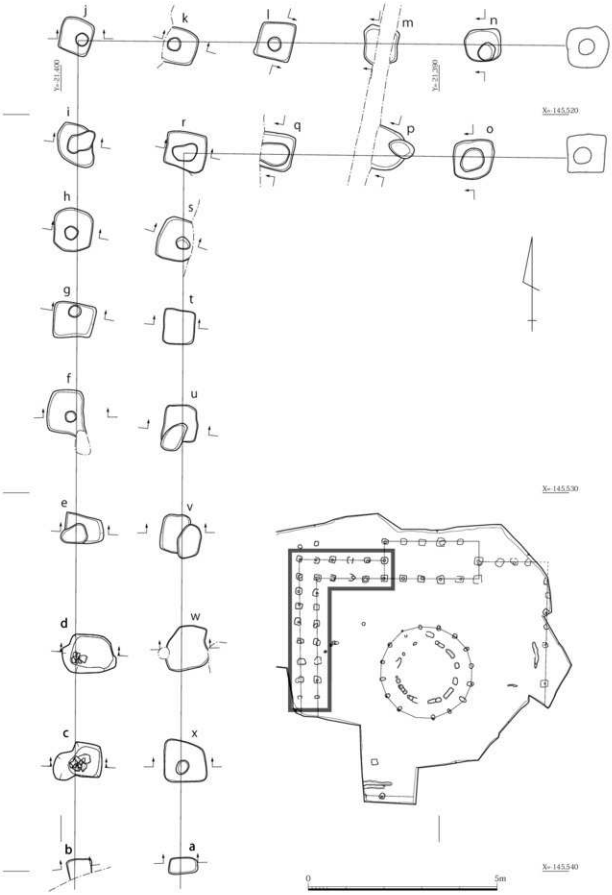


図 18　SC160 平面図（S=1/100）

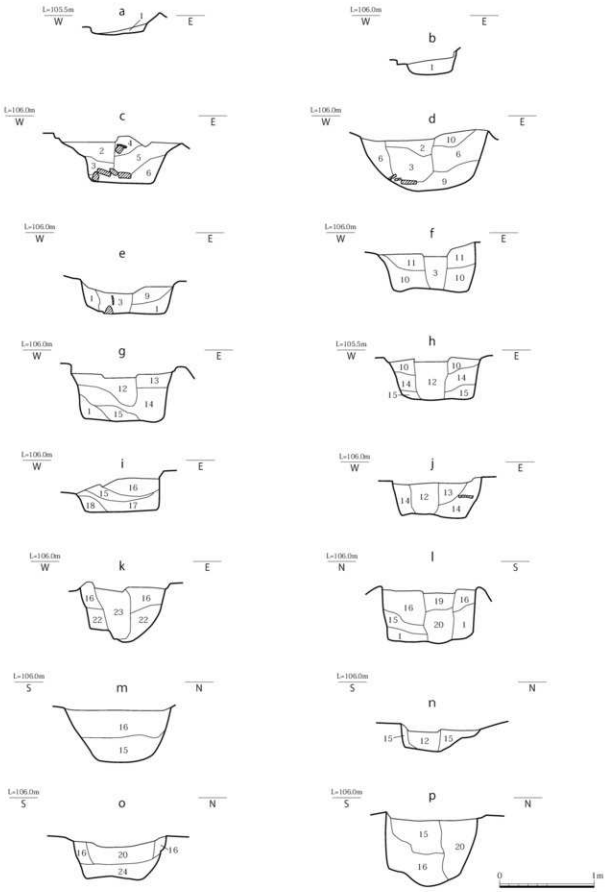
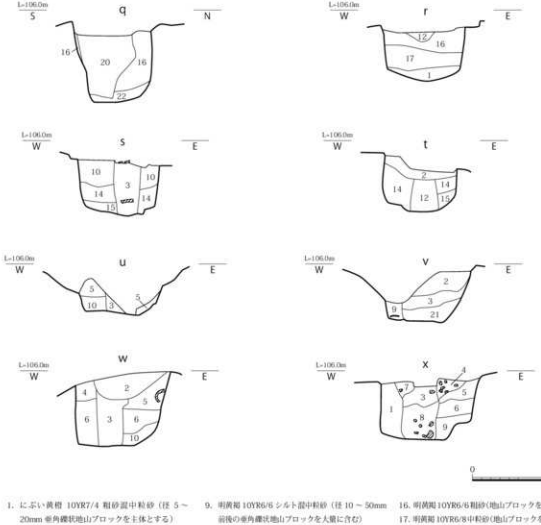


図 19　SC160 柱穴土層断面図（1）（S=1/40）



1. にぶい黄橙 10YR7/4 粗砂混中粒砂（径５～20mm 亜角礫状地山ブロックを主体とする）
2. 明黄褐 10YR6/6 粗砂混中粒砂（径 10mm 前後の亜角礫状地山ブロック・炭化物を含む）
3. 黄褐 10YR5/6 シルト混中粒砂（炭化物を少量含む）
4. 明黄褐 10YR6/6 粗砂混中粒砂（径 5mm 前後の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
5. 明黄褐 10YR7/6 粗砂混中粒砂（径５～30mm 前後の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
6. 黄褐 10YR5/6 粗砂混中粒砂（径５～30mm 前後の亜角礫状地山ブロックを多く含む）
7. 黄褐 10YR5/6 シルト混中粒砂（径５～10mm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）
8. 黄褐 10YR5/6 粗砂混中粒砂（礫を大量に含む）
9. 明黄褐 10YR6/6 シルト混中粒砂（径 10～50mm 前後の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
10. 明黄褐 10YR6/6 粗砂（径５～10mm の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
11. 明黄褐 10YR6/6 粗砂（径５～10mm の礫を大量に含む）
12. 浅黄 2.5Y7/4 中粒砂（径５～10mm の亜円礫状地山ブロックを多く含む）
13. 浅黄 2.5Y7/4 中粒砂（径５～20mm の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
14. 浅黄 2.5Y7/4 中粒砂（13 層に比して地山ブロック少ない）
15. 浅黄 2.5Y7/3 粗砂混中粒砂（径５～20mm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）
16. 明黄褐 10YR6/6 粗砂(地山ブロックを主体とする)
17. 明黄褐 10YR6/8 中粒砂(地山ブロックを主体とする)
18. 浅黄 2.5Y7/3 粗砂混中粒砂（15 層に類似）
19. 明黄褐 10YR6/6 中粒砂（径５～10mm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）
20. 浅黄 2.5Y7/3 中粒砂(地山ブロックを主体とする)
21. 黄褐 10YR5/6 粗砂（径３～10mm の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
22. 黄褐 10YR5/6 粗砂（径５～20mm の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
23. 黄褐 10YR5/4 中粒砂混粗砂（径５～10mm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）
24. 浅黄 2.5Y7/3 粗砂(径５～50mm の礫を主体とする)
25. 浅黄 2.5Y7/3 中粒砂（地山ブロック少なく径 20mm 前後の角礫を多量に含む）

図 20　SC160 柱穴土層断面図（2）（S=1/40）

られ、平均して 37cm である。

柱穴ｅ・ｉ・ｐ・ｕでは柱の抜き取り穴が検出されているが、方向は一定しない。

SC160 を構成する柱穴からは、柱穴ａ・ｂ・ｋ・ｌ・ｎ～ｐを除いて遺物が出土している。多くは土器、瓦の細片であるが、柱穴 c･x からは凝灰岩片が出土しいるほか、柱穴ｗからは小型丸瓦が出土している。

また、特筆すべきは柱穴ｈ・ｇの掘方埋土中から円形の鉄製品が出土している点である。隣り合う柱穴に意図的に埋納された可能性が高いものと判断している。鉄製円盤は柱掘方南東隅底部付近から出土している（図版 29 下）。

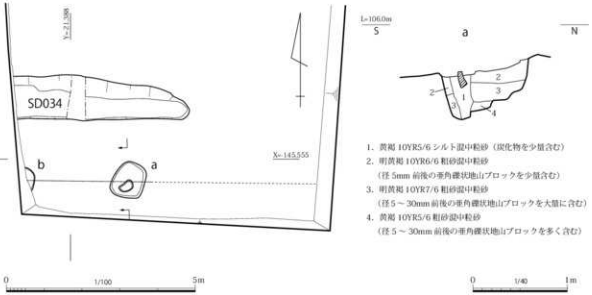


図 21　SC180 平面図（S=1/100）・柱穴土層断面図（S=1/40）

SC180（図 21、図版 18）

調査区南端で検出した柱穴列で、北側約 2m の位置で平行する SD034 を検出している。

東半は削平や攪乱により、東西に並ぶ 1 列 1 間分の柱穴列を検出したに留まり、厳密には遺構の性格の特定は難しい。ただし、当遺跡で検出された囲繞施設をみた場合、西面は単廊となっており、そのつながりを考えた場合、南面においても、西半部は回廊であったと考えるのが穏当であると判断し、SC180 とした。

また、東側の柱穴 a に関しては、北辺における建物（SB150）の建物西面と南北対称の位置関係にあり、南面においても、北面と同様の建物が存在していた場合、この柱穴は建物北西隅柱に該当することとなる。この場合、厳密には両柱穴が別の構造物に帰属するものとなり、別個に報告すべきところであるが、本報告では上記の状況を踏まえつつ、一括で報告する。

柱穴 b は大半が調査区外であるものの、柱穴 a との柱間は 3m 前後であったと考えられる。a は平面はいびつな長方形で南北 96.5cm、東西 85.1cm を測る。深さは 49.7cm、柱痕跡の直径は 20.9cm である。

遺物は柱穴 a から土師器と瓦の細片が出土しているのみである。

塀

SA170（図 22・23、図版 30）

調査区北東で検出した掘立柱塀である。

SB150 の棟持柱から東にのびる柱穴列を検出し、その延長で南に向かって直列する柱穴列を検出しており、これらを一連のものと考え、合わせて SA170 としている。

当初、西側と同様に回廊を巡ることを想定していたが、SB150 南面の延長線上の平面精査に加えて、サブトレンチによる下層確認でも柱穴は確認できず、結果、東側は掘立柱塀であったと判断している。

北辺の柱穴は 3 基を検出している。攪乱や柱の抜き取り穴の影響で、やや不整形である。柱間は柱穴 g-h 間が 2.21m、柱穴 h-i 間が 2.36m と狭く、柱穴 i-SB150m 間が 3.19m とやや広い。東辺の柱穴も調査区端にあたり、かつ攪乱や削平が及んでいることもあり、不明確な部分が多い。柱間は柱穴 a-b

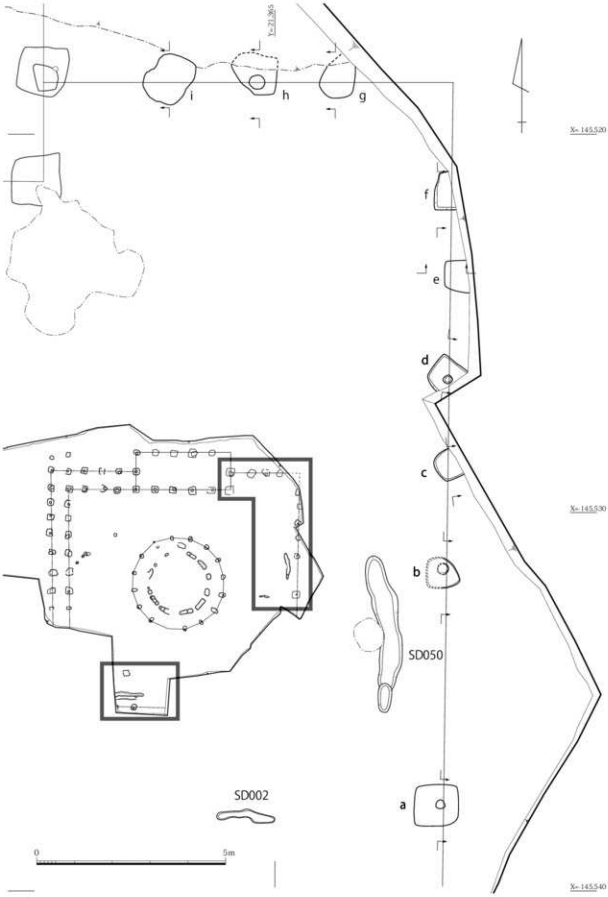
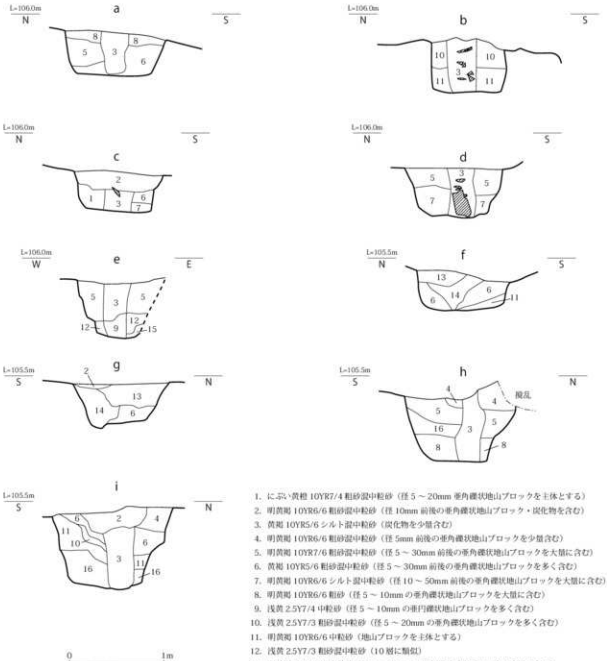


図 22　SA170 平面図（S=1/100）



1. にぶい黄橙 10YR7/4 粗砂混中粒砂（径 5 ～ 20mm 亜角礫状地山ブロックを主体とする）
2. 明黄褐 10YR6/6 粗砂混中粒砂（径 10mm 前後の亜角礫状地山ブロック・炭化物を含む）
3. 黄褐 10YR5/6 シルト混中粒砂（炭化物を少量含む）
4. 明黄褐 10YR6/6 粗砂混中粒砂（径 5mm 前後の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
5. 明黄褐 10YR7/6 粗砂混中粒砂（径 5 ～ 30mm 前後の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
6. 黄褐 10YR5/6 粗砂混中粒砂（径 5 ～ 30mm 前後の亜角礫状地山ブロックを多く含む）
7. 明黄褐 10YR6/6 シルト混中粒砂（径 10 ～ 50mm 前後の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
8. 明黄褐 10YR6/6 粗砂（径 5 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
9. 浅黄 2.5Y7/4 中粒砂（径 5 ～ 10mm の亜円礫状地山ブロックを多く含む）
10. 浅黄 2.5Y7/3 粗砂混中粒砂（径 5 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）
11. 明黄褐 10YR6/6 中粒砂（地山ブロックを主体とする）
12. 浅黄 2.5Y7/3 粗砂混中粒砂（10 層に類似）
13. 明黄褐 10YR6/6 中粒砂（径 5 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）
14. 浅黄 2.5Y7/3 中粒砂（地山ブロックを主体とする）
15. 黄褐 10YR5/6 粗砂混中粒砂（径 3 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
16. 黄褐 10YR5/6 粗砂（径 5 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロックを少量含む）

図 23　SA170 柱穴土層断面図（S=1/40）

間が6.21mで、2間分の長さを有している。位置的には中央建物SB140の中心に対応する場所にあたり、当該箇所に東門が存在した可能性が高い。その北側の柱間は 2.15m から 2.73m とバラつきがあり、平均すると 2.47m となる。

個々の柱穴に関してはその一部が調査範囲外であったり、撹乱によって削平されていたりするものが多いが、おおむね一辺 90cm 前後の不整な正方形を呈するものが多い。深さは 41.3cm から 88.0cm でばらつきがあり、平均は 57.1cm である。柱痕跡の直径は平均すると 28.3cm で、SB150 や SC160 に比してやや細めである。

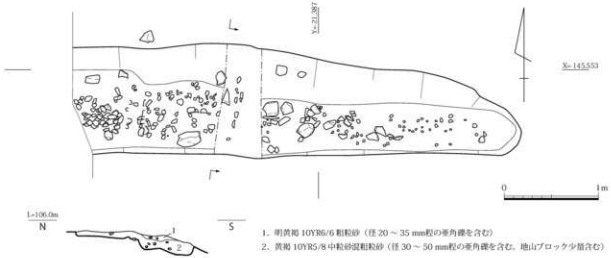


図 24　SD034 平面・断面図（S=1/40）

SA170 を構成する柱穴からは、柱穴 c を除いて遺物が出土している。多くは土器や瓦の細片であるが、柱穴 h からは鉄釘と考えられる鉄製品が出土している。

溝

SD002

調査区東側で検出した東西溝である。検出地点周辺は後世に大きく削平されており、当該溝も一部が残るのみである。長さは 1.53m、幅 0.18 ～ 0.28m、深さ 0.06m を測る。この溝は東門を構成する可能性もある柱穴 SA170a の真西に位置し、中央建物 SB140 に向かってのびるものである。

土器や瓦は出土していないが、チャートなどの礫がまとまって出土している。礫はやや角がとれた亜角礫で大きさは 1.0 ～ 3.3cm で 2cm 前後のものが 145 点を数える。この溝を南側溝とする玉砂利敷の参道の存在が示唆されるものである。

SD034（図 24、図版 30・31）

調査区南側で検出した東西溝である。SC180 と平行し、両者の間隔は芯々距離で 1.96 ～ 2.05m である。西端は調査区外となる。北側は緩やかに落ち込み、南側では 0.59m の幅で一段深く掘り込まれている。検出長は 4.59m、最大幅 1.14m、深さは 0.23m である。

埋土中からは瓦片が出土しており、軒平瓦 6711B 型式 2 点のほか、「西」の刻印を持つ平瓦が出土している。このほか、SD002 と同様に埋土中からはチャートなどの亜角礫が 423 点出土している。礫の大きさは SD002 のものよりも大きく、1.2 ～ 9.0cm と幅があり、3.0 ～ 3.5cm のものが多い。軒の出を考えると、SC180 の雨落ち溝とはしがたく、排水溝であった可能が高い。

SD050

調査区の東側で検出した南北溝である。SD002 と同様に上面は大きく削平を受けており、元来の形を留めていない可能性が高い。現状ではゆるやかに湾曲するものの、SA170 と平行しており、両者の間隔は芯々間距離で 0.76m ～ 0.97m である。検出長は 4.15m、幅は最大で 0.72m、深さは 0.05m である。

出土遺物は瓦の細片が約 20 点出土しているが、原形を留めているものはない。

SA170 の柱穴 a-b 間に想定される東門の雨落ち溝の可能性が高いものと判断している。

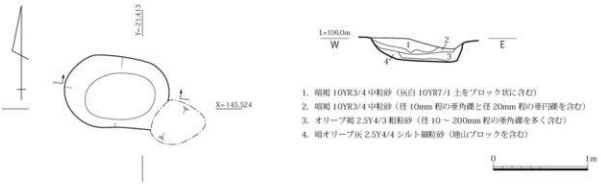


図 25　SK049 平面・断面図（S=1/40）

土坑

SK049（図 25）

調査区の西側、SC160 西側柱列からは約 13.7m の地点で検出した土坑である。平面形は東西方向に長い長楕円形で、長径 1.11m、短径 0.77m、深さ 0.23m を測る。壁面等は焼けていないが、埋土中には多量の炭化物を含んでいる。骨片・鉄釘等はみられない。性格は不明ながらも、埋土中からは土師器甕の破片が出土したことから奈良時代の遺構と判断している。

整地土

遺構ではないが、南区および周辺の確認調査で検出した盛土による地業の痕跡について触れておく。

南区の調査では、調査地の北東側で整地土を確認している。現況地形を俯瞰してもわかるように、方形に囲繞された区画のうち、北東隅が斜面に張り出す形となっている。この地形は東側の池や北東側谷部の耕作地造成時に改変されてはいるが、この地形に沿う形で整地土による地業の痕跡を確認している（整地土Ⅰ）。

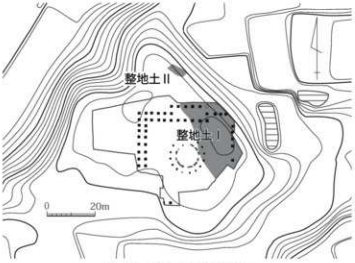


図 26　整地土の分布状況

現況地形をみる限りでは、もう少し西側に全体をずらすことによって、大きな造成を行わずとも方形区画を配置できるが、わざわざ北東部分を整地土による地業を行い、平坦面を確保して東寄りに造営を行っている。

また、造成工事が進む中で実施した最終確認調査では、方形囲繞区画の北側でも遺物を包含する土層を確認している（整地土Ⅱ）。

整地土Ⅱは断面観察と部分的に掘削調査を実施したのみであり、整地土Ⅰとの関係は不明であり、整地土としてはいるが、人為的なものではない可能性もある。

(3) 遺物

建物

SB150 出土遺物（図 27、図版 35）

土師器杯（1） 土師器杯Ｂである。外面はナデ調整ののち、横方向のヘラミガキ調整を施し、口縁部内面には密な斜放射暗文が残る。見込みは表面劣化のため、調整不明である。

土師器皿（2） 器表面は剥離するなど劣化が著しく調整は不明である。

須恵器蓋（3） 杯蓋である。全体に回転ナデ調整を施す。

須恵器杯（4） 杯Ａである。焼成が甘く、内外面とも表面劣化のため調整は不明である。生駒産か。

瓦塼類（5 ～ 10） 5 は均整唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎Ｉであり、特徴的な瓦当文様から 6711B 型式と判断できる。同型式の軒平瓦は SD034（36・37）、整地土（58）からも出土している。 6・7 は丸瓦である。6 は玉縁が残る。外面は縄タタキ後、ナデ消し調整を施す。内面は表面劣化のため、調整不明である。玉縁は厚さ 0.8cm 前後で非常に薄く、丸瓦の復元幅は約 12cm を測る。小型瓦である。7 は外面は縄タタキ後、ナデ消し調整を施す。内面は布目痕が残る。厚さは約 1.4cm と薄く、復元幅約 11cm の小型瓦である。8 ～ 10 は平瓦である。8 は内外面ともに表面が劣化しており、調整は不明瞭であるが、凹面にはかすかに布目痕が残る。厚さが 1.6cm 前後で小型瓦の可能性がある。9 は凸面は縄タタキ、凹面は表面劣化のため調整不明である。厚さは 1.4cm であり、小型瓦であると考えられる。10 は凸面は細かい縄タタキ調整、凹面は布目が残る。端面はケズリ調整で側面は凸面側の面取り調整を行う。厚さは 1.2 ～ 1.4cm 前後で小型瓦と考えられる。

鉄製品（11） Ｌ字形を呈する鉄製品である。錆によって形状が不明瞭となっているが、Ｘ線画像をみると、屈曲部がやや鈍角であることから、鑿の可能性も考えられる。

回廊

SC160 出土遺物（図 28 ～ 30、図版 36 ～ 38）

瓦塼類（12 ～ 22） 12 ～ 17 は丸瓦である。12 は幅 9.7cm の小型瓦である。他例に比して焼成が堅緻であり、小型瓦であるにも関わらず、1.8cm 前後の厚みをもつなど、特徴的な瓦である。凸面は丁寧なナデ調整、凹面には粗い布目が残る。端面はケズリ調整を施す。玉縁は凸面側をヘラケズリによる面取り調整とし、台形状に成形されている。1981 年調査で出土した小型丸瓦Ⅲ類と共通する（菅原遺跡調査会 1982）。13 は全体に表面が劣化しており、調整は不明である。厚さは 1.0 ～ 1.2cm で小型瓦である可能性が高い。14 は SC160s と SC160t から出土した破片が接合する。外面は表面劣化のために調整は不明である。内面には粗い布目痕が残る。厚さは約 1.1cm で非常に薄い。幅は 11 ～ 12cm 前後に復元できる小型瓦である。15 は外面は表面劣化のため調整は不明である。内面は粗い布目痕が残る。内面端部は面取りを行う。厚さは 1.4cm 前後と薄く、幅が 10cm 前後に復元される小型瓦である。16 は全体に表面劣化のため調整は不明である。17 は全体に表面が劣化のため調整は不明である。18 ～ 22 は平瓦である。18 は広端面隅の破片である。内外面ともに表面劣化が著しいが、凸面には全面に幅 3 ～ 4mm の条痕が残る。この条痕部分では砂粒の動きが見られず、押圧によるものと考えられるが成因は不明である。厚さは約 1.5cm で、小型瓦である可能性がある。19 は外面は縄タタキ調整、内面は表面劣化のため調整不明である。20 は凸面は縄タタキ調整、凹面には布目痕が残る。21 は凸面は縄タタキ調整、凹面は表面劣化により調整は不明である。割口が直角であり、全体をほぼ半裁した位置にあたることから割熨斗瓦であった可能性が残る。22 は凸面は縄タタキ、凹面は表面劣化のため、調整は

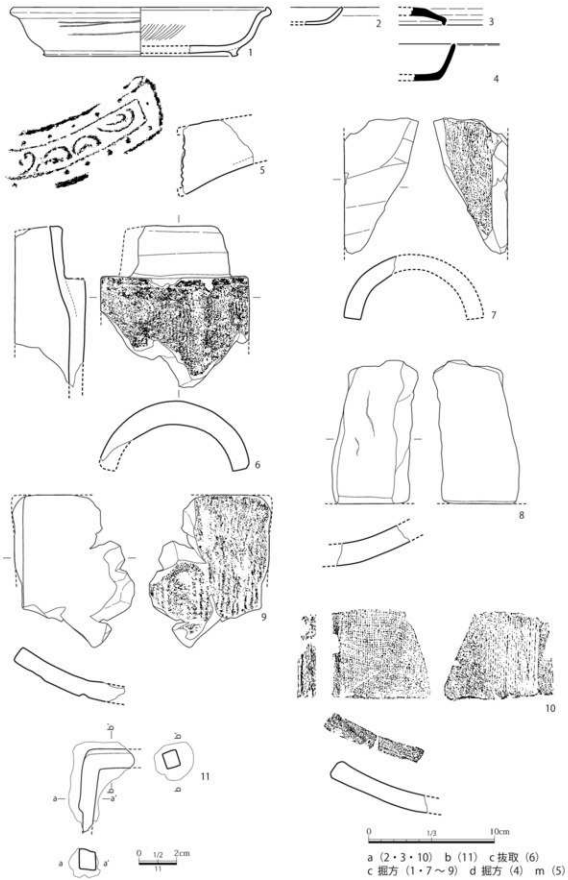


図 27　SB150 出土遺物実測図（1）（S=1/2・1/3）

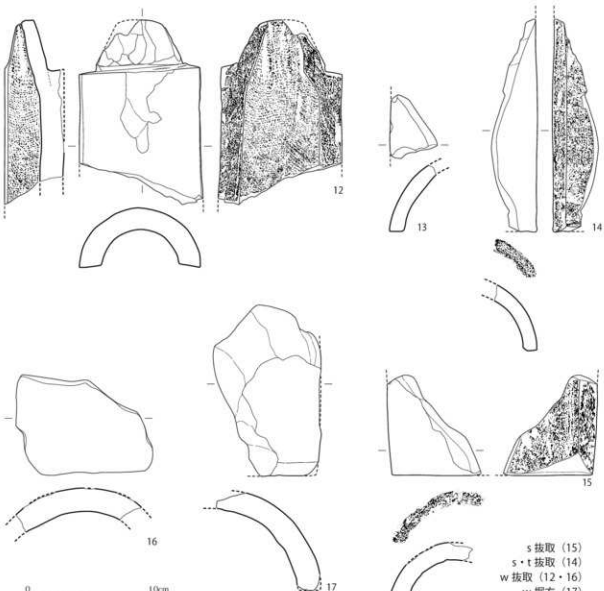


図 28　SC160 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

不明である。一方の割口が直角かつまっすぐに割れており、割熨斗瓦であった可能性がある。

鉄製品（23・24）　23・24 ともに鉄製円盤であり、隣接する柱掘方から出土したものである。両者ともに錆が著しく表面が荒れているが、X 線画像で確認すると、穿孔や鉗などの突起、文様などは確認できず、いずれも無文の円盤である。23 は最大径 6.0cm、最大厚は 1.0cm を測る。厚さは錆によって膨らんでおり、地金が残る部分でみると、元来は 3 ～ 5mm であった可能性がある。24 は直径 5.9cm、最大厚 1.3cm である。23 同様に錆による膨れがあり、厚さは地金部分のみであれば 3 ～ 5mm であったと考えられる。24 は輪郭の一部を若干欠いているものの、法量的には 23 と近似しており、直径 2 寸を意図して、同一規格で作られた一連の鉄製品であると考えられる。

石製品（25）　凝灰岩切石の破片である。一面のみ平滑に仕上げられた平坦面を残している。

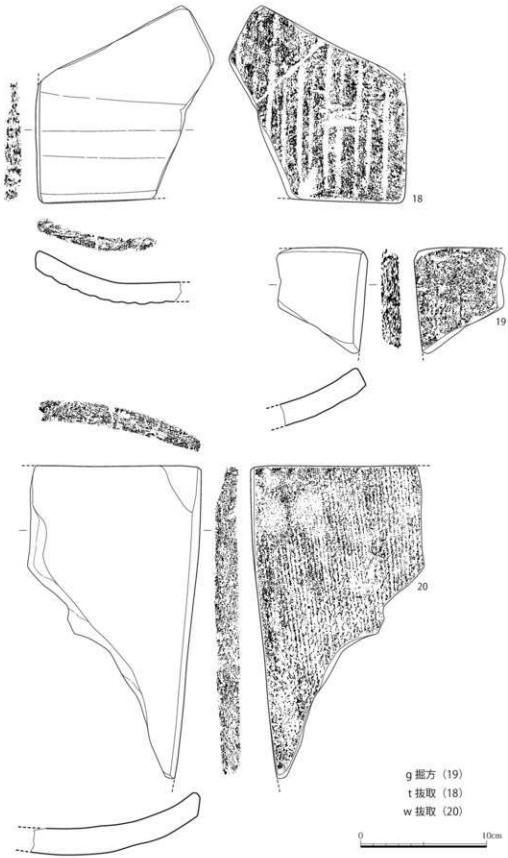


図 29　SC160 出土遺物実測図（2）（S=1/3）

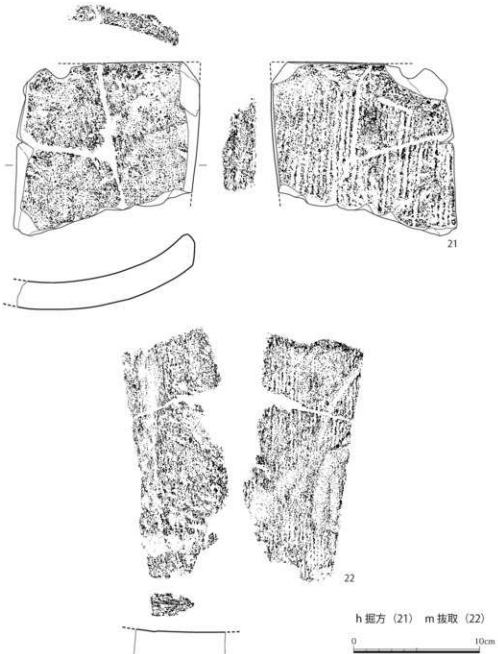


図 30　SC160 出土遺物実測図（3）（S=1/3）

SC180 出土遺物（図 32、図版 38）

瓦塼類（26）　平瓦である。凸面は縄タタキ調整、凹面は布目痕が残る。

柵

SA170 出土遺物（図 33・34、図版 39）

土師器皿（27）　土師器皿である。全体に分厚く、口縁端部は丸く仕上げられる。全体にヨコナデ調整と考えられるが、表面劣化により調整は不明である。

瓦塼類（28 ～ 33）　28・29 は丸瓦である。28 は凸面はナデ調整を施すが、部分的に縄タタキ痕が残る。凹面は布目痕と糸切痕が残る。29 は凸面はナデ調整を施すが、縄タタキ痕が部分的に残る。凹面

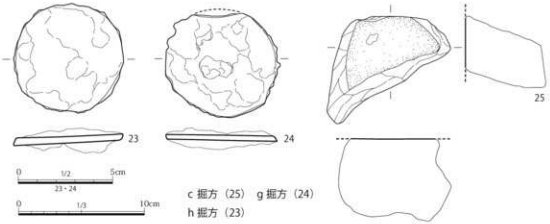


図 31　SC160 出土遺物実測図（4）（S=1/2・1/3）

図 32　SC180 出土遺物実測図（S=1/3）

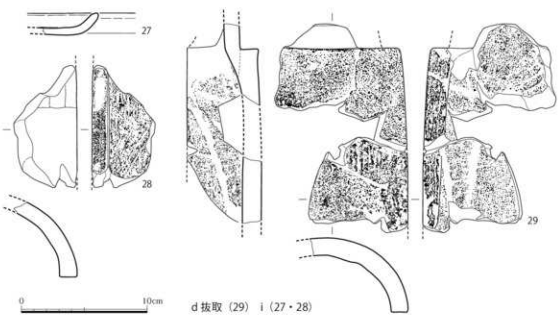


図 33　SA170 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

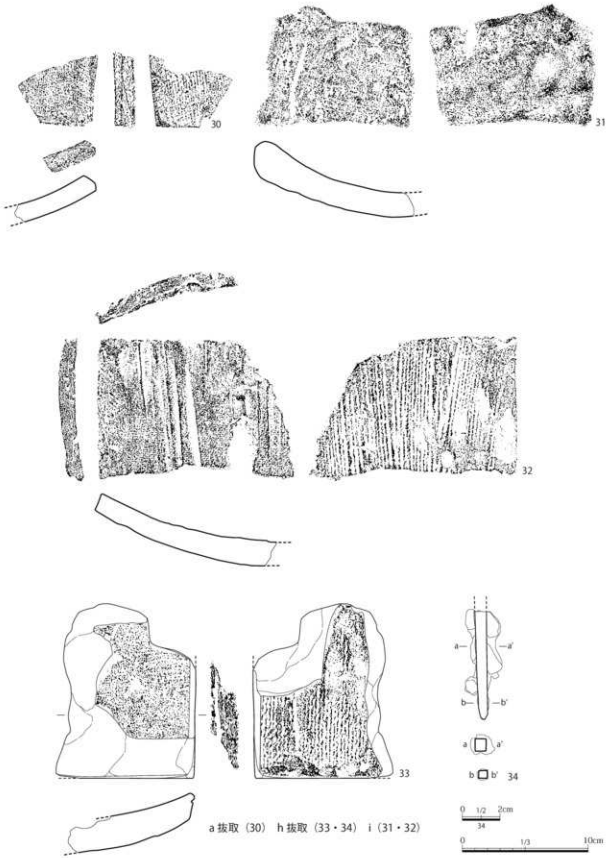


図34　SA170 出土遺物実測図（2）（S=1/2・1/3）

は布目痕が残る。端面はケズリ調整である。30 ～ 33 は平瓦である。30 は凸面は細かい縄タタキ痕が残り、凹面に糸切痕と布目痕が残る。側面はケズリ調整で側端面は凸面側を面取りする。厚さは 1.5cm 前後で小型瓦であると考えられる。須恵質で堅緻な焼成であり、側端面の面取りの特徴は SB150a から出土した 10 と共通する。31 は凸面、凹面ともに布目痕が残る。側端部が分厚く、凸面には指頭圧痕による凸凹が顕著である。凸面押圧技法によって製作されたもので、瓦当は残らないが、軒平瓦であった可能性が高い。凸面押圧技法は東大寺および西大寺の造瓦司にみられる技法であり、「西」刻印瓦（41）とともに重要な位置を占めるものである。32 は凸面は縄タタキ調整で側端部近くに指頭圧痕が残る。凹面は布目痕が残り、幅 0.5 ～ 1.0cm 前後の短冊状の圧痕がみられる。33 は凸面は縄タタキ調整で、部分的に指頭圧痕が残る。凹面は布目痕が残る。側面はいずれもヘラケズリ調整である。

鉄製品（34） 上部を欠損するものの、形状から鉄釘であると考えられる。

溝

SD002 出土遺物

石製品（写真 1） 図化はしていないが、チャートなどの礫がまとまって出土している。礫はやや角がとれた亜角礫で大きさは 1.0 ～ 3.3cm。2cm 前後のものが主流を占め、総数 145 点を数える。これらの礫は白色のものを主体とし、褐色、褐灰色のものが混じる。持ち込まれて路面等に敷かれていた可能性が高い。

写真 1　SD002 出土礫

SD034 出土遺物（図 35 ～ 38、図版 40・41）

土器類　土師器の細片が数点含まれるのみで、図化に耐えうるものはない。

瓦塼類（35 ～ 43） 軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土している。細片も含めた破片数で約 280 点の瓦片が出土している。当該遺構出土瓦の特徴は、6711B 形式の軒平瓦が複数出土している点、「西」刻印の平瓦を含む点である。また、当該遺構では確実な小型瓦は確認できない。平瓦はいずれも一枚作りで、出土した瓦全般に焼成不良で土師質あるいは瓦質の瓦が目立っている。遺構の報告でも触れたように、当該溝は SC180 に関係する排水溝と考えており、その関連において出土瓦の組成は重要な位置を占めている。35・36 は均整唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎Ⅰで 6711B 型式である。いずれも瓦当部分を含め、全体に表面が劣化しており、36 の凹面に布目痕が残る以外、調整は不明である。35 の外区珠文の右上隅には范傷がある。37 は丸瓦である。全体に表面劣化のため調整は不明である。凹面には布目痕がかすかに残る。復元幅は約 14cm である。38 ～ 43 は平瓦である。38 は凸面は縄タタキ調整、凹面には布目痕が残る。端面はケズリ調整し、側端面は凹面側を幅広く面取りする。39 は凸面は縄タタキ調整を施す。矩形の当たり痕が残り、刻印の可能性を考慮して観察を行っ

写真 2　SD034 出土礫

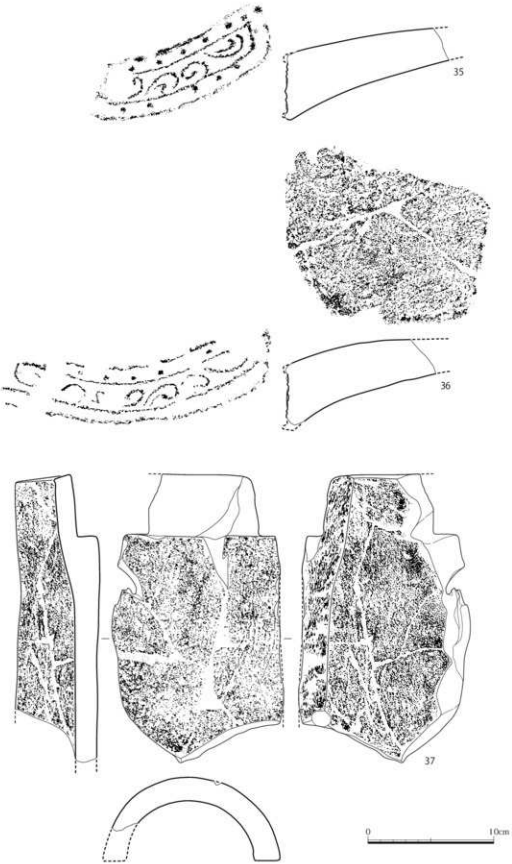


図 35　SD034 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

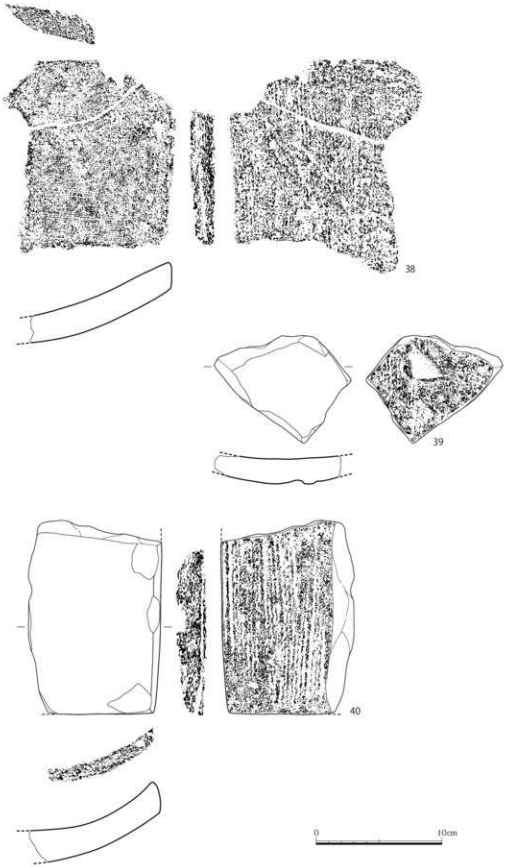


図 36　SD034 出土遺物実測図（2）（S=1/3）

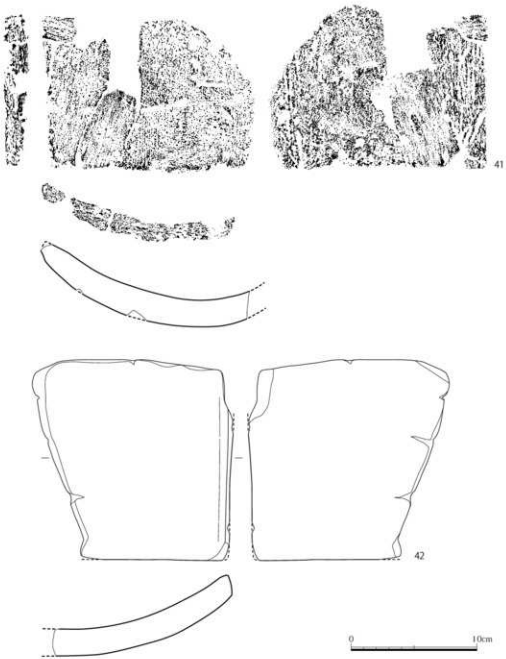


図 37　SD034 出土遺物実測図（3）（S=1/3）

たが、文字等は確認できない。40 は平瓦である。凸面は縄タタキ調整である。凹面は表面劣化のため、調整は不明である。41 は平瓦で凹面側に「西」刻印が押捺されている。刻印の上端幅は 2.5cm を測る。三画目の上部が四画目と五画目の間で途切れていることや、一画目の始筆が尖り気味である点を特徴とする。奈良市の西大寺 26 次調査出土の平瓦に同范がある（未報告）。また、同范ではないが、書体は「西(a)」（西大寺 1990）に類似する。全体に表面が劣化しているものの、凸面には縄タタキ痕が残り、凹面には布目が残る。42 は平瓦である。焼成不良で表面劣化が著しく、調整は不明である。43 は平瓦である。全体に表面劣化のため、調整は不明である。凹面側は部分的に黒斑状に色調が異なっている。

石製品（写真 2）　図化していないが、チャートなどの亜角礫が 423 点出土している。礫の大きさは 1.2

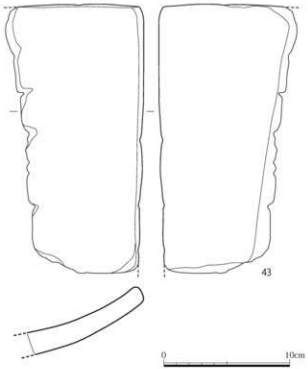


図 38　SD034 出土遺物実測図（4）（S=1/3）

～ 9.0cm と幅があるものの、3.0 ～ 3.5cm のものが多い。玉砂利として敷かれていた可能性が高い。このほか、長さ約 13cm、幅約 10cm、厚さ約 9cm の長方体の凝灰岩片が 1 点出土しているが、加工面を残しておらず、図化していない。

整地土出土遺物（図 39 ～ 42、図版 42・43）

整地土として報告する遺物は大きく二つに分かれる。図 25 に示したように、一つは方形区画を造成する際の整地土（整地土Ⅰ）、もう一方は方形区画から北にやや距離を置いて確認した整地土（整地土Ⅱ）である。なお、後者に関しては追加確認調査で部分的に調査を行ったのみであり、造成工事が進行した段階でもあり、整地土としているが、斜面に流れ込んだ、いわゆる包含層を含む可能性もある。

土師器杯（44）　整地土Ⅱ出土の土師器杯 A である。全体に表面が劣化しており、口縁部外面にヨコナデ調整が確認できる以外、調整は不明である。

土師器皿（45・46）　いずれも整地土Ⅱ出土の土師器皿である。45 は内面は表面が劣化しており、調整は不明である。外面も同様に表面が劣化しているが、口縁部直下からケズリの c 手法が確認できる。9 世紀初頭。46 は全体に表面は劣化しており、調整は不明である。底部は指押さえの痕跡が残る。内面は全体に黒色を呈する。

土師器椀（47）　整地土Ⅱ出土の土師器椀である。全体に表面が劣化しており、調整は不明である。外面の下半はケズリの可能性がある。口縁部外面には帯状の黒斑がみられる。

土師器鉢（48）　整地土Ⅱ出土の土師器鉢である。表面が若干劣化しているが、内面はヨコナデ、外面はケズリ調整である。

土師器高杯(49)　整地土Ⅱ出土の土師器高杯である。全体に表面が劣化しており、調整は不明であるが、

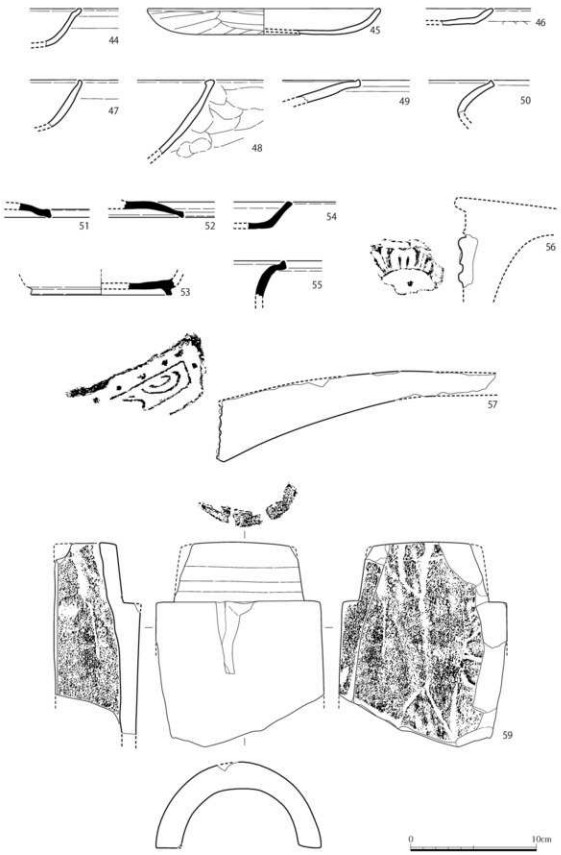


図 39　整地土出土遺物実測図（1）（S=1/3）

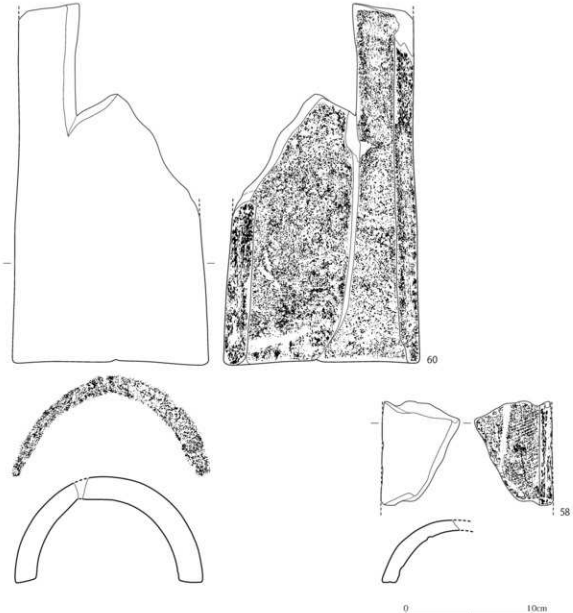


図 40　整地土出土遺物実測図（2）（S=1/3）

内面はヨコナデ、外面はケズリ調整の痕跡が残る。

土師器甕（50）　整地土Ⅰ出土の土師器甕である。口縁部のみが残り、全体に劣化しており、調整は不明である。

須恵器蓋（51・52）　整地土Ⅱ出土の杯蓋である。51 は全体にヨコナデ調整である。焼成はやや不良である。52 はヨコナデ調整で、外面頂部は回転ヘラケズリ調整である。外面に重ね焼き痕跡が残る。

須恵器杯（53）　整地土Ⅱ出土の杯 B である。高台の一部が著しく摩滅して丸みを帯びている。

須恵器皿（54）　整地土Ⅱ出土の皿 C である。底面は回転ヘラケズリ調整、それ以外はヨコナデ調整で、口縁端部はやや外反する。

須恵器壺(55)　整地土Ⅱ出土の壺である。全体にヨコナデ調整とし、口縁部内面には自然釉がみられる。

瓦塼類（56 ～ 63）　軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土している。56 は整地土Ⅱ出土の蓮華文軒丸瓦

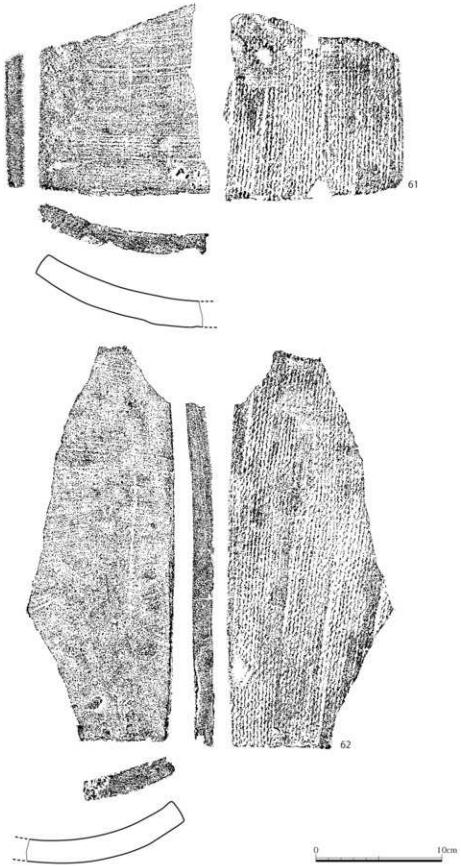


図41　整地土出土遺物実測図（3）（S=1/3）

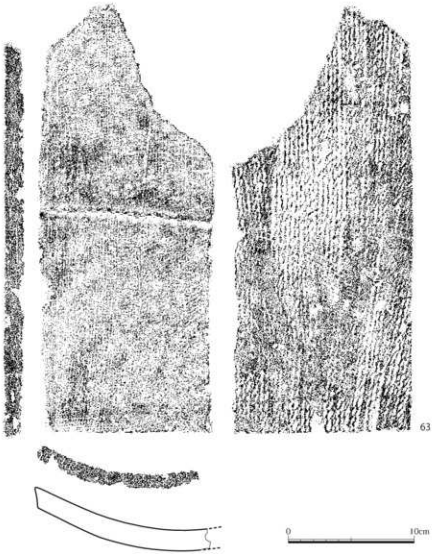


図 42　整地土出土遺物実測図（4）（S=1/3）

である。瓦当の一部が剥離したような状況で破損している。連弁に比して中房が窪んでいる。西大寺系の 6236D 型式である。57 は整地土Ⅰ出土の均整唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎であり、瓦当文様は一部が残るのみであるが、6711B 型式である。いずれも瓦当部分を含め、全体に表面が劣化しているが、凹面に布目痕が残る。側面は凹面、凸面側ともに面取りがなされる。58 ～ 60 は整地土Ⅱ出土の丸瓦である。58 は外面は劣化により調整は不明である。内面には布目痕が残る。厚さ 1cm 前後で薄く、幅は 10cm 前後に復元できる小型瓦である。59 は内面には布目痕が残り、外面は劣化しているもののナデ調整と考えられる。幅約 13cm を測る。60 は全体に劣化が著しく、調整は不明である。幅は約 15.5cm を測る。61 ～ 63 は平瓦である。いずれも須恵質で焼成は堅緻である。凸面は縄タタキ、凹面には布目痕が残る。凹面には横方向に糸切り痕が明瞭に残る。63 には中位に布を平縫いした痕跡が残る。61 は幅 14cm 前後、62 は幅 12cm 前後、63 は幅 13cm 前後で割れており、短冊状に半裁された状況は SK100 出土の平瓦にみられる割れと共通する。破断面に細かな打ち欠き等は見られないものの、割熨斗瓦であった可能性がある。

第２項　北区

(1) 北区全体概要

北区は南区がある高まりから北東方向にのびる支丘上に設定した調査区である。表土直下が地山面であり、東西南北を指向する溝が検出され、ある段階で耕作地とされていたと考えられる。そのため、削平や攪乱が地山面まで及んでいる。

調査前に比較的多くの遺物散布が確認できたことから、1981 年の調査および南区で検出した遺構群に関連する施設の存在も想定されるところではあったが、結果的には調査区北半で数基の土坑を検出したに留まる。

このうち、調査区北端で検出した SK100 からは多くの遺物が出土している。出土遺物の大半は瓦片であるが、原形を残す土器も含まれる。灯明皿や土馬のほか、刺突痕をもつ土製品など、特徴的な遺物を含んでいる。

(2) 遺構

土坑

SK100（図 44、図版 33・34）

調査区の北端部で検出した土坑である。東に向かって緩やかに下降する傾斜地に掘削されている。平面形は東西方向に長い不整な長楕円形で、長径 5.21m、短径は最大で 1.74m、深さは最も深い部分で 0.34m を測る。西側と中央部の下層から遺物が集中的に出土しており、部分的に平瓦が立位で出土した。埋土はいずれもブロック土を含む人為的埋土である。底部付近には礫を大量に含む。

出土遺物の多くは瓦片であるが、原形を留める土師器・須恵器も出土している。瓦片は破片数で 234 点が出土しているが、軒瓦は含まず、かつ破片数での計測ではあるが、丸瓦は 20 点に満たず、平瓦が 93% 以上を占めるという特徴を有している。

SK102（図 45、図版 34）

調査区の北端部で検出した土坑であり、SK100 の埋没後に掘削されている。平面形は東西方向に長い不整な楕円形で、長径 0.92m、短径は 0.74m、深さは 0.13m を測る。

西半から遺物がまとまって出土している。出土遺物の組成は SK100 とは異なり、瓦片は 2 点のみで、土師器・須恵器の土器片が大半を占めている。埋土は礫と地山ブロックを多く含む人為的埋土である。

SK103（図 46）

調査区の中央部で検出した土坑である。平面形はほぼ円形を呈し、直径は 1.09 ～ 1.15m、深さは 0.47m を測る。断面形状は円錐形を呈している。人為的に埋め戻されており、土層断面には土層断面には何らかの埋設物を想定させる土層もみられる。

他の攪乱とは区別される埋土であるが、奈良時代の遺構埋土とも明確に異なる。出土遺物が皆無なため厳密には帰属時期は不明であるが、中近世の遺構と考えられる。

(3) 遺物

土坑

SK100 出土遺物（図 47 ～ 53、図版 44 ～ 49）

土師器杯（64 ～ 68）　64・65 は杯 A である。64 は全体に表面が劣化しているものの、内外面ともにヨコナデ調整で、暗文やミガキは観察できない。65 は外面はヨコナデ、底部にはユビオサエ痕が残る。

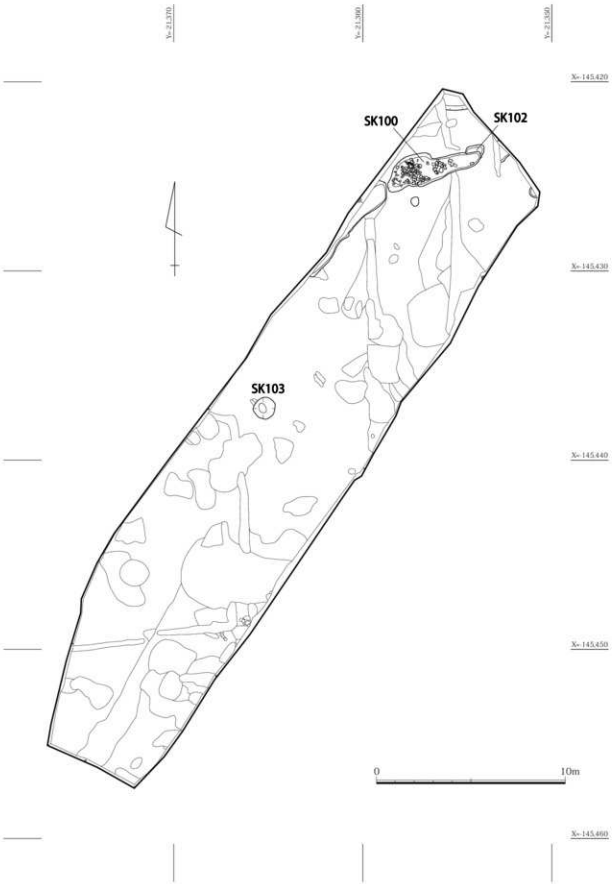
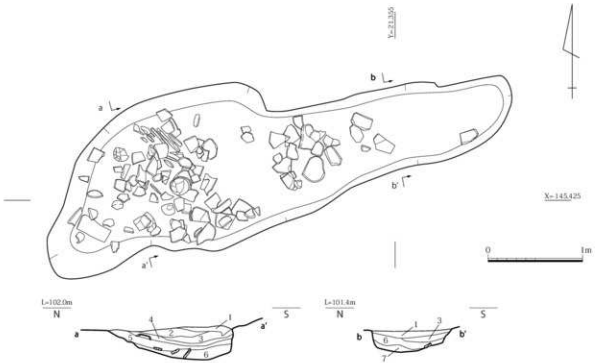


図 43　北区全体平面図（S=1/200）

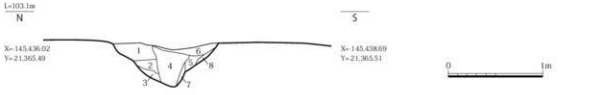


1. にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂混中粒砂（径 30 ～ 50mm の礫を少量含む）
2. にぶい黄褐 10YR5/3 中粒砂（径 50mm 前後の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
3. にぶい黄褐 10YR5/4 中粒砂（径 10 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）
4. にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂（礫を多量に含む）
5. にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂（径 10 ～ 30mm の礫を主体とする）
6. にぶい黄褐 10YR5/3 中粒砂（径 10mm 前後の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）
7. にぶい黄褐 10YR5/4 中粒砂（径 10mm 前後の亜角礫状地山ブロックを少量含みやや暗色）

図 44　SK100 平面・土層断面図（S=1/40）

1. 黄褐 10YR5/8 細粒砂（径 10 ～ 50mm 程の亜角礫と 5mm 程の亜円礫を含む）
2. 褐 10YR4/4 中粒砂（～径 5mm の亜円礫をごく微量含む）
3. 黄褐 10YR5/6 中粒砂（径 10mm 程の角礫をと亜円礫を含む）
4. 黄褐 10YR5/6 中粒砂（地山ブロックを含む）

図 45　SK102 平面・土層断面図（S=1/40）



1. 橙 7.5YR6/6 細粒砂（径 3 ～ 5mm 程の亜角礫と径 15mm 程の角礫を含む）
2. 橙 7.5YR7/6 細粒砂（地山ブロックを含む）
3. 浅黄橙 7.5YR/3 細粒砂（地山ブロックを含む）
4. にぶい橙 7.5YR7/3 細粒砂（径 5 ～ 7mm 程の亜円礫と径 10mm 程の亜角礫を含む）
5. 明褐灰 7.5YR7/2 細粒砂（径 3 ～ 5mm の亜角礫を含む）
6. にぶい褐 7.5YR5/4 中粒砂（径 15mm 程の角礫を二つと径 3 ～ 5mm の亜円礫を含む）
7. 灰褐 5YR6/2 極細粒砂（径 1 ～ 3mm 程の亜円礫をごく微量に含む）
8. 褐 5YR6/8 中粒砂（径 23mm 程の亜円礫を若干と 5mm 程の角礫を含む）

図 46　SK103 土層断面図（S=1/40）

内面には粗い斜放射暗文があり、見込みには部分的に螺旋暗文が残る。66 ～ 68 は杯 C である。66・67 は口縁部は強いヨコナデ調整を行い、下半はユビオサエ後にナデ調整を行っている。68 は約 1/2 が残存する。全体に表面は劣化しているが、底部外面はユビオサエ、そのほかはヨコナデ調整とする。

土師器椀（69） ほぼ完形に復元できる椀 D である。直径は 17.6cm を測る。内面は丁寧なヨコナデ、外面は劣化が著しいが、底部はヘラケズリ調整であると考えられる。

土師器壺（70） 球状の胴部に大きく開く口縁部をもつ小型の壺である。表面は劣化が著しいが、胴部は内外面ともにユビオサエ痕が残る、口縁部がヨコナデ調整である。

土師器甕（71） 全体が残らないが、甕 A と考えられる。表面は劣化により剥落しているが、胴部外面にはごくわずかに縦方向のハケメ調整の痕が残る。口縁部はヨコナデ調整、頸部にはユビオサエの痕跡が残る。胴部外面には黒斑がみられる。

須恵器皿（72） 皿 F である。底部は劣化で調整不明、それ以外はヨコナデ調整である。底部の焼成があまく、橙色を呈する。口縁端部の一部に煤が付着している。

須恵器蓋（73） 直径約 28cm に復元できる皿 B 蓋である。外面は回転ヘラケズリ調整で、口縁部付近はヨコナデ調整である。内面は口縁部付近以外は一定方向のナデ調整とする。

須恵器盤（74） 直径 37.6cm に復元できる盤である。全体をヨコナデ調整とする。口縁部外面には重ね焼き痕が残る。

土製品（75・76） 75 は土馬である。前肢から頸部にかけての破片であるが、両前肢ともに先端部分は欠失している。頭部は欠損するが頸部には、手綱を表現したと考えられる幅 6 ～ 7mm の粘土紐が貼り付けられている。全体に丁寧なナデ調整である。76 は刺突痕をもつ土製品である。緩やかに湾曲しており、凸面には整然と配置された刺突痕、凹面はヨコナデ調整である。色調は灰色を呈し、焼成は須恵質で堅緻である。刺突は直径約 6mm の丸箸のような、先端が平坦な円棒状工具によるもので、この刺突具を器面に対して斜め方向から突き刺し、おろし金のような、ひだを付けている。なお、刺突痕の配列は単純な縦横の配列とはせず、一列毎に刺突痕の間を点ずるように丁寧に配置されている。なお当該土製品については原田氏の検討があり、原田氏の分類では「丸Ⅰ Aa 類」に分類され、「飾り瓦」であった可能性が指摘されている（原田 2021）。

瓦塼類（77 ～ 87） 丸瓦・平瓦が出土している。瓦片は破片数で 234 点が出土している。軒瓦は含まず、丸瓦は 16 点、平瓦は 218 点で、破片数では平瓦が 93% 以上を占めている。77 ～ 79 は丸瓦である。77 は幅約 10cm に復元される小型瓦である。外面には縄タタキ痕、内面には布目痕が残る。焼成は堅緻である。78 は幅 13cm 前後に復元できる丸瓦である。他例に比して全体に薄い。瓦質で焼成不良で表面は劣化している。外面にはわずかに縄タタキ痕が観察できる。79 は幅 13.5cm を測る。外面は縄タタキ後、丁寧にナデ消している。内面は布目痕が残る。80 ～ 87 は平瓦である。80 と 83 は凸面側の側端面に幅広の面取りを行う。80 は厚さが 1.1cm 前後と薄く、小型瓦の可能性が高い。81 は側端面側に人為的な半円形の抉り込みがあるが、その意図は不明である。82 は凸面は縄タタキ、凹面は布目痕と糸切り痕が観察される。側縁は凹面側に幅広の面取りを行う。厚さ 2.3cm で他例に比して分厚い。84 は凸面は縄タタキ、凹面は劣化が著しいが布目痕がわずかに観察できる。厚さは約 1.5cm と薄い。凹面側側縁は全体に欠けており、人為的な打ち欠きであった可能性もある。85 ～ 87 は平瓦を縦に半裁した状態を呈しており、破断面は丁寧な加工がなされるわけではないが、割熨斗瓦の可能性がある。幅は 85 が 11 ～ 15cm、86 が約 15 ～ 18cm、87 が 14 ～ 15cm を測る。いずれも凸面に縄タタキ痕、内面に布目痕が残る。85 には不明瞭ながらも横方向の布の縫い合わせ痕と考えられる痕跡が観察できる。87 には糸切痕が残る。

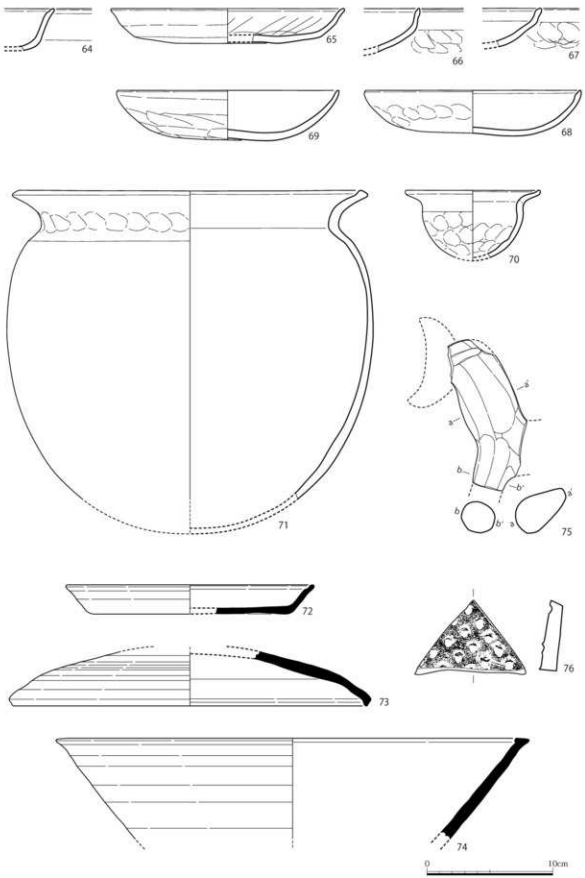


図47　SK100出土遺物実測図（1）（S=1/3）

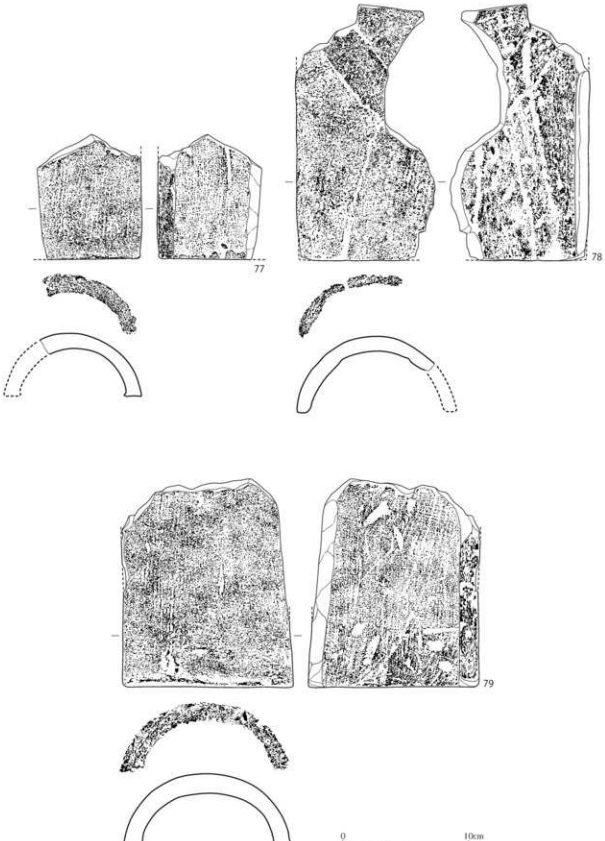


図 48　SK100 出土遺物実測図（2）（S=1/3）

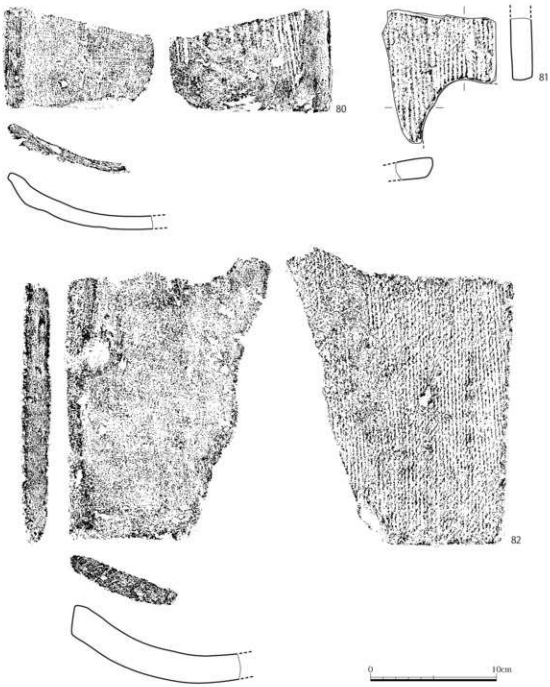


図 49　SK100 出土遺物実測図（3）（S=1/3）

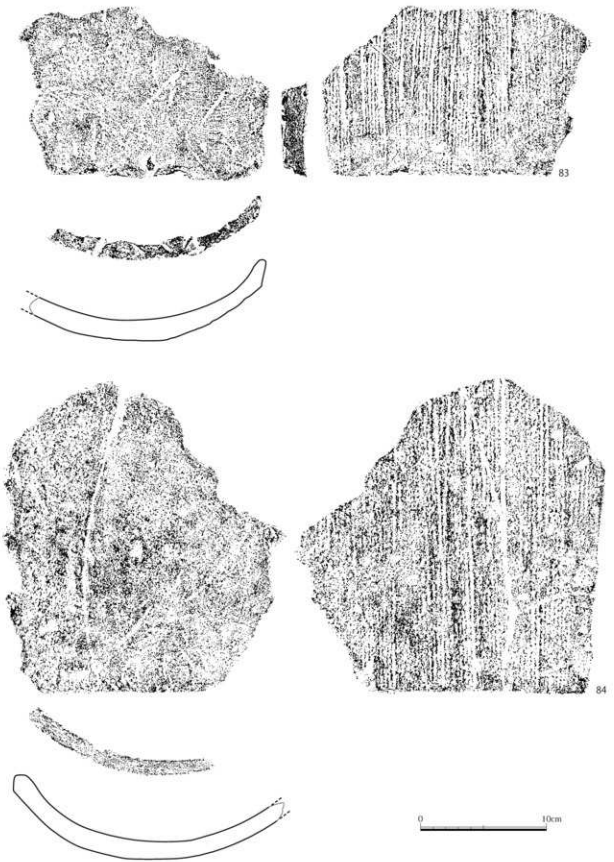


図 50　SK100 出土遺物実測図（4）（S=1/3）

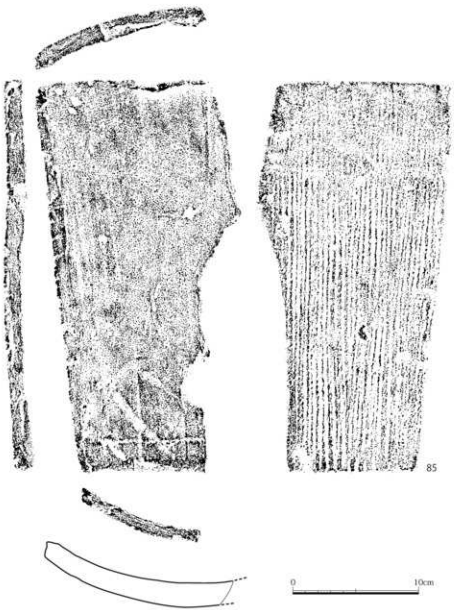


図 51　SK100 出土遺物実測図（5）（S=1/3）

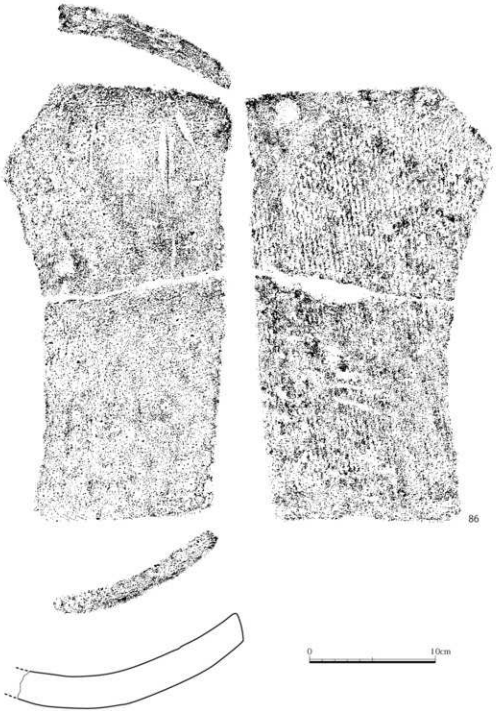


図 52　SK100 出土遺物実測図（6）（S=1/3）

SK102 出土遺物（図 54、図版 47）

土師器杯（88・89） 88 は杯 A である。表面は著しく劣化し、調整は不明である。底部外面に黒斑を有する。89 は杯 C である。全体に表面は劣化しており、調整は不明瞭であるが、底部にはユビオサエ痕が残る。口縁部内面には数か所に煤が付着しており、灯明具としての使用痕跡が認められる。

須恵器皿（90） 皿 C である。底部外面は回転ヘラケズリ後にナデ調整、その他はヨコナデ調整とする。生駒産か。

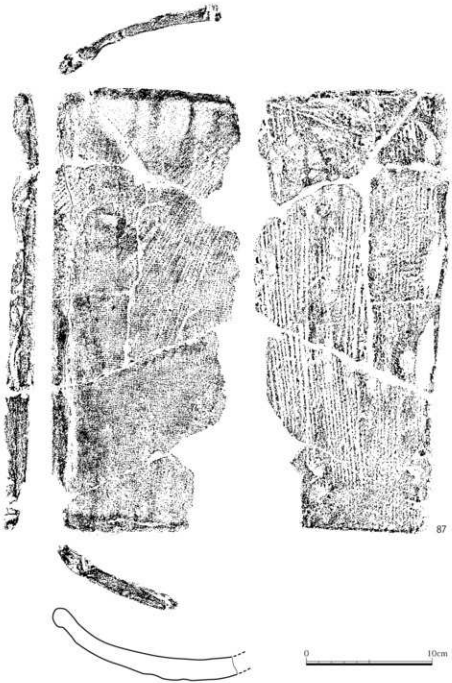


図53　SK100出土遺物実測図（7）（S=1/3）

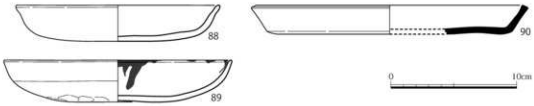


図54　SK102出土遺物実測図（S=1/3）

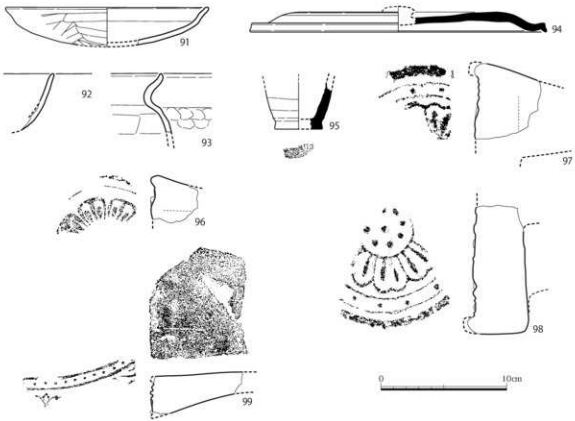


図 55　表採遺物実測図（1）（S=1/3）

表採資料（図 55・56、図版 48・49）

土師器皿（91）　皿 A である。口縁端部は外面に強いヨコナデを施し、外反する。外面の下半はヘラケズリ調整である。

土師器椀（92）　椀 A の細片である。表面も剥離するなど劣化が著しく、口縁部の立ち上がり角度にも不安を残す。

土師器甕（93）　口縁部から胴部にかけての細片である。口縁部はヨコナデ調整、胴部は劣化が著しく内外面ともに調整は不明である。

須恵器蓋（94）　直径 23.5cm に復元できる皿 B 蓋である。外面には重ね焼き痕が残る。内面は中央付近が平滑となっており、墨痕はみられないものの、転用硯として用いられた可能性がある。

須恵器壺（95）　壺 M の底部の細片である、底部には糸切り痕が残る。

瓦塼類（96 ～ 102）　軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦を採集している。102 のみ北区周辺での採集で、それ以外は南区付近での採集である。96 ～ 98 は蓮華文軒丸瓦である。96 は中房を欠くものの、小型瓦であり、1981 年調査で出土している 6299A 型式と同笵であると考えられる。ただ、外区の珠文はわずかに観察できる状況である。瓦当裏面の破損部に丸瓦との接合部分が見えている。97・98 は瓦当厚は約 5cm で非常に分厚い。瓦当文様から 6316Dc 型式であると考えられるが、連弁等の様相が微妙に異なっている。98 は中房の界線が太く、蓮子も大きいことから新しい段階、一方の 97 は古い段階のものと考えられる。99 は均整唐草文軒平瓦である。瓦当は中心飾りと外区の珠文帯を残すのみであるが、1981 年調査で出土している 6765A 型式である。凸面は縦方向のナデ、凹面は横方向のケズリ調整とする。100・101 は丸瓦である。100 は内面が劣化により調整は不明、外面は縄タタキ痕がかすかに残る。幅

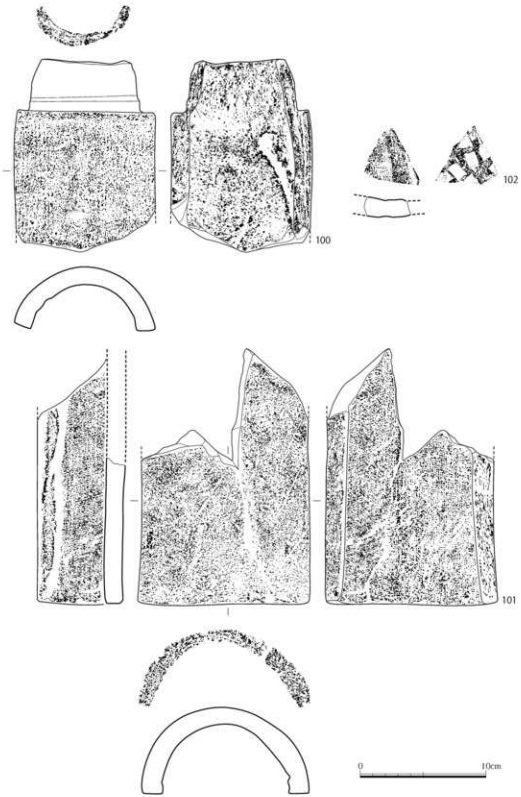


図56　表採遺物実測図（2）（S=1/3）

約11cmで小型瓦の一群に属する。101は丸瓦で幅は13.6cmを測る。外面は縄タタキ後、ナデ消し調整、内面は布目痕、糸切り痕が残る。102は平瓦片で、外面には格子タタキ痕、内面には布目痕と模骨痕が確認される。

第４章　遺構・遺物の分析

第１節　菅原遺跡 SB140 の復元考察

はじめに

ここでは、円形平面をもつ特異な遺構である SB140 の上部構造を検討する。SB140 の上部構造については、元興寺文化財研究所による菅原遺跡の遺跡解説資料（元興寺文化財研究所 2021）にて、多宝塔形式での復元イラストが公開されているほか、浅川滋男らによる八角円堂の復元案がある（浅川ほか 2022）。とりわけ後者は平面図・断面図・立面図を備えた八角円堂の復元案を３案示しており、建築史的な考察が行われている。これらは発掘調査成果の速報的な報告をもとに行われているので、ここでは SB140 の上部構造の検討にあたって、まず前提となる遺構を確認し、復元の根拠をまとめておこう。その上で上部構造の復元考察を行う。さらに類例などを含めた復元案の建築史的意義を考えてみたい。

結論から述べると、内周の円形土坑列を基壇外装とは考えにくいという考古学的成果から、ここではこれを壁下の地覆を受ける地覆石と解釈し、円形平面の壁体を立ち上げた。その内部は基壇状に高まって、礎石等が存在したものの失われたと解釈して、屋根をもつ木造の構造体を建ち上げた。そして、1981 年に今回の調査区の南方で発掘調査を行った菅原遺跡（菅原遺跡発掘調査会ほか 1982）から出土した小型瓦が、この構造体に用いられた可能性が高いとの解釈から、小型の隅切瓦や鬼瓦を用いる屋根形式を検討した。一方、外周で検出した円形平面をなす掘立柱列は檜皮葺の裳階と解釈し、円形平面の壁体の外側にめぐらせ、全体では多宝塔に似た形状とした。

復元図の作成にあたっては、遺構解釈および復元考察について、佐藤亜聖（滋賀県立大学）、江浦 洋・村田裕介・坂本 俊（以上、公益財団法人元興寺文化財研究所）、北脇翔平（公益財団法人文化財建造物保存技術協会）、箱崎和久（奈良文化財研究所）らによる検討会を計４回（2022 年 10 月 13 日・12 月 5 日・12 月 26 日、2023 年 1 月 15 日）開催して意見交換するとともに検討を深めた。建築的な検討は、そうした成果をもとに箱崎和久と北脇翔平が行い、北脇が復元図を作成した。本節は箱崎が執筆した。

１．遺構・遺物の確認と解釈

内周の円形土坑列　12 基の断続的な土坑で、線的な部分もあるので全体では多角形平面になると思われるものの、正多角形にはならず、略円形の平面と考える。略円形平面の直径は土坑心々で約 9.5 m。土坑は断続的で、削平により失われた部分もあるが、石材の抜取痕跡がない部分に石材を補足して石材が連続する、という遺構の様相ではなく、当初より断続的に石材が存在する形態に解釈できるという。後述するように、石材の底面の形状を比較的よく残すが、旧地表面は一定程度削平を受けているので、石材の上部が長手方向で大きくなって、石材どうしの間隔が検出した土坑の間隔よりも狭まる可能性はある。土坑の幅はおよそまとまっており、平均約 70.5cm、深さは最も深い Ac（図 11）で 18.3cm、平均は 13cm であり、旧地表面が削平されていることを考えると、やや深く据え付けられていたことになるようだ。凝灰岩片が底面に貼り付いて残る部分があり、凝灰岩が用いられていた可能性が高い。

土坑の壁の立ち上がりはほぼ垂直になるといい、石材底面の圧痕をおよそ残すよう、丁寧に抜き取られている。抜き取った方法は、石材の周囲を掘り込むのではなく、石材を回転させるなどした様相と解釈できる。すると、一定程度の高さをもつ石材であったと考えられる。また方形石材の上に長方形石材を重ねたと解釈できる部分（Aa・Ab）があり、また147°前後の角度の角をもつ痕跡がある（Aj）。以上のような検出状況から、内周の円形土坑列の性格は、基壇外装の抜取痕跡ではなく、幅をある程度そろえながらも、さまざまな形状・長さの石材を埋設した内護列石のような機能と推定されている（18頁）。

以上から、これは基壇外装ではなく、壁受けの地覆を受ける地覆石と解釈した。これらが旧地表面からどれくらいの深さに据えられたかは明確でない。土坑の間隔が空く部分は、ここに乗る石材の間に土を入れて安定させていたか、石材が一定程度埋まっていたと解釈できるという。一方で、後述する外周の掘立柱穴の残存状況から、大きく削平を受けたわけではないこともわかる。また、円形土坑列の内部には木造の構造体を支持する柱が立つ礎石などが据えられていたと考えられることから、据えられた列石群はやはり一定程度の高さをもつと考えるのが合理的である。ここでは、石材は旧地表面から20cmほど埋め、さらに、旧地表面から40～50cm内部を高めたと解釈した。このとき石材の高さは60～70cmとなるため、上下には2石以上積んだと推定する。石材は石垣のような密度で据えられているわけではないため、外側に横転しないよう、また間隔の空く石材の間を土で埋めた状態では、土が流れて石材が不安定になる恐れがあることから、石材の外側は、石垣状にせず、旧地表面上に亀腹状に盛土して列石の大半を埋めたと考えた。

一方、石列底部の形状を残しており、石材側面の立ち上がりの痕跡が認められることから、比較的丁寧に石材が抜かれていることがわかる。後述するように、葺かれていた小型瓦も、この建物の解体にあたって下ろされ、保管されていた可能性がある。このように、後世の削平はあるものの、この建物は創建後朽ち果てるまで存続したわけではなく、一定程度の時間を経たのち、丁寧に解体され、少なくとも瓦などは保管され、後世に転用されたらしい。

外周の掘立柱　15基が直径14.7 mの円周上に配置されており、およそ正十六角形をなす。中心からの角度は22.5°と正確に円周を16等分するというが、図13をみると、柱痕跡は必ずしも16等分の位置にはないことがわかる。また、掘方は中心に向かって長いので、円弧方向の位置はおよそ決めたが、直径方向には柱の据える位置を動かせるよう、掘方の範囲内での柱の位置の移動は許容できたらしい。

一方、先述した内周円形土坑列との対応は、放射状の位置関係として対応する部分もあるが、そうでない部分も多く、内周と外周が一体的に考えられたわけではなさそうである。ここから、内周円形土坑列と外周掘立柱には、設置に時期差を想定することも不可能でないが、遺構からは明確な証拠を提示できない。ここでは一体の建物を構成すると考えた。柱穴の深さは最大65cm、平均31.4cmで、柱痕跡の直径は最大20cm、最小12cm、平均17cmである。後述のように、回廊SC160および北側建物SB150の柱痕跡の平均が、それぞれ約37cm、約43cmであることを勘案すれば、この柱の太さはあまりに小さい。しかし、掘方は平均で30cmを越える深さがあり、しっかりと据えられている感がある。回廊という簡易な上部構造をもつ建物の柱に比べても細いという事実は、この柱が本格的な建物の上部構造に関わるようなものではないことを示唆している。

こうした点から、この遺構からなる建物は、内周円形土坑列と外周掘立柱のみで構成されたものではないと考えられる。すなわち内周円形土坑列の内側に、削平された基壇や礎石などを想定する必要がある。そうしたこの建物の本体（内周円形土坑列とその内部に設けられた礎石建ち小型瓦葺の構造体。ここではこれを「主屋」と仮称する）に対し、外周掘立柱からなる上部構造は、補助的な役割を担ったも

のと推定される。

出土遺物　外周柱穴から瓦の細片がわずかに出土しているものの、この建物の上部構造に直結する出土遺物かは検討を要する。次節79頁で述べているように、1981年の奈良大学の調査で出土した小型瓦が、現時点では、この建物に用いられていた可能性が高い。そこでは少数ながら隅切瓦が出土している。ここから、隅棟をもつ屋根形式であったことがわかるが、隅切りの角度は略45°であり、正方形平面の屋根をもつ上部構造であった可能性が高い。

一方、この小型瓦には鬼瓦6点が含まれている。正方形平面の屋根であれば、最低4つの鬼瓦が必要となるが、その数を超えている。このため多重塔の可能性も否定できないが、瓦葺の多重塔と円形土坑列の上部構造（円形平面の壁体）が整合するとは考えにくかったため、ここでは多重塔とは考えないこととした。したがって、単層の屋根に4つ以上の鬼瓦を用いる形式として稚児棟をもつと考えた。この場合、単層の屋根では8つの鬼瓦を用いることとなるが、そのうち6つが見つかっていることとなる。

なお、奈良時代前半に日本で稚児棟が存在した確証はない。しかし、敦煌莫高窟の初唐期以後の壁画に描かれた建物には、稚児棟を比較的多数認めることができる[1)]。出土した小型瓦の総数からみて、鬼瓦の出土数の割合が大きいことは否めないが、屋根瓦が下ろされたのち丁寧に保管されていたらしいことから、分類して保管されていたものが比較的一括して出土したものと解釈する。

周辺遺構の様相　回廊SC160は掘立柱による単廊で、柱間寸法は、桁行が2.40～3.15 mとややばらつき、梁行は2.70～2.98 mで平均2.83 mである。梁行規模は掘立柱のための施工誤差の範囲と思うが、桁行はばらつきが大きい。ただし、明確な意図は読み込めず、そこまでの精度を求める建物ではなかったと考え、桁行・梁行とも9尺を基本としたと解釈した。柱穴掘方の深さは最深で91cm、平均56cm。柱痕跡の直径は平均37cmである。これは中心建物SB140の外周掘立柱の柱痕跡（平均17cm）に比して大きい。

北側建物SB150は、桁行5間×梁行2間の東西棟掘立柱建物で、柱間寸法は、桁行が平均3.03 m（10尺）。梁行は平均2.90 mで梁行全体を5.8 m（19.5尺）としてそれを2間割りにしたものらしい。基本は梁行を20尺としたのであろうが、そこから0.5尺を引いてわずかに小さくしたものと考えられる。掘方の深さは最深78cm、平均58cm。柱痕跡の平均は約43cmである。

東面の南北塀SA170は掘立柱塀で、柱間寸法は2.21～3.19 m、平均2.47 mとややばらつく。柱穴の深さも41.3～88.0cm、平均57.1cmとばらつく。

南面回廊SC180と東西溝SD034は、検出した遺構から、直接、性格を明らかにすることは難しい。SC180の柱穴柱痕跡からSD034の溝心までは3.9 m（13尺）を測る。この距離は、掘立柱による回廊の軒の出としてはやや大きな感はあるものの、掘立柱塀の軒の出には大きすぎる。したがってSD034を、ここに建物上部構造の軒先が位置する雨落溝と考えるのであれば、SC180は回廊もしくは南面にある建物の柱穴と考えるべきだろう。SD034を雨落溝ではなく、単なる区画の排水溝と解釈するのであれば、SC180を掘立柱塀と考える余地はある。この場合、掘立柱塀から区画の内側に落ちた雨水を排水する必要から、この間の地面には北向きに落ちる勾配が伴う必要がある。すなわちSC180の柱穴の削平は現状よりもさらに大きかったと解釈せざるを得なくなる。

東西溝SD002は、中心建物SB140の東西方向の中軸線から南に1.95 mに位置し、幅約13尺の参道を形成していた側溝の南辺を示すと解釈する余地があるが、確証はない。

建物の配置　つづいて中心建物SB140と周辺建物との関係を検討する。SB140の中心と、東面塀SA170、および西面の回廊SC160東側柱からの東西方向の距離は、それぞれ約19.0 m、約17.5 m（17.45

m）である（図57）。一方、SB140の中心と、北面の回廊SC160南側柱と、南面の回廊SC180の北側柱の距離は、それぞれ約14.9 m、約19.7 mである。

まず東西方向を検討すると、西面回廊の梁行柱間は9尺のため、西側柱から棟通りまで4.5尺（約1.4 m≒1.35 m）を勘案すると、SB140の中心から西面回廊の棟通りまでは18.8 m（17.45＋1.35）となり、東面塀までの距離（約19.0 m）に近似する（図58）。回廊の柱間寸法のばらつきからみて、これは施工誤差と考えられる。したがって、SB140は東西方向には区画の中軸線上に建つと考えて良い。区画の東西規模は、東面の塀と西面回廊の棟通りを基準として東西37.8 m（約125尺：このとき1尺＝0.3024 m）を意図したものと考えられる。

つづいて南北方向を検討すると、SB140は明らかに区画の中で北に寄る。すなわち、区画のなかでSB140の南を広くとっていることがわかる。区画の南北規模は、南北の回廊柱穴の内法（北面回廊南側柱と南面回廊北側柱）で34.6 mであり、南面回廊の梁行柱間も西面と同じ9尺（2.7 m）と仮定すれば、南北の回廊棟通り間の距離は37.3 m（34.6＋2.7）となる。北側建物SB150の棟通りまでとす

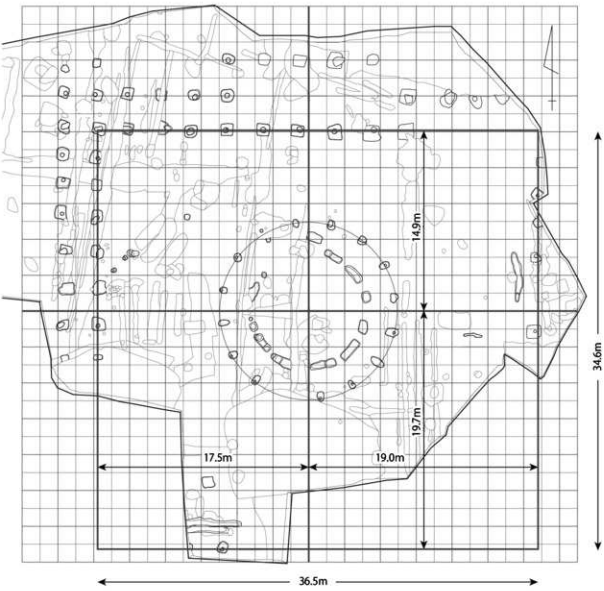


図57　建物の配置（1）（5尺メッシュ）

れば、北面回廊の棟通りから北に 4.5 尺（約 1.4 m）の距離を加えて 38.7 mを得る。南面にも北面と同様に、回廊と棟通りを異にする（南に寄った）建物があったとすれば、南北の建物間の棟通り間距離はさらに大きくなる。区画の東西規模（37.8 m）と比較すると、南北回廊の棟通り間 37.4 mが最も近似し、これが 125 尺で計画されたとすると、1 尺＝ 0.2992 mを得る。このとき、SB140 の中心と南北の回廊の棟通りは間の距離は、約 21.1 m（19.7 ＋ 1.4）、約 16.3 m（14.9 ＋ 1.4）となり、南北の回廊棟通り間を二等分した約 18.7 mから、それぞれ 2.4 m（8 尺）を得る。すなわち、SB140 は区画の南北の二等分線より北に 8 尺寄せて南を広くしたことがわかる。

以上から、回廊の柱間寸法の精度を勘案すれば、区画は 1 尺＝ 0.300 m前後を基準尺として 125 尺の方形で計画されたと考えられ、東は掘立柱塀、その他の 3 方は回廊の棟通りを基準としたらしい。そして、SB140 は、東西方向は区画の中軸線上に、南北方向は中軸線から 8 尺北に置いたと考えられる。こうした配置から見て、東面を塀とする区画施設の違いはあるものの、南が正面と考えられる。

ところで、87・88 頁でも指摘があるように、平城京の条坊との関係から、東を正面と考えられない

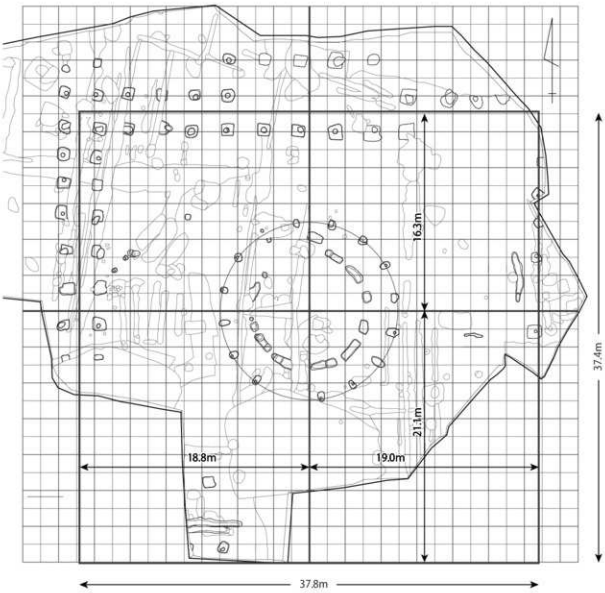


図 58　建物の配置（2）（5 尺メッシュ）

こともない。ただし、区画外の道路などとの関係は、必ずしも区画内の建物の正面性とは関係しない例がある。古代における東大寺は、二条大路に開く西大門が正門と考えられ、「金光明四天王護国之寺」の題字をもつ額も西大門に掲げられた。しかし、東大寺伽藍は南面して創建されている。また現状の法隆寺東院夢殿が建つ東院の区画は、西院伽藍からの寺内道路が夢殿に向かって開くものの、東院伽藍自体は南面する。興福寺北円堂は平城京を西に見下ろす台地の西端付近に建てられているが、やはり周囲を回廊で囲まれた北円堂院のなかに南面して北寄りに建つ。

この区画で東面を塀としたのは、中心建物から平城京を見えやすくする、また平城京から中心建物を見えやすくする効果を期待でき、伽藍の構築の原理とは異なると考えられる。

2．上部構造の復元

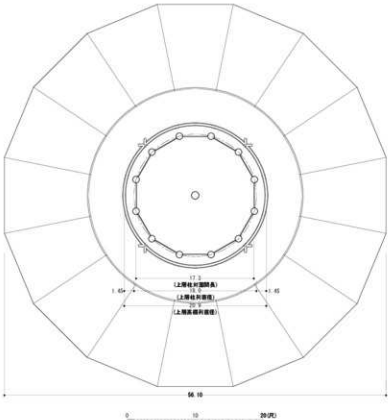
内周円形土坑列上の構造　以上の遺構の様相から、SB140の上部構造について検討する。内周円形土坑列は、先述のように壁受け地覆を支持する石材と考えるので、この上には壁を受ける地覆が円形に乗る。この材を土台としてその上に柱を立てる方法も考えられるが、そうすると土台を置かずに礎石建ちで柱を立てる方法のほうが合理的になってしまうことから、この地覆材の上には、壁構造、すなわち壁体が上部の重量を受ける構造と考える。具体的には、地覆上に径数cm程度の垂直材を立てならべて壁体を造り、その上に台輪を乗せる構造と考えた。台輪を含む壁体の高さは2.4 m（8尺）と考えた。南を正面とするが、四方に扉口を設ける。

内周円形土坑列内部の構造　先述のように、この円形土坑列の内部には何ら痕跡を残さないが、小型瓦を用いた木造の構造体が存在したと考える。1981年の奈良大学の発掘調査で検出した菅原遺跡の建物も、掘込地業の存在から基壇建物の存在が知れたが、基壇の内部からは礎石やその痕跡を確認することができなかった。SB140は掘込地業を確認してはいないが、円形土坑列の内部には、礎石を用いた建物があったと考える。

そして、内周円形土坑列の上に乗る石材は、前述のように、旧地表面から20cmほど掘り込んで据えられ、石材は60～70cmの成があって、内部は旧地表面から40～50cm床面を上げて礎石が据えられたと考えられた。すなわち礎石の成は、最大でも50cmと考えなければならない。ここでは旧地表面から内部の高さは60cm（2尺）と考えた。

木造の構造体の平面は、内周土坑列が円形であることから、円形の構造と考え12本の柱を立ち上げる。この構造体が支持する屋根は、隅切瓦および鬼瓦の存在から、平面は四角で隅棟をもつ形式と考える。このように想定する場合、多宝塔の上層部分の構造と類似することになるので、径18尺の円形をなす平面に12基の礎石を置き、その上に径1尺の柱を立て、組物を置く構造体を考えた。具体的には慈光寺開山塔[2]（埼玉県ときがわ町、1556年、国重要文化財、重要文化財慈光寺開山塔修理委員会1965）の構造（図61）を参考に、井桁に通肘木を渡して円形平面をなす8本の柱で受け、このほかの4本の柱で隅行方向および四角屋根の両脇間にあたる通肘木を受ける構造と考えた。そうした組物配置や丸桁を支持する間隔などから、上部構造を支持する円形平面の径を先述した18尺と考え、平の組物を三手先、隅組物は六手先（巻斗の挺出数）とした。柱長は円形平面の径と同じ18尺とした。

ところで、多宝塔であれば相輪を受けるため心柱を立てる必要がある。奈良時代の三重塔や五重塔といった多重塔に類似するとすれば、心柱は地面から立ち上がる形式が想定できる。先述のように、礎石の成は50cmが最大と考えなければならないなかで、礎石より大きな心礎は、それよりも深くなると考えられるが、そうした痕跡は全く認められなかった。このため、心礎のない形式と考えた。現存する



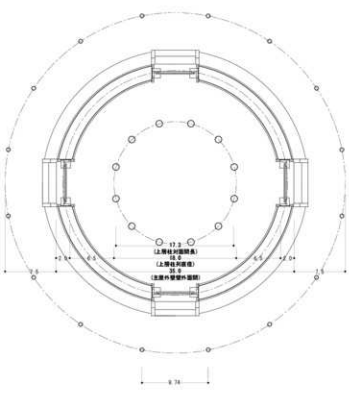


図 59　SB140 復元案（上段：上層平面図、下段：下層平面図）

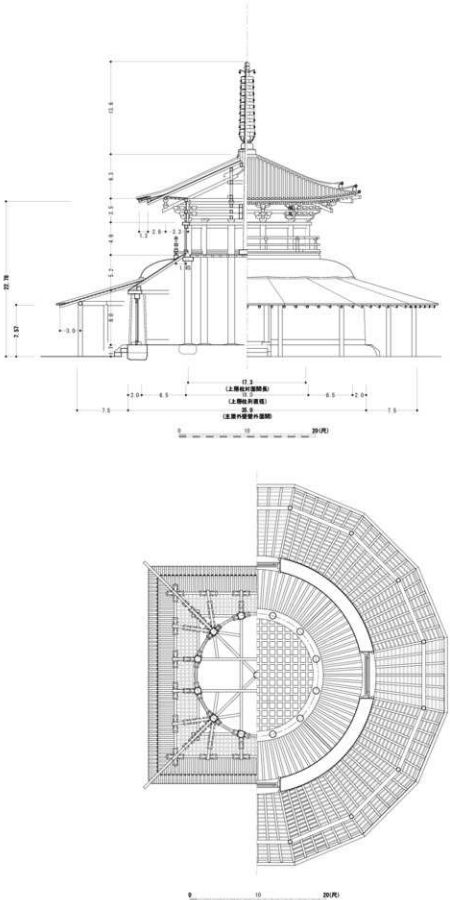
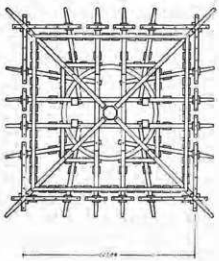
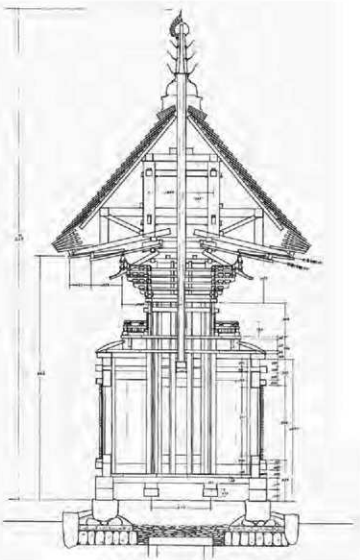


図 60　SB140 復元案（上段：立断面図、下段：見上図）



⑤



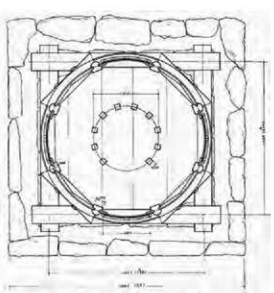


図61　慈光寺開山塔　平面図　断面図　組物詳細図

多宝塔でも、相輪を支持する心柱が地上まで達しないため、心礎はないのが通例である。さらに、後述する平安時代に遡る宝塔の発掘遺構である堂庭廃寺の宝塔跡でも心礎は確認できていない。堂庭廃寺の宝塔が相輪をもつかどうか不明である。以上のような様相から、九輪を備えた多重塔の相輪ではなく、簡略で短い相輪を上層から立てることとした。宝形造の屋根の納まりから露盤と伏鉢は必要となり、それより上部は金剛寺多宝塔（大阪府河内長野市、平安後期）を参考にした（国宝金剛寺塔婆及鐘楼修理事務所編 1940、文化財建造物保存技術協会編 2017）。

円形土坑列からは壁体が立ち上がり、その内側に 12 本の柱をめぐらせた構造体が建つが、その間が約 2 m（6.5 尺）ほど空く。この空間に支輪状に天井をかける。具体的には、内部柱に長押状に垂木掛を打ち付けて上端部を支持し、円形土坑列上部の台輪の上に桁を回してその間に支輪状の天井を張る。これらを上から塗り込めてしまえば、多宝塔の土饅頭状の造形になる。後述するように、裳階の垂木上端

をこの支輪状の天井に添わせるため、その接続部を土で押さえる機能をもつものだったかもしれない。

外周掘立柱列　すでに述べたように、円形土坑列の外側で検出した柱列は、掘立柱の構造である。主屋の構造が掘立柱ではないながらも、外周柱を掘立柱としている。掘立柱の特性は、柱が自立すること、あるいは簡易に設置できることであり、柱が自立すれば水平方向の支持材（水平材）の役割は小さくなる。SB140の円形土坑列上は壁構造と考えたので、この上にさらに重い瓦葺の構造体を重ねることは難しい。また、外周柱の頂部高さに主屋とをつなぐ水平材を入れることも難しかったのであろう。このため、主屋に礎石建ちを用いる技術をもちながらも、掘立柱を用いなければならなかったと考えられる。この場合、隣り合う外周柱頂部どうしを水平材（桁）でつないで、その上に屋根の骨組み（垂木）を掛け渡したと推定される。

この外周掘立柱で支持した屋根は、内周円形土坑列の壁体と、その内部の上層屋根の軸部では、覆いきれなかった部分を覆って、雨水から守る機能を有していたと考えられる。であれば、その平面形状は略円形（十六角形）でなくてもよかったのではないか。この点を屋根材とからめて検討する。まず、径17cmと細い柱であるのは、重い屋根材ではないことを意味しており、瓦葺は考えにくい。屋根平面は十六角形をなし、屋根面は扇状に広がるので、板をかけ渡す流し板葺とすると、一面の屋根の中央部は長い材が必要となり、また両端部は現場あわせで材の長さを調整する必要がある。板葺であれば、板の長さをおよそ一定にできる四角平面とするのが簡易である。このとき、四隅にあたる柱穴に隅木がかかり、支持する重量も隅にあたらない平の部分よりも重くなる。このため太い柱4本と細い柱8本程度が必要になる。この形態がまさに多宝塔の下層になることが理解できる。しかし、遺構は平面略円形（十六角形）になっているのであるから、この平面で簡易に屋根を造るとすれば、檜皮葺が適当と考えられる。761年の「法隆寺縁起并資財帳」（いわゆる法隆寺東院資財帳）にみえる檜皮葺の「屋」は、昭和の解体修理に伴う発掘調査によって、掘立柱の構造であることが判明しており（國立博物館 1948）、掘立柱と檜皮葺は整合的である[3]。

その構造は以下の通りである。先述した内部土坑列上の壁体と上層軸部との間に設けた支輪状の天井の上に、裳階の垂木の上端を添わせて置き、外周柱筋の桁に垂木を掛け渡し、直交方向に木舞を渡して檜皮を葺く。

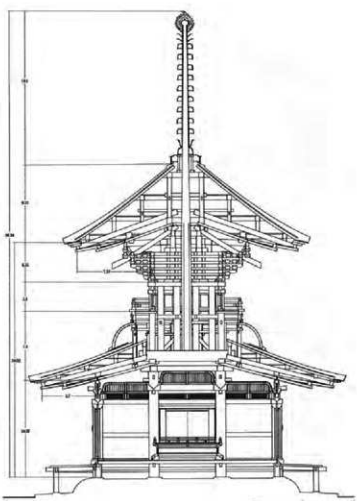


図62　金剛三昧院多宝塔断面図

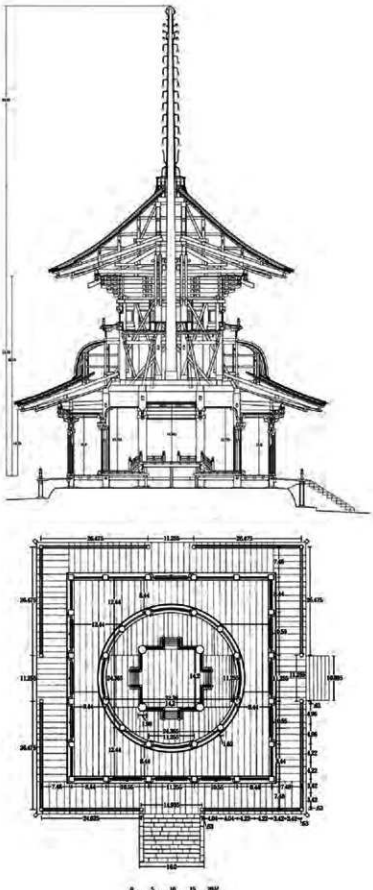


図 63　根来寺多宝塔（大塔）　下層平面図　断面図

3．復元の建築史的意義

現存する多宝塔の構造　慈光寺開山塔がもつ12本の柱を地面から立ち上げて宝塔の主屋および屋根を支持する構造は、現存する多宝塔には見られない構法である。現存する多宝塔の構造については、濵島正士による研究に詳しく、方形の下層は、面取り角柱を用いるなど裳階の扱いをするものの、その上に上層をのせるため、裳階の構造にはなっていないことが指摘されている（濵島正士 1975）。図62は、現存する多宝塔では最古級の金剛三昧院多宝塔（和歌山県高野町、1223年）の断面図で、ここから濵島が指摘する、下層が裳階の構造になっていないことが理解できるが、さらに、外観で下層屋根の上に見える亀腹も、意匠の一部であって、構造的な役割をもたないことがわかる。現存する多宝塔としては、唯一、円形の平面を残して大塔形式といわれる根来寺多宝塔（和歌山県岩出市、1547年）も、円形平面と下層屋根上の亀腹は、構造的には全く関係がないことが、図63から理解できる。

一方、発掘遺構では、円形の礎石列をもつ建物跡が発見されており、慈光寺開山塔の柱配置を彷彿と

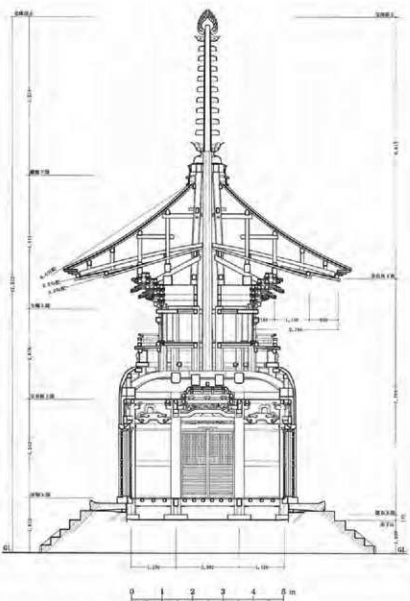


図64　池上本門寺宝塔断面図

させるものがある。それらを確認しながら、菅原遺跡のSB140の復元案について、その建築史的意義を考えてみたい。

現存する木造宝塔　下層屋根のない宝塔の造形は、鎌倉時代以降の美術工芸品には比較的多数の例があるが、建造物に相当する規模の大きな木造の事例は、慈光寺開山塔に加えて、真福寺宝塔（愛知県岡崎市、18世紀？）、本門寺宝塔（東京都大田区、1828年）が知られている（濱島正士 1999）。本門寺宝塔は、12本の柱を立てた円形の軸部上に梁を渡すなどして、上層の12本の柱を受ける構造で、近世的な手法と考えられる（図64）。真福寺宝塔は未指定のため詳細が不明。これに比べると、慈光寺開山塔は、下層の円形の軸部とは別に上層の柱12本を立てる点で、木造の宝塔の具体的な構造を知る上で重要である。規模が小さなためかもしれないが、現存する多宝塔に比べて単純な構造であり、宝塔の初現的な構造を彷彿とさせる。

堂庭廃寺宝塔跡　ところで、宝塔あるいは多宝塔の遺跡と考えられる、円形平面の礎石列を備えた発掘事例が2例ある。一つは堂庭廃寺[4]（宮城県仙台市泉区、10世紀前半）、もう一つは神感寺跡（大阪府東大阪市、鎌倉時代ヵ）である[5]。堂庭廃寺では、礎石間約1.50 mで12基の礎石あるいは礎石下の根石をめぐらせ、その約1.40 m外側に同心円状に人頭大の川原石をならべ、さらにその外側に瓦積基壇を備えた遺構が発見されている（図65　泉町教育委員会1968）。泉町教育委員会1968では、この川原石列を基壇とし、瓦積基壇の外側には砂粒が堆積することから、雨落ちと推定している。また、礎石や根石の内側には、黄粘土を敷き詰めた土間が造られていることから、板床を張らない土間と考えられ、瓦積基壇以外の瓦が出土しないことから、この建物は檜皮葺か柿葺と考えられるという。

坂田泉は、この遺構から、礎石列からなる円形の軸部を直径18尺とし、その上に塔身軸部を径7.5尺、軒の出を4尺の宝塔に復元できると考えた（図66　坂田泉1969[6]）。この推定だと、塔身が円形の軸部上に乗る本門寺宝塔のような構造を考えなければならない。また軒先の一辺15.5尺（4.0＋7.5＋4.0）は径18尺の円形軸部より小さくなる[7]ので、円形の軸部を雨から防ぐ裳階状の屋根を別途考えなければならない。さらに礎石の外側の同心円状（図66では十二角形）をなす石列の機能が明確でなく、その外側の方形の瓦積基壇も、軒先からの雨落ちではなく、雨水排水溝と理解しなければならなくなるな

図65　堂庭廃寺宝塔跡遺構平面図

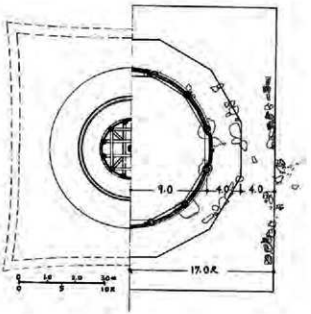


図66　堂庭廃寺宝塔復元図

ど、現代的視点から見ると遺構との齟齬が多い。

ここは、むしろ慈光寺開山塔の構造を参照して、径18尺の12基の円形礎石列で塔身の軸部を支持し、その4尺外側の同心円状もしくは十二角形の石列を円形軸部の地覆石と解釈する方が自然と思う。その場合、平の部分の基壇の出が8尺となり、軒の出も9尺程度となれば、瓦積基壇の外側に屋根からの雨水を落とすことができる。

神感寺跡　もう一つの事例である神感寺跡は、一辺23尺（7m）、高さ70cmの乱石積基壇上に、方3間の礎石列を確認し、その内部に環状をなす7つの礎石を検出したといい、多宝塔の遺構と想定されている[8]。遺構の年代は鎌倉時代のようだが、残念ながら概要報告（註8参照）では礎石列の規模など詳細が不明である。ただし、現存する多宝塔は、いずれも鎌倉時代以降のものながら、環状をなす柱配置をもつものはなく、周囲から古代の瓦が出土していることから、古代の形式を踏襲している可能性も否定できない。

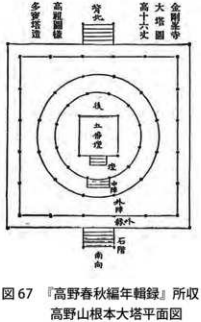


図67　『高野春秋編年輯録』所収 高野山根本大塔平面図

宝塔の初現形式　この2例の円形礎石列上に立つ柱が何を支持していたかは明確でない。また、円形平面をもつ多宝塔は、先述した根来寺大塔を除けば存在しないなかで、これらの遺構を宝塔あるいは多宝塔に比定する根拠も明確に記されてはいない。

しかし、類似する柱配置をもつのが多宝塔の上層であること、そして何よりも円形の平面をもつ歴史的建造物は、日本の建築史上、宝塔や多宝塔以外にないためであろう。こうした点で、慈光寺開山塔のもつ、地盤から12本の柱を立てて上層の上部構造を支持し、その外側に円形平面の下層軸部の構造を別に造る方法は、宝塔の上部構造としてきわめて単純であり、現存する他の宝塔や多宝塔には見られない初現的な形態と評価できると思う。すなわち、現状の慈光寺開山塔は16世紀の建物ではあるが、2つの発掘事例を勘案すれば、宝塔の初現的な形態を踏襲している可能性を指摘できると思う。

多宝塔の初現形式　そうした宝塔の外側に、方形の下層屋根をかけた形式が多宝塔と考えられている。すると、平面は、二重の円形柱列の外側に、方形の裳階の柱列がめぐることになるが、『高野春秋編年輯録』に載せる金剛峯寺大塔の平面（図67）がほぼこの形式となる。濵島正士は、外側の円形平面が亀腹（下層の軸部）と同径で、内側の円形平面が上層の軸部と同径であることを指摘しており（濵島正士1999）、上層軸部を礎石上に立ち上げる宝塔の構造に、裳階をめぐらせた形式となるのであり、慈光寺開山塔や堂庭廃寺宝塔跡などから想定できる宝塔に、裳階をめぐらせた形態と評価できる。これこそが、多宝塔の初現的形態と評価できるだろう。

SB140の復元案の評価　そのうえで、菅原遺跡のSB140の復元案について考えてみたい。SB140は、慈光寺開山塔や堂庭廃寺宝塔よりも規模が大きいために、鎌倉時代以降の工芸品の宝塔に見られるようなプロポーションではないが、円形の軸部と、12本の柱を地盤上から立ち上げて、上層の構造を支持する方法は、宝塔の初現的な構造と言える。

さらにその周囲には、平面略円形（十六角形）をなす掘立柱列をめぐらせる。それを掘立柱で造らなければならなかった理由は、柱を自立させて屋根を支持しなければならなかったためであるが、内部の構造体（主屋）と水平方向でつなぐことが難しかったためでもあると推測する。掘立柱列の内部にある

のは、円形軸部の壁体であり、これと水平材で連結できなかったことがその理由として考えられる。また、上層屋根の張り出しでは下層の円形軸部を覆いきれず、円形平面の外周掘立柱列を設ける必要が生じたと推定した。

下層軸部が円形である点、また略円形平面の裳階をもつ点が特異だが、これらは発掘遺構で検出されたものであり、小型瓦を用いた上層は多宝塔とほぼ同様の構造を想定した。板床を張らずに土間と推定したが、発掘遺構では板床を張った床束の痕跡も確認できていない。堂庭廃寺が土間であることを勘案して土間と考えた。

以上の SB140 の構造は、多宝塔の初現的な形態と評価できると思う。上層に小型瓦を用いるため、上層の 12 本の柱からなる平面は、小さくなるように考えなければならなかった。また、そうしないと上層の対面する組物どうしをつなぐ通肘木を一木で造れなくなるといった材料上の制限もある。

多宝塔の起源は、平安時代初期の空海や最澄によるというのが、教科書的な理解と思う。奈良時代にも「多宝仏塔」(銅板法華説相図)、「多宝之塔」(行基瓶記)といった文言は現れるが、それが、現在、多宝塔と呼んでいる形式の塔になるのかは立証できていない(濵島正士 1975)。空海や最澄が導入した多宝塔の形式は、その後、国内に流布して確立されるという点では、その起源と言えるのかもしれないが、そもそも、そうした多宝塔の形式が大陸にあったとすれば、それ以前に日本にもたらされていたと考えることは不可能でない。たとえば敦煌莫高窟の第 217 窟(盛唐)や 361 窟(中唐)に、宝塔あるいは多宝塔に似た形式の塔が描かれており(濵島正士 1999 および岩永省三 2007、図 75)、また、玉虫厨子の宮殿部背後には、相輪を備えた宝塔形式の土饅頭の中に仏が座す建物が描かれている。空海や最澄以前に、少なくとも絵画では、そうした建物の情報は日本にもたらされていたことがわかる(西岡秀輔 1998)。また、大陸にはそうした建築が存在した可能性もあろう。それが空海や最澄よりも早く日本にもたらされたとすれば、SB140 を多宝塔の形式に考えることは、無稽な話ではないと考えたい。

おわりに

以上、SB140 の遺構の特徴を確認したうえで、上部構造を検討してきた。その結果、多宝塔に似た形式に復元するのが最も妥当であると考えた。ただし、その構造は、現存する多宝塔には見られないものである。その特徴を掲げてまとめとしたい。

遺構で確認した内周円形土坑列上には、筒状に壁体が立ち上がるが、柱をもたずに地覆上に下地を立ち並べる壁構造と考えた。渡来系氏族の居住地で発見される、いわゆる大壁造りの住居と同様のものである。そしてその内部に、地盤面から立ち上がる 12 本の柱が三手先の組物を備えた構造体を支持して屋根をかけた上層を造る。この内周円形土坑列の壁体上部と上層軸部とを支輪状の天井でつないで、下層の主屋を形成する。これらは木造宝塔の実例である慈光寺開山塔の構造に古式を認めて倣ったものである。ここまでで宝塔の基本的な形態を形成する。上層は方形平面の瓦葺で、出土瓦から通常より小さいサイズの瓦を用いる。鬼瓦の出土数から稚児棟をもつと考えた。

さらに外周の掘立柱列には径 17cm の掘立柱を立てて桁をまわし、前述の支輪状の天井上から外周掘立柱上の桁に垂木を渡して檜皮葺の屋根を葺く。下層を掘立柱としたのは、内周円形土坑列上に形成された壁体が大壁構造であることから、繋梁を入れづらいためと解釈した。こうして形成された下層の屋根は平面十六角形をなし、宝塔の下層軸部にかかる裳階として機能する。

全体を見ると、平面は、内部 12 本の柱が平面円形にめぐり、その外側に円形の壁体をもち、さらにその外側に平面略円形(十六角形)に 16 本の掘立柱がめぐる構造となる。この形式は、形状にやや違

いはあるものの、『高野春秋編年輯録』に載せる金剛峯寺大塔の平面に共通する部分があり、多宝塔の初現的形態と位置づけることができる。

類例のない遺構が、特異な立地上に建つSB140の復元を通じ、発掘遺構や出土遺物からできる限りのヒントを得られるよう、発掘担当者とも議論を重ねて得た成果である。これには、慈光寺開山塔と堂庭廃寺宝塔跡の構造が似ていることが大きなヒントとなった。しかし、建築史的に見ると、その構造や年代に、やや唐突の感は否めない。鎌倉時代より古い宝塔や多宝塔の現存建築がないなかで、その初現的な形態について、今後のさらなる研究の深化に期待したい。

註

1）　敦煌研究院 2001 や蕭 默 2002 など参照。筆者も 2019 年に現地で比較的多数描かれているのを確認した。現地では壁画の写真撮影は禁じられているため、公刊本で探すしかないが、公刊本は建物の細部を見きわめにくい。

2）　慈光寺開山塔の建立年代は天文 25 年（1556）だが、解体修理に伴う発掘調査で出土した遺物から、12 世紀前半にはほぼ同規模の前身塔が存在したらしい（重要文化財慈光寺開山塔修理委員会 1965・都幾川村 1998・都幾川村 2001）。出土した須恵器製蔵骨器の年代は 9 世紀に遡り、その頃の前身塔の存在をうかがわせる他の出土遺物はないものの、蔵骨器は 9 世紀に埋納されながら、12 世紀前半になって前身の多宝塔が造られたと考えるよりも、蔵骨器が埋納されたと同時に、前身塔が創建されたと考えるのが自然と思う。

3）「年中行事絵巻」巻 1 の朝覲行幸の出発の場面を見ると、基壇上に建つ瓦葺の建礼門の内側に仮設の檜皮葺の屋根がかけられており、その柱礎形式は掘立柱である。

4）　堂庭廃寺宝塔跡については、発掘調査報告書（泉町教育委員会 1968）と、その検出遺構に基づいて上部構造を考えた、本文中で述べている坂田泉 1969 の論考がある。

5）　円形平面をもたないながらも、多宝塔の遺構と推定されている古代の遺跡に、国見山廃寺 SB03（岩手県北上市）がある。このほか、中世の多宝塔の発掘遺構としては、樺崎寺跡（栃木県足利市）、丹生都比売神社（和歌山県かつらぎ町）があるが、いずれも円形平面を残さず、現存多宝塔と同様の平面を示しし、一間四面堂との区別は難しい。

6）　坂田泉 1969 の論考は、本文末尾の記述によると、泉町教育委員会 1968 に掲載した建築的考察に不備があったため、復元案を訂正したものという。したがって、ここでは坂田泉 1969 の記述をもとに述べることとする。

7）　図 66 左半の破線は円形軸部の約 4 尺外に引かれており、坂田泉 1969 では裳階を想定していないので、本文とは整合していない。

8）　神感寺の発掘調査についての報告は、枚岡市教育委員会・神感寺跡調査団 1964。および当該概要報告では、内部柱は、「環状に大小 7 個の礎石が配されていたことがわかった」（13 頁）、「抜き跡をふくめて 7 個の礎石が配置され」（33 頁）とあり、実際に礎石がいくつ遺存していたのか、復元して 7 個なのかどうか明確でない。いずれも環状にめぐらせていることから多宝塔の遺構であり、鎌倉時代の遺構と考えられている。四条史編さん委員会 1977（『河内四條史』史料編 1）の 321 頁によると、側柱礎石は 4 基が遺存し 8 基の抜取穴を検出、内部柱は 6 基が遺存し 1 基の抜取穴を検出したようであり、325 頁では「8 本の柱が円形に立っていたことにな」ると想定している。いずれにしても、遺構図が示されていないため、基壇規模以外の詳細が明確でない。発掘時の写真は、東大阪市教育委員会 2000（『東大阪市の寺跡』）で紹介されている。平面正八角形をなす礎石上に柱が立つとすれば、隅を欠く平面となるため、多宝塔のような平面正方形の屋根は支持しにくくなる。この場合、多宝塔の上層の構造を支持する柱ではなく、下層の円形軸部を構成する柱と解釈するべきだろう。上層の構造は、その柱上に造られ、平面には現れないと考えざるをえない。

《参考文献》

浅川ほか 2022
　浅川滋男・岡田穎和・宮本正崇・篠永昌幸・加藤雅大・玉田花澄「菅原遺跡「円堂」の復元」『古代』第 149 号、早稲田大学考古学会
泉町教育委員会 1968『宮城県宮城郡泉町堂庭廃寺宝塔址発掘調査報告』
岩永省三 2007「段丘状仏塔の構造と系譜」『史跡土塔　－遺構編－』堺市教育委員会
元興寺文化財研究所 2021 遺跡解説資料「菅原遺跡　－平城京西方の円堂遺構－」
國立博物館 1948『法隆寺東院に於ける發掘調査報告書』
国宝金剛寺塔婆及鐘楼修理事務所編 1940『国宝金剛寺塔婆及鐘楼修理報告』
坂田 泉 1969「堂庭廃寺宝塔跡について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会
四条史編さん委員会 1977『河内四條史』史料編 1
蕭 黙 2002『敦煌建築研究』機械工業出版社
重要文化財慈光寺開山塔修理委員会 1965『重要文化財慈光寺開山塔修理工事報告書』
菅原遺跡発掘調査会ほか 1982『菅原遺跡　－平城京西方丘陵基壇建物跡の発掘調査－』奈良大学平城京発掘調査報告書 1 、菅原遺跡発掘調査会・奈良大学考古学研究室
都幾川村 1998『都幾川村誌　資料 2　考古史料編』
都幾川村 2001『都幾川村史　通史編』
敦煌研究院 2001『敦煌石窟全集』21 建築画巻
西岡秀輔 1998「日本における宝塔型仏塔建築の成立過程について　－律儀に見られる造塔法から－」『日本建築学会大会学術講演梗概集』
濵島正士 1975「多宝塔の初期形態について」『日本建築学会論文報告集』第 227 号、のちに『日本仏塔集成』(中央公論美術出版、2001 年) に再録。
濵島正士 1999「概説（多宝塔）」『日本建築史基礎資料集成 12　塔婆Ⅱ』中央公論美術出版
濵島正士編 1999『日本建築史基礎資料集成 12　塔婆Ⅱ』中央公論美術出版
東大阪市教育委員会 2000『東大阪市の寺跡』
枚岡市教育委員会・神感寺跡調査団 1964『河州神感寺跡の調査　概要報告』
枚岡市教育委員会・神感寺跡調査団 1965『河州神感寺跡の調査　第 2 次調査概要報告』
文化財建造物保存技術協会編 2010『東京都指定有形文化財　池上本門寺宝塔保存修理工事報告書』日蓮宗大本山池上本門寺
文化財建造物保存技術協会編 2017『重要文化財金剛寺金堂・多宝塔・鐘楼保存修理工事報告書 本文編』天野山金剛寺
村田裕介・佐藤亜聖 2022「菅原遺跡発掘調査の概要」『ヒストリア』第 290 号、大阪歴史学会

《図版出典》

図 57・58　元興寺文化財研究所作成
図 59　重要文化財慈光寺開山塔修理委員会 1965 『重要文化財慈光寺開山塔修理工事報告書』
図 60・61　濵島正士編 1999 『日本建築史基礎資料集成 12　塔婆Ⅱ』中央公論美術出版
図 62　文化財建造物保存技術協会編 2010 『東京都指定有形文化財　池上本門寺宝塔保存修理工事報告書』日蓮宗大本山池上本門寺
図 63・64　坂田 泉 1969「堂庭廃寺宝塔跡について」『日本建築学会学術講演梗概集』日本建築学会
図 65　濵島正士 1999 「概説（多宝塔）」『日本建築史基礎資料集成 12　塔婆Ⅱ』中央公論美術出版

第２節　出土瓦の検討

はじめに

今回の調査では、仏教関係遺構と考えられる方形の囲繞施設をもつ建物跡検出したにもかかわらず、瓦の出土が非常に少ないことが特徴的である。本節では本遺跡出土の瓦の基礎的整理を行い、併せて周辺調査で確認された瓦類との関係を整理しておきたい。

１．出土瓦類の概要

(1) 菅原遺跡 2020 年調査出土瓦類

今回の調査では、軒丸瓦が 6236D、6299A、6316Dc の３型式、軒平瓦が 6765A、6711B の２型式が出土した。軒平瓦 6711B 型式が遺構に伴って４点出土している以外は、１点のみのものも多く、表採資料など、遊離した状態で出土している。

以下、軒瓦のみならず、瓦類全体を遺構、整地土などのまとまりで整理しておくことにしたい。

囲繞施設関連瓦類　今回の調査で検出した囲繞施設である SC160 、SA170 、SC180 を構成する柱穴からは、多くはないが瓦類が出土している。軒瓦はなく、平瓦が多く、丸瓦が少ない傾向が看取される。丸瓦では、柱の抜き取り痕からは小型丸瓦（12）も出土している。平瓦には縦方向に半裁した可能性が高いものも含まれており、これは北区で検出した SK100 から出土している平瓦と共通する。これらは割熨斗瓦であった可能性が高いものと判断している。平瓦には西大寺および東大寺の造瓦司にみられる凸面押圧技法によって製作された平瓦も出土している。

また、北側で検出した SB150 の柱穴 m からは 6711B 型式の軒平瓦が出土しているほか、SC180 の北側で検出した SD034 からも同型式の軒平瓦２点が出土している。

全体に瓦の出土量が少ない中にあって、軒平瓦 6711B 型式の出土は際立っており、同型式の瓦は 1981 年調査区では全く出土していないこともあり、方形囲繞施設に使われていた可能性が高いものといえる。SD034 からは西大寺 26 次調査（奈良市）で出土した「西」刻印と同范の刻印平瓦（41）が出土しており、上記の凸面押圧技法の平瓦とともに差し替え用として搬入された可能性がある。なお、整地土Ⅱからは西大寺系の 6236D 型式の軒丸瓦も出土している。

ただし、軒平瓦に組み合う軒丸瓦の出土がみられず、割熨斗瓦と考えられる平瓦が出土することなど、囲繞施設が掘立柱構造であることと合わせて、これらの瓦は屋根の甍にのみ使用されていた可能性が想起される。

整地土Ⅰ出土瓦類　整地土Ⅰはすでに報告したように（30 頁）、建物および囲繞施設を造営する際に行われた地業時の客土である。ここから、囲繞施設所用瓦と考えている 6711B 型式の軒平瓦が１点出土している。当該資料は囲繞施設の屋根に用いるために搬入されたものが、造成時の整地土に紛れ込んだ可能性が高い。6711B 型式は平城宮瓦編年のⅢ -2 期（749 ～ 757 年）とされ、今回の調査で検出した一連の遺構群の上限年代を特定する上で重要な位置を占める。

(2) 菅原遺跡 1981 年調査出土瓦類

1981 年の調査では、軒丸瓦が菅原 A 類、菅原 B 類、菅原 C 類、6225A、6236D、6281A、6299A、6316Dc、6316M の９型式と軒平瓦が 6681S、6710D、6765A の３型式が出土している。

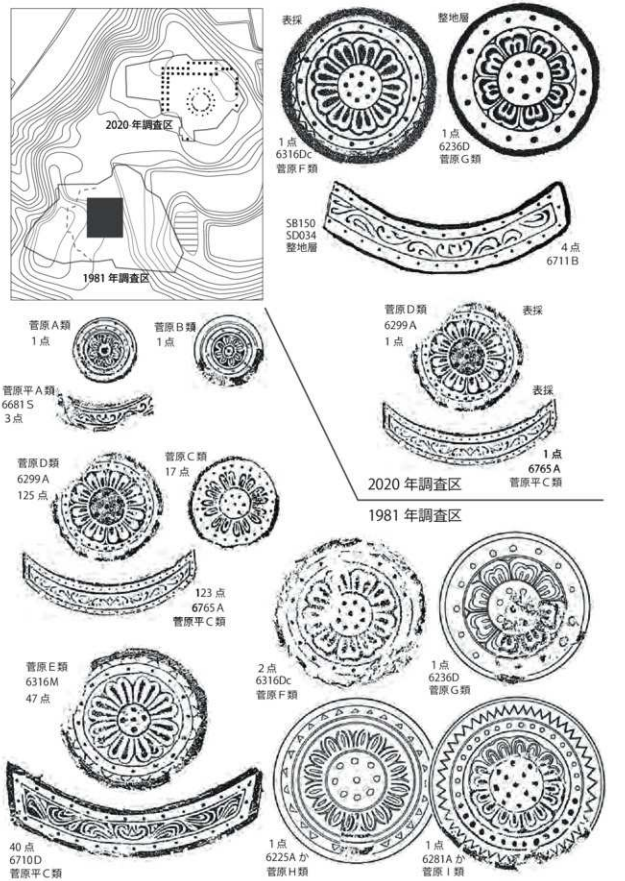


図 68　菅原遺跡出土の軒瓦

菅原遺跡を特徴づけるのは、大きさの異なる多様な瓦の出土である。出土点数については図68に記したとおりであり、出土点数の対応関係から、中型瓦では軒丸瓦6316M－軒平瓦6710Dがセット、小型瓦では軒丸瓦6299A－軒平瓦6765Aがセットであると考えて問題なかろう。また、数点ではあるが超小型瓦についてもセット関係で出土している。

この小型瓦については1981年調査時には、大きさの異なる瓦の混在に対する明快な回答は示されていなかったが、今回の調査では柱の抜き取り痕から小型瓦が出土し、周辺からは小型軒瓦が採集されることなどから、SB140の上層に葺かれた可能性を想定することとなった。

(3) 平城京右京三条三坊八坪出土瓦類

菅原遺跡から東に約1.3kmの平城京右京三条三坊八坪の調査（257-1次）では同范の瓦が複数出土している（奈良市1994）。ここでは1981年調査時に出土した小型瓦のみならず、超小型瓦も出土しており、密接な関係を示唆するものである。

この調査では瓦類が整理箱で45箱分出土、菅原遺跡と同范の小型軒丸瓦6299AはSE206掘方とSE207井戸枠抜き取り穴から1点ずつ出土している。小型軒平瓦6765A型式はSE206枠内から2点、SE206掘方から13点、SE207井戸枠抜き取り穴から4点、SD208から2点、SD210から1点、遺物包含層から1点出土している。また、菅原遺跡と同范の小型の鬼面文鬼瓦の下顎部分の小片がSE206掘方から出土している。また、超小型軒平瓦6681S型式も出土しており、当該資料には顎部に朱線が確認される。

出土遺構はいずれも室町時代の屋敷地に関係するものであり、瓦の生産年代と埋没年代には500年以上の隔たりがある。室町時代に至っても、菅原遺跡で用いられていた奈良時代の瓦が埋没することなく転用可能な状態であったことを考えると、菅原遺跡の来歴を考える上でも重要な成果であるといえる。

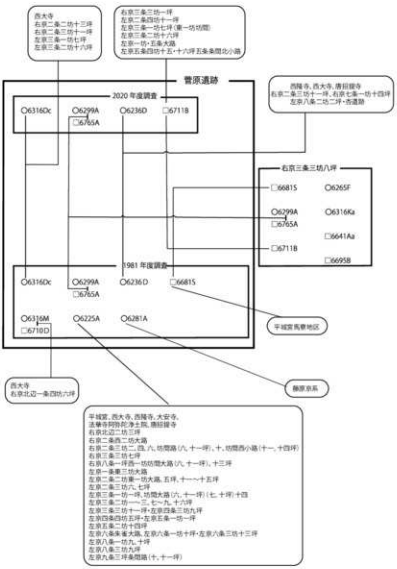


図69　菅原遺跡出土の軒瓦相関図

2．出土瓦の相関関係

菅原遺跡で出土した軒瓦の同范品を相関図（図 69）にまとめるとともに、平城京内における出土分布を図 70・71 に示した。

出土点数が 1、2 点のものもあるが、ここでは比較的まとまって出土しているものを中心に遺構の在り方と合わせて現状での考え方を整理しておくことにしたい。

先に記したように菅原遺跡から出土する軒瓦のうち、小型の軒丸瓦 6299A －軒平瓦 6765A のセット、超小型軒平瓦 6681S 型式と軒平瓦 6711B 型式が平城京右京三条三坊八坪で出土している。これらは室町時代の屋敷地の井戸枠などに転用されたものが多く、距離的には 1.3km ではあるが、時間的な隔たりは大きい。

室町時代の段階に菅原遺跡に遺留された瓦が 500 年以上も埋没することなく残っていて、それをそのまま転用したとは到底考え難く、平安時代初頭までは現地で維持されていた堂舎がある段階で移転し、そこに葺かれていた瓦が井戸枠などに転用されたと考えるのが穏当である。その場合、室町時代の転用時にわざわざ遠隔地の瓦を用いたとは考えにくいので、近隣に移転先が存在した可能性が高いものと憶測する。

すでに報告してきたように、今回の調査で検出した回廊と塀、建物はいずれも丁寧に柱を抜き取って埋め戻されていることが判明している。これは平安時代以降のある段階において行われた移転のための造作であった可能性もある。

平城京右京三条三坊八坪から出土する同范瓦をみると、1981 年調査でまとまって出土した軒丸瓦

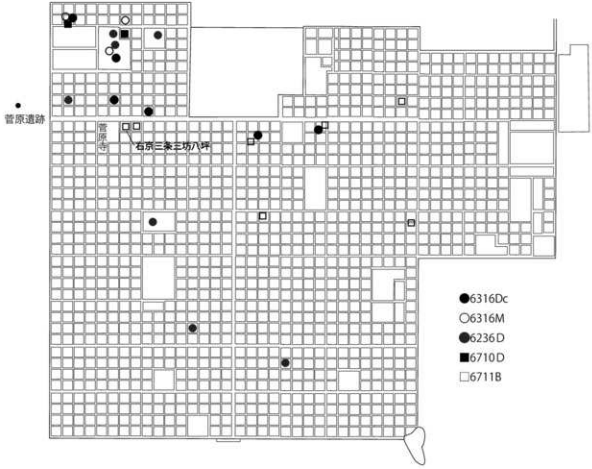


図 70　菅原遺跡出土の中型軒瓦型式の分布

6316M －軒平瓦 6710D のセットは出土していない。この軒瓦のセットは今回の調査でも出土しておらず、1981 年調査の基壇建物の所用瓦であると考えられる。一方、1981 年調査では 1 点も出土していない軒平瓦 6711B 型式は今回の調査で 4 点出土し、これが平城京右京三条三坊八坪からは 1 点ではあるが出土している。

以上を勘案すると、1981 年調査で検出された基壇建物は移築されることはなかったと考えることができる。一方、今回の調査で検出した方形囲繞施設は、その重要性ゆえに平城京右京三条三坊八坪に隣接する菅原寺付近に移されたのではないだろうか。

まとめにかえて

1981 年の菅原遺跡の調査ののち、1992 年の平城京右京三条三坊八坪の調査で室町時代の室町時代に転用された同范瓦が確認されるという重要な調査成果が報告された。そして、2020 年、今回報告の対象としている新たな発見があった。実に 40 年の時を経て、少しずつ検討材料が蓄積されてきているが、いまだ菅原遺跡の終焉から室町時代屋敷地での瓦転用までの 500 年以上の時間を埋めるためのピースが足りていない。

菅原遺跡が『行基年譜』に菅原寺の西の岡にあったと記された「長岡院」の有力候補地であることはもはや動かない。今回の調査で検出した方形囲繞施設の移築先としては、行基入滅の地であった菅原寺（喜光寺）がその候補地となると憶測するが、この点については今後の調査に期待したい。

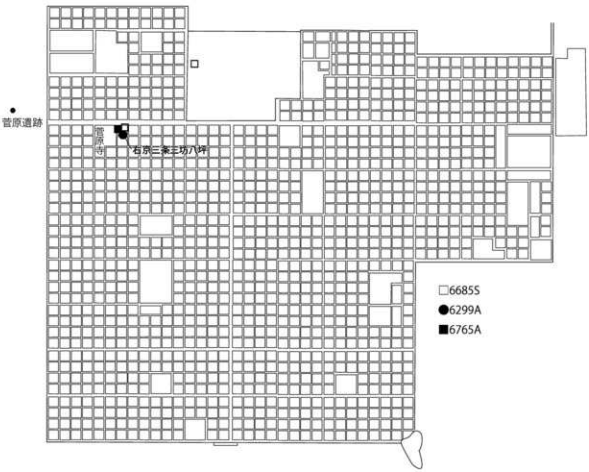


図 71　菅原遺跡出土の小型・超小型軒瓦型式の分布

《参考文献》

菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室 1982『菅原遺跡：平城京西方丘陵基壇建物跡の発掘調査』奈良大学平城京発掘調査報告書 1
奈良国立文化財研究所 1978『平城宮出土軒瓦型式一覧』
奈良国立文化財研究所 1978「平城宮発掘調査報告Ⅸ一宮城門・大垣の調査一」『奈良目立文化財研究所学報』第 34 冊
奈良国立文化財研究所 1979「唐招提寺或壇の調査」『昭和 53 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
奈良国立文化財研究所 1984「平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告」
奈良国立文化財研究所 1984「平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査」
奈良国立文化財研究所 1985「平城宮発掘調査報告 XII一馬寮地域の調査」『奈良国立文化財研究所学報』第 42 冊
奈良国立文化財研究所 1989「西大寺境内の調査」『昭和 63 年度平城宮発掘調査部発掘調査概報』
奈良国立文化財研究所 1991「平城宮発掘調査報告Ⅷ（本文）」『奈良国立文化財研究所学報』 第 50 冊
奈良国立文化財研究所 1991「西隆寺旧境内の調査 (2) 第 219 次」『1990 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
奈良国立文化財研究所 1993「西隆寺発掘調査報告書」『奈良国立文化財研究所 40 周年記念学報　学報第第 52 冊』
奈良市教育委員会 1984『平城京左京二条二坊十二坪奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告』
奈良市教育委員会 1990「平城京右京三条三坊一坪の調査 第 169.173.182.184 次調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成元年度
奈良市教育委員会 1990「平城京左京三条二坊十六坪 の調査 第 187 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』　平成元年度
奈良市教育委員会 1992「平城京左京三条二坊十六坪の調査 第 231 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 』平成 3 年度
奈良市教育委員会 1992「平城京右京三条三坊六坪の調査 第 226-1 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 3 年度
奈良市教育委員会 1994「平城京右京三条三坊八坪・菅原東遺跡の調査 第 257-1 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 5 年度
奈良市教育委員会 1996「平城京左京八条二坊二坪・杏遺跡の調査 第 337 次・第 340 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』 平成 7（1995）年度
奈良市教育委員会 1996「平城京右京二条三坊七坪の調査 第 326 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 7 年度
奈良市教育委員会 1997「平城京右京二条三坊十一坪の調査 第 327-5・351-1 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』 平成 8 年度
奈良市教育委員会 2006「平城京跡（右京七条一坊十四坪）の調査　第 419 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』 平成 15（2003）年度
奈良市教育委員会 2006「西大寺旧境内の調査第 16-1・-2・-3 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』　平成 15（2003）年度
奈良市教育委員会 2009「平城京跡 (左京五条四坊十五・十六坪・五条条間北小路) の調査 第 557・568 次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 18（2006）年度
奈良市教育委員会 2009「平城京跡 (左京一坊・五条大路) の調査 第 562 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 18（2006）年度
奈良市教育委員会 2014「平城京跡（右京北辺四坊三・四坪）の調査　第 647 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 23（2011）年度
奈良市教育委員会 2017「平城宮跡（右京二条二坊十三坪）の調査　第 686 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 26（2014 年度）
奈良文化財研究所 1989『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』
奈良文化財研究所 2001「西隆寺の調査 一第 320・324 次」『奈良文化財研究所紀要』2001
奈良文化財研究所 2001「左京三条一坊の調査一第 314 － 7 次」『奈良文化財研究所紀要』2001
奈良文化財研究所 2007『西大寺食堂院右京北辺発掘調査報
原田憲二郎 2017『平城京内出土の 6225・6663 系軒瓦』
「古代研究Ⅷ一平城宮式軒瓦の展開 1　6225―6663 系―　―平城宮式軒瓦の展開 2　6282―6721 系―」
古代瓦研究会シンポジウム記録　奈良文化財研究所

第３節　鉄製円盤の検討

はじめに

今回の調査では南区とした調査区において回廊と塀によって方形に囲繞された区画の中心から円形建物跡が検出された（図 72）。

すでに報告を行ってきたように、この調査区では特徴的な遺構やその配置に対して、遺物の出土数は多くなく、土器では杯や皿など、わずかな供膳具が出土しているのみであり、瓦についても溝などではまとまって出土しているものの、その多くは細片である。もちろん、後世の削平も一因ではあるが、遺構の性格を考えると日常的な生活の場であるとは考えられず、必然的に土器が消費されて廃棄されるような場ではなく、敷地一帯が清浄に保たれていたことを示唆するものともいえる。

そのような中、西面回廊の SC160 の柱穴である SC160g と SC160h とした柱穴から出土した鉄製品は注目される存在である（図 73-1・2、以下図番号は略）。当然、この鉄製品に関しては、調査時から留意されており、円盤状を呈することから鉄鏡などである可能性が想定されていた。

本文中で報告したように、本例は円盤状の鉄製品であり、隣接する柱穴掘方から出土している。両者ともに錆が著しく表面が荒れているが、X 線画像で確認すると、穿孔や鈕などの突起、文様などは確認できず、いずれも無文の板状円盤である。両者は最大径 6.0cm 前後で共通しており、直径２寸を意図して、同一規格で作られた一連の鉄製品であると考えられる。

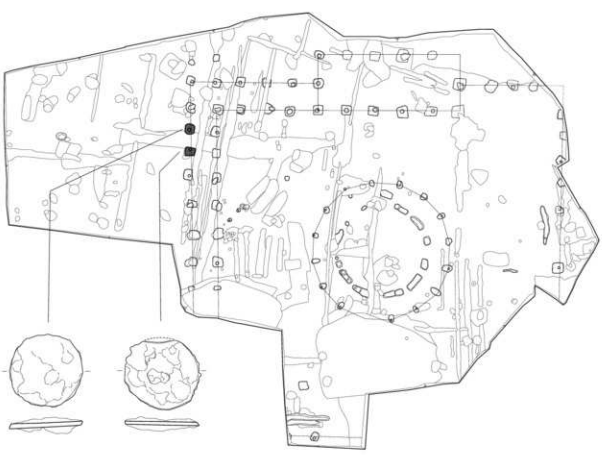


図 72　鉄製円盤の出土位置

1．類似資料の抽出

以下、他遺跡出土の類似する鉄製円盤を含めて検討を行い、その性格に関する予察を行うこととしたい。

なお、当該遺物は厚い錆に包まれた「板状を呈する円形の鉄製品」である。「鉄製」「円形」「板状」という属性要素を抽出しうるが、元来の表面加工がどのような状況であったのかなどは、現況からは知る由もない。

したがって、以下、いくつかの類例を掲げるものの、属性要素が限られており、似て非なるものを同じ俎上にあげている可能性を危惧するが、本例の歴史的な位置付け、さらには向後の類例資料の出土に備え、不十分ながらも検討を加えておくことにしたい。

なお、類例資料といえども、悉皆的に報告書を確認したわけではなく、「全国遺跡報告総覧」の助けをかり、いくつかの類例にたどり着いている。ただし、当該資料については、その性格について定見をみないことも相まって、「鉄製円盤」、「鉄製円板」「円盤状鉄製品」等々、様々な名称が付与されている。したがって、検索機能を駆使しつつもかなりの遺漏があることが想起される。

上記のような制約下ではあるが、数例の類例を掲げる。

寺家遺跡　寺家遺跡は石川県羽咋市寺家町・柳田町、能登半島の千里浜海岸の北部に位置する（石川県1988）。ここからは「気多神」に関連する祭祀関連の遺構検出され、祭祀遺物が多種、多数出土している。

当該遺跡から出土した鉄製祭祀遺物のなかに、鉄製円盤として報告される一群がある。鉄製円盤は砂田地区で１点、祭祀地区で６点出土している（3～5・7）。

報告書では、3は「径 56mm・厚さ 5mm の円盤で、全体に中央部が若干湾曲している。縁が真っ直ぐ切れて、鋳造品に近い印象を受ける資料である。表面に、若干木質が付着している」、4は「径

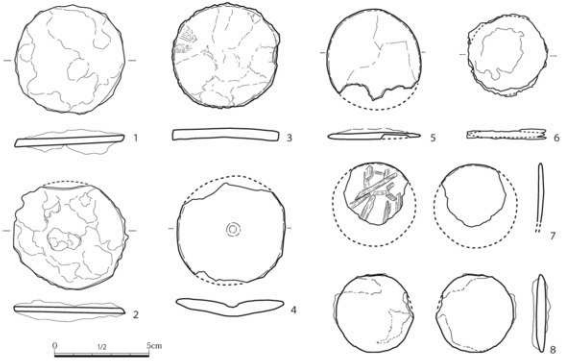


図 73　鉄製円盤の類例

56.75mm・厚さ3.8mmで、片面が凸レンズ状に湾曲した円盤」、5は「直径50mm・厚さ3mmで、断面が凸レンズ状になった円盤」とされる。

3と4はほぼ同大であり、法量的には菅原遺跡のものに近似する。7は外縁の4分の3を欠失しているが、およそ45mm前後に復元され、5とともにやや小ぶりな一群である。

なお、寺家遺跡では鈕をもつ鉄鏡も出土しており、円環状の鈕をもつものは直径71.55mm、方形で穿孔のない鈕をもつものは直径が40.9mm、44.15mmである。

坂元遺跡　坂元遺跡は兵庫県加古川市野口町に所在する（兵庫県2006）。近隣には古代山陽道が走り、周辺では古くから播磨国府系の瓦が採集されている古大内遺跡、「賀古駅家」比定地のほか、古代の野口廃寺なども所在する。

鉄製円盤（6）は飛鳥～奈良時代の集落跡で検出されたピット（7区：P36）から出土している。報告では「径4.0cmの鉄製円盤で、厚みは錆によって膨らんでいると思われるが、現状で0.2cmである。X線写真で観察しても孔などはなく、用途は不明である」とされる。

藤丸遺跡　藤丸遺跡は彦根市高宮町、大堀町に所在する古墳時代から古代の遺跡である（彦根市2013）。鉄製円盤は古代の竪穴建物SH01床面から出土したものである（8）。報告では「円盤状鉄製品で径4.3cm、厚さ5mmを測る。鉄製紡錘車の紡輪の可能性もあるが、孔の有無が不明であり、判然としない」とされる。

2．祭祀具としての鉄製円盤

菅原遺跡の鉄製円盤2点は、隣接する柱穴掘方からの出土であることに加えて、いずれも直径約6cm、厚さ3～5mmを測り、ほぼ同形同大である。錆など後世の影響を受けつつも、これらが一定の規格をもって、同一法量で製作されたものであることを窺うことができる。

同様の視点で寺家遺跡出土例（3・4）をみると、菅原遺跡のものよりもわずかに小ぶりではあるが、その法量の共通性から同じ規格で作られたものと考えることができる。これらは、直径2寸を意図して製作された可能性が高いといえる。

神社本庁編『改定諸祭式要綱』の「地鎮祭」の項をみると、地鎮祭祭具の細目「鎮物（忌物〔斎物〕）に鉄人像（長四寸・幅二寸・厚五厘　五枚）、鉄鏡（径二寸・厚一分　五面）、鉄小刀子（長四寸・幅一寸・厚一分　五枚）が掲げられている（図74、神社本庁編1959）。また、附記として、場合によっては以上の三種の数を倍加するほか、さらに鉄長刀子（長五寸・幅一寸）、鉄鉾（長五寸、幅一寸）、鉄盾（長四寸、幅上一寸五分下一寸）及び玉（石又硝子　径五分）各十枚を加えることもあると記される。

興味深い点は鉄鏡の法量と員数に関する記載で「径二寸・厚一分　五枚」とされることである。

この点は、先に掲げた寺家遺跡および菅原遺跡出土の鉄製円盤の直径が二寸、厚さ一分を意図して製作されている事実との関係において留意される点である。

ただし、「地鎮祭」に用いられる鉄鏡の法量に関しては、どこまで遡

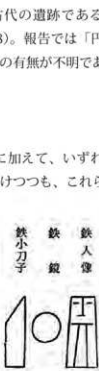


図74　地鎮祭鎮物

りうるのかは、寡聞にして明らかにできていない。

ただ、法量に関する記載はないものの、延暦23（804）年の『皇太神宮儀式帳』や『止由気神宮儀式帳』の中に「宮地鎮謝」（地鎮祭）に用いるものとして「金人形廿口、鏡廿面、鉾廿柄、太刀廿柄･･･」という記載がある。同じく『延喜式』には式年遷宮に伴う宮地鎮祭に際して「鐵人像・鏡・鉾各40枚、長刀子20枚、鋍4柄、鎌2張、小刀子1枚、鍬2口、五色薄絁各1丈、木綿・麻各2斤」が用いられたことが記される（神道大系編纂会 1970）。

これらの史料から、少なくとも9世紀初頭段階において、地鎮には鉄製の人形や鏡が用いられていたことを知ることができる。

ただ、この一文では「金（鐵）」が人形（人像）のみにかかるのか、鏡などにもかかるのかが判然としない。しかし、現在も古式に則って行われている伊勢神宮の鎮地祭では、奥に置かれた案に忌物を載せており、その忌物が「鉄人像、鉄鏡、鉄鉾、鉄刀子など」であるという（茂木 2019）。古来の伝統を継承していることを考えると、古記録にみえる忌物も鉄製であった可能性を想起させるものである。

直接的な根拠には欠けるものの、菅原遺跡出土の鉄製円盤は、一つの可能性として地鎮に伴う鎮物の「鉄鏡」であった可能性を指摘しておきたい。

まとめにかえて

冒頭でも記したように菅原遺跡で出土した鉄製円盤に関しては、その性格を特定する属性に乏しい上に類例も多く見いだせないなど、単体では難解な考古資料といえる。

本稿では、地鎮に用いられた「鉄鏡」である可能性を指摘したものの、仮にこれが首肯できるものであっても、仏教的な施設でありながら、神道系の地鎮具を用いる意味や理由など、肝心な点は棚に上げたままである。

残された課題はあまりにも多いが、性格不明の遺物を研究の俎上にのせるべく検討を行ってきた。今後の類例増加、新たな知見が得られた段階で再考を期したい。

《参考文献》
石川県立埋蔵文化財センター 1988『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』
元興寺文化財研究所 1984『古代研究』28・29「地鎮・鎮壇」
島谷和彦 1992「地鎮めの諸相」『関西近世考古学研究』Ⅲ　関西近世考古学研究会
神社本庁編 1959『改定諸祭式要綱』神社新報社
神道大系編纂会 1970「皇太神宮儀式帳・止由気宮儀式帳・太神宮諸雑事記」『神道大系　神宮編-1』）
神道大系編纂会 1985『神道大系』首編三　古今神学類編（中）
彦根市教育委員会文化財部文化財課 2013『藤丸遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告書 53
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2006『坂元遺跡 1』兵庫県文化財調査報告 308
茂木 貞純 2019「地鎮祭の歴史とその意義」『Consultant』Vol.284< 特集 > 祭り～非日常と祈りの文化～　（一社）建設コンサルタンツ協会
森川実 2013「平城京の地鎮とその執行者」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所

第５章　調査のまとめ－要点の整理と課題

はじめに

本章では、調査によって明らかになった点を整理し、あわせて本遺跡の造営主体についても検討を行う。なお本章では全体のまとめという位置づけ上、他章との重複もあることを了承いただきたい。

1．囲繞施設について

（1）規模

本遺跡で検出した囲繞施設は、西面・北面西半を回廊、東面・北面東半を板塀とする。南面は構造が不明である。規模については、中心建物 SB140 との位置関係から、回廊（SC160）棟通りと塀（SA170）が設計基準と考えられ、その東西距離は 37.8m を測る（図 58）。しかし柱間寸法にかなりばらつきがあり、また西北隅には余計な柱穴を埋め戻した痕跡が見られるなど規格性に乏しいことが特徴である。

（2）屋根構造

域内南部の排水溝と思われる SD034 より瓦が出土しており、回廊には瓦が使用されていたと考えられる。ただし掘立柱構造であり、総瓦葺では重量を支え切れないうえに瓦の出土量がそもそも少ない。母数が少ないながらも、丸瓦と平瓦の比率をみると平瓦が圧倒的に多く、その中には半裁した平瓦がかなりみられる。これを割熨斗瓦と考えると、檜皮葺甍棟構造と思われる。その場合軒平瓦は熨斗積みの底部に置かれていたものと考えられる。

2．正面観について

（1）回廊と中央建物の関係からみえる南正面観

菅原遺跡を評価するためには施設そのものの正面観を決定することが重要である。まず本遺跡で検出した囲繞施設について、囲繞施設 SC160・SA170 と中心建物 SB140 の関係を検討する。

SC160 と SA170 の距離は SC160 内法の場合、その東西距離は 36.5mであり（図 57）、この二等分線は SB140 中心点とは約 1.5m東にずれる。そこで SC160 棟通りを基準とした場合は 37.8mとなり、SB140 の中心が区画の二等分線（中軸線）と正確に一致する。これに対し南北では明らかに南側が広く、SB140 外周掘立柱列と方形囲繞区画内法との間隔は北では 14.9 mであるのに対して南では 19.7 mとなる。こうした中心建物の南面が広くなる事例は法隆寺東院夢殿、興福寺北円堂などでもみられ、いずれも南を正面とする場合の配置である。こうしたことから菅原遺跡においても南を正面と考えることができる。

（2）東に対する意識

上記分析から菅原遺跡の基本的な方位は南北軸線にあると思われる。しかし、本遺跡は南と同時に東方向も強く意識した配置となっている。その根拠を以下に列挙する。

① 東西で囲繞施設の構造が異なる。

② SA170 では柱穴が検出されず、２間分の柱間寸法をもつ箇所があり、これを東門に関連するも

のと想定している（28 頁）。

③ SB140 と SA170 の間で検出した東西溝 SD020 には玉砂利と考えられる円礫が含まれており、これを東側からの参道の南側溝の痕跡と考える（29 頁）。

④ 1981 年調査で検出された建物は、立地からみて西に入り込んだ谷の谷頭で東面していたと考えられることから、両者ともに東面していた可能性がある。

⑤ 標高の一致は偶然である可能性もあるが、平城京を挟んで東大寺と対峙する位置関係、さらには、菅原寺・東大寺両者から見える（見わたせる）という景観に意図的なものが感じられる。

この二方面性について次に二条条間南小路との関係を検討してみたい。

（3）二条条間南小路との関係

平城京の条坊区画推定に用いられる水田や道路の遺存地割の観点からみると、図 1 では平城京西京極から SB140 に向かって直線的に西へ続く道路がある。この道路は平城京内では二条条間南小路に相当する位置に接続しており、これを積極的に評価すると奈良時代においても二条条間南小路からの道が存在していた可能性がある。従前から指摘されているように平城京内においては河川の改修、付け替えが行われており、菅原遺跡の東側を流下する大池川についても本来は南東方向に流れる流路が二条条間南小路に沿う形で流路が付け替えられている可能性が高い（図 4 ）。

こうした想定を元に、具体的に遺構として確認されている二条条間南小路との位置関係を検討してみたい。ただし、右京側における二条条間南小路の良好な検出事例はほとんどない。左京も含めた最も確実な検出例としては、奈良市内侍原町左京二条六坊三～六坪で検出された東六坊坊間西小路と二条条間南小路交差点が参考となる（元文研 2009）。ここで検出した交差点中心の座標値は X ＝－ 145,533.11、Y ＝－ 16,062.67 である。菅原遺跡で検出した東塀 SA170 の柱間が 2 間分空く部分の南北中心位置は X=－ 145,535、Y ＝－ 21,360 であり、両者の位置関係は W-0° 1′ 18″ -S となる。入倉徳裕は三条条間路の回帰線を N-0° 7′ 22″ -W と推定しており（入倉 2008）、この方位を適用して遺跡周辺における二条条間南小路の位置を推定すると X ＝－ 145,544 付近（SB140 の南端付近）となる。外京域における条坊道路は道路片側割り付けなど振れがあることから（佐藤 2022）、正確な数字を導くことは難しいが、ほぼこの円堂のエリア内に二条条間南小路の延長が導かれるとみて間違いない。

以上の点から、本遺構は伽藍としては南北軸線だが、二条条間南小路の延長上に位置して東に入り口をもち、非常に東を強く意識している可能性が極めて高い。ただし内部に配置される SB140 は南に前庭的空間を有している可能性が高く、南北軸と東西軸が交錯する方位を有している点に本区画の特殊性がみられよう。

3. 創建年代と維持管理について

（1）創建年代

本遺跡検出建物の創建時期については、造成時に敷設された整地層から 6711B 型式軒平瓦（57）（平城宮瓦編年Ⅲ -2 期（749 ～ 757 年））が出土しており、また北側建物 SB150 柱穴 c 掘方から出土している土師器杯 B（1）は平城宮土器編年Ⅲ期（730 ～ 760 年）に位置づけられ、その形態は天平勝宝 2 年（750）木簡を伴う平城宮 SK2102 との類似性が見られる[1]。6711B 型式軒平瓦は北側建物 SB150 柱穴 m 抜取痕、南側排水路 SD034 からも出土しており（5･35･36）、本遺跡の主要瓦がこの型式であったと考えられる。以上の点から、本施設の創建年代は 749 ～ 760 年に位置づけることができる。

(2) 補修・廃絶年代

SD034 出土平瓦の中には、「西」の刻印をもつものがある（41）。この刻印は西大寺出土資料に同范資料が確認でき、西大寺創建（天平宝字４年（760））以降に瓦の差し替えが行われていたことが判明した。また、追加調査で調査区北側に確認した遺物包含層（整地土Ⅱ）からは、平城宮土器編年Ⅴ期（770～784 年）以降の土器（45・46）や、西大寺創建軒丸瓦（6236D 型式）が出土しており（56）、当地での活動が８世紀後半まで継続していたことがわかる。ただし回廊や塀の柱穴に建て替えの痕跡は一切確認できず、中央建物 SB140 を含め、瓦の差し替え程度の修復にとどまっていたと考えられる。

(3) 廃絶の状況

本遺跡の最終廃絶時期については、周辺の表採土器・瓦（91～93・95）、奈良大学調査で出土した小型軒丸瓦（SB140 に使用されていたと思われる）などの型式から、９世紀初頭に位置づけられる。

廃絶に際しては全ての柱材を丁寧に抜き取り、柱を抜き取った柱穴を丁寧に埋め戻していることや、軒瓦を含め瓦類に完形のものが見られず、瓦の移動が行われたと推定されることから、移建を視野に置いた計画的な廃絶状況を想定できる。

4. 中央建物の構造について

(1) 内周土坑列と外周柱列の性格

内周土坑列の性格については、その配置が円形を呈すること、その性格として転用石を埋設したものであること、うち１つは 147°の角度を持つ切石の痕跡が確認でき、これは正八角形の内角（135°）とは異なること、またその配置は内周土坑列の配置と整合性を持たないことなどから、これらの石材は八角形や円形の石造基壇地覆石にはなり得ないことが指摘できる（18 頁）。また、内周土坑列はその配置から八角円堂の８本柱の礎石痕跡にも、多宝塔にみられる 12 本柱の礎石にもなり得ない。

続いて外周柱列は等間隔で直径 17cm 前後の柱を据える。外周柱列は土饅頭形のストゥーパを取り囲む柵とすることも不可能ではないが、門となるべき部分がなく、また囲繞施設内にさらに柵を回す理由が説明しにくい。周辺から小型瓦が出土しているが、回廊は通常の瓦を利用した甍棟構造であることが判明しているため、小型瓦は中央建物に使用したものと考えざるを得ない。ただし外周柱列を、屋根を支える掘立柱建物とした場合、16 角形掘立柱構造となり、後に述べるように繋梁を持たない構造では瓦を利用できない。そうすると瓦を葺いていたのは上層ということになり、これに檜皮葺の裳階を持つ構造が想定できる。

(2) 中央建物の構造案

円形壁立構造　内周土坑列が長方形石材や不定形石材を不規則な間隔で並べる不自然な構造をもつこと、切石など廃材利用をうかがわせる石材利用状況であること、基壇とするには中途半端な直径をもつことから、内周土坑列をかなりの重量を支えるための基礎構築物を抜き取った痕跡と判断した。そしてその構造を円形の壁立構造と考えた。また、外周柱列が掘立柱であるのは、壁立構造では繋梁など水平材を支持させにくいため、裳階を掘立柱構造にして自立させたことが理由と考えられる。

上層は方形屋根　本遺跡及び 1981 年調査で出土した小型瓦は、本遺跡の中央建物に使用していたものと考えられるが、これらは上層に葺かれていたものと考えられる。1981 年調査では約 45°の角度を持つ隅切瓦が出土しており、上層屋根は正方形が想定される。小型瓦は通常瓦の２／３のサイズであり、上層屋根も通常の２／３で復元した。

(3) 多宝塔形の起源問題

今回の復元では多宝塔の形状が最も有力という結論を得た。しかし、多宝塔の形状が奈良時代にありえるかという疑問は残る。

現存する最古の多宝塔は建久5年（1194）創建の滋賀県石山寺多宝塔であり、現存資料からは平安時代後期を遡るものは確認できない。記録上は最古の多宝塔として和歌山県高野山金剛峯寺多宝塔がある。これは空海が真言曼荼羅の塔（毘盧遮那法界体性塔）として考案したもので、創建大塔の型式は不明だが、『高野春秋編年輯録』所収の康和5年（1103）再建の二代目大塔の記録に創建期大塔が「高さ16丈、方5間で広さ8丈の裳階に水輪柱12本、母屋内柱12本、仏壇柱4本」を有していた記録があり、創建大塔が上層円形、下層内陣円形、外陣方五間の可能性があるとされている（足立1941、濱島1975）。いずれにしても平安時代をさかのぼる多宝塔形式の塔はその存在を確認できないが、そもそも毘盧遮那法界体性塔としての原型は、龍猛が南天鉄塔から金剛頂経を得たとする『金剛頂経大瑜伽秘密心地法門義訣』の情報である（阿部1996、真鍋1983）。しかし経典には鉄塔の形状に関する記述は無く、金剛峯寺根本大塔の形式は、空海自身が中国で得た「南天鉄塔」＝天竺の塔、のイメージであると考えるのが自然である。敦煌莫高窟第301窟（北周末隋初）、第303窟（隋）、第419窟（隋）壁画には宝塔形式の建築物が描かれているほか（近藤2014、図75）、7世紀には玄奘三蔵がすでにインドの塔を参拝している。中国においては空海渡唐以前に「天竺塔＝円形塔」のイメージが導入されており、8世紀前半の日中交流（あるいは道昭など7世紀の交流）のなかで多宝塔形式が導入されていても問題はないだろう。また、『四分律』巻52には舎利弗・目連の舎利塔を「四方作若円若八角形」と規定しており、円形塔のイメージは戒律の中にも見いだせる。受戒作法を伴う四分律の体系的受容は鑑真渡来以降であるが、すでに行基の師、道昭とともに7世紀に中国へ留学した道光によって、四分律の研究書である『依四分抄撰録文』が著されており、道光帰国後の天武朝段階において戒律の研究が行われていたと考えられる（直林1990）。

図75　敦煌莫高窟第217窟（盛唐）壁画多宝塔（近藤2014）

5. 菅原遺跡の造営主体

回廊区画を持つものは官衙、宮殿などの公的施設、寺院および関連施設の二者にほぼ限られるが、独立した回廊区画の中心に堂を配し、付属施設に官衙の要素がみられないことから、官衙、宮に関連する遺構である可能性は極めて低い。また当遺跡北側には称徳天皇御山荘や、藤原武智麻呂習宜の別業など王侯貴族の別業の存在が指摘されているが、今回発見された遺構は、こうした別業とするには規模が大きすぎる。

南側隣接地における1981年の調査では瓦葺・風鐸を持つ基壇建物が発見されているが、当遺跡はこれらと一体の寺院と考えるのが適当であり、他にも複数の堂舎が存在していた可能性も考える必要がある。この調査で確認された基壇建物が東面していたと考えられるのと同様に、今回の調査で確認された円形建物及びその囲繞施設についても東への意識が強く働いており、平城京の西側丘陵から東を望む仏教関連施設が想定できる。

こうした環境下において、1981年調査の遺構評価は重要である。当該遺跡の報告書中で江浦洋は検出された基壇建物が仏堂であり、その創建が平城宮軒瓦第Ⅲ期の時期であること、周辺に存在が予想される諸施設、諸寺院のなかでも明確に該当するものが見当たらないこと、出土軒瓦の中に平城宮系の瓦があり、大仏造営を契機に行基が公的援助を受けた事実を念頭に置いた上で、『行基年譜』に記載される「長岡院」に比定した（江浦 1982・1989）。

長岡院は『行基年譜』に「長岡院　在菅原寺西岡」と記されており、菅原寺との相対的位置関係は合致する。長岡院は行基年譜には「四十九院之外也、不記年号」とされており四十九院から外されているが、これについては『行基年譜』編纂者である泉高父の史料解釈に過ぎず、本来四十九院に含まれていたとする井上光貞の見解が一般的である（井上光貞 1983）。「長岡」の名称については地名から来ると考えることもできるが、長岡大臣と呼ばれた藤原永手の関与を推定する江浦説にも一定の根拠がある。この点について吉田靖雄は、永手が右大臣に就任したのが天平神護2年（766）のことであり、長岡院推定創建年代（745～757）には合わないと指摘する（吉田 2013）が、『行基年譜』の末年部分は「年代記」など後世史料を底本としており、766年以降永手の関与を受けて通称名が成立し、それが底本に反映され、『行基年譜』に収録されたことは十分考え得る。菅原遺跡が西大寺所用瓦を用いて改修されていることと、永手が西大寺八角七重塔の四角五重塔への設計変更に関与していることに何らかの関係が見いだせるのか、注意が必要である。

さて、この長岡院の性格について近藤康司は、出土瓦の年代をⅣ期に引き下げ、その創建が確実に行基没後であるとしたうえで、「東大寺盧舎那仏の完成をみず遷化した行基の菩提を弔うため」と指摘する（近藤 2014）。瓦の年代はⅢ期であっても行基没後の可能性があり、年代・立地・構造の点から行基の供養施設という評価について、その蓋然性は高いと言えよう。

このように1981年調査検出建物が長岡院に比定でき、その機能が行基の供養を目的としたものであったと考えると、今回の調査で見つかった中心建物は重要な意味を持つ。本報告では中心建物SB140について、裳階を持つ円形建物として復元したが、この形状は一般に多宝塔と呼ばれているものである。行基の遷化に関する史料を今一度確認すると、文暦2年（1235）の行基墓発掘の記録である『僧寂滅注進状』（『生駒山竹林寺縁起』（『大日本仏教全書』寺誌叢書3　所収））に記載される「大僧正舎利瓶記」には下記の記述がある。

（略）火葬於大倭国平群郡生馬山之東陵、是依遺命也、弟子僧景静等、攀号不及、瞻仰無見、
唯有砕残舎利、然尽軽灰、故蔵此器中、以為頂礼之主、界彼山上、以慕多宝之塔
　　天平廿一年歳次己丑三月廿三日　沙門真成

この史料の信憑性については多くの論者が史料批判を加えており、特に疑いをはさむ必要はないと考えるが、生馬（駒）山の東陵において火葬された行基の舎利は、蔵骨器に納められて礼拝対象とされた。同時に、「界彼山上、以慕多宝之塔」とされている。これについては「多宝の塔とおもう」ないし「多宝の塔をねがう」とする意見（吉澤 2020）、多宝の塔と見做すとする意見（藤澤 1956）、多宝の塔を慕うと読む意見（井上薫 1959）など諸説あるが、いずれにしても行基舎利は「多宝之塔」とセットで理解されている。「彼山」を生駒山とするならば東陵に安置された行基舎利は「多宝之塔」に包摂されることとなろう。嘉元3年（1305）に南都の碩学凝然によって著された『竹林寺略録』（中尾 2006 所収）には、文暦2年（1235）の寂滅による行基舎利瓶開掘以前の行基墓について、「然則勝寶嘉禄、唯建二塔廟一安二置舎利一。」とし、行基の舎利を安置した「塔廟」の存在を記している。この記述を検証するすべはないが、「塔廟」に舎利を安置していたと記述していることは、行基の「多宝塔」がその遺骨を

内包する、仏塔と廟所を併せた「塔廟」であったと当時認識されていたことを示している。そしてこの記述は、行基没時の同時代史料である行基舎利瓶記とも整合することは重要である。ちなみに 14 世紀前半に描かれた家原寺蔵『行基菩薩行状絵伝』には行基の墓として石造層塔に相対する位置に木造と思われる多宝塔が描かれている。行基信仰における多宝塔は、一般に知られる『法華経』由来の釈迦・多宝如来が坐す多宝塔とも、南天鉄塔に由来する真言系多宝塔とも異なった思想のものであり、まさに「塔廟」であったことが指摘できる。菅原遺跡発見の一連の遺構はこうした「塔廟」としての多宝塔であり、まさに行基の供養堂としてふさわしいものと結論づけることができる。

おわりに

本遺跡の調査ではこれまでに例のない特殊な遺構を検出した。特にその構造復元については、現状で利用しうる限りの情報を用いて、関係者間で何度も検討を繰り返したが、なお異論の出ることも承知である。本来であれば再発掘や景観分析を含めた検証が行われるべきであるが、根本資料である遺跡が失われてしまったことは関係者として慙愧に堪えない。本報告書をもって調査成果の総括としつつも、様々な課題が残されることを指摘して本書のまとめとしたい。

註

1）奈良文化財研究所の神野恵氏、森川実氏のご教示による。

《参考文献》

足立　康 1987「高野山大塔とその本尊」『塔婆建築の研究』足立康著作集 3　中央公論美術出版（初出 1941）

阿部龍文 1996「弘法大師の「毘盧遮那法界体性塔」と顕密二種の「多宝塔」」『智山学報』第 45 輯　智山勧学会

入倉徳裕 2008「平城京条坊の精度－左京域を中心に－」『平城京左京三条三坊五・十二坪』奈良県立橿原考古学研究所

井上　薫 1959『行基』人物叢書　吉川弘文館

井上光貞 1983「行基年譜、特に天平十三年記の研究」『行基　鑑真』日本名僧論集　第 1 巻　吉川弘文館

江浦　洋 1982「菅原遺跡の性格をめぐって」『菅原遺跡』菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室

江浦　洋 1989「行基建立四十九院考－長岡院推定遺跡を中心とした考古学的検討－」『大阪文化財論集』（財）大阪文化財センター

（財）元興寺文化財研究所 2009『平城京左京二条六坊三・四・五・六坪及び奈良町遺跡発掘調査報告書』

近藤康司 2014『行基と知識集団の考古学』清文堂

佐藤亜聖 2022『中世都市奈良の考古学的研究』吉川弘文館

直林不退 1990「天武朝の戒律受容の記載について」『印度學佛教學研究』第 39 巻第 1 號　印度仏教学研究会

中尾良蔵 2006『改訂増補　竹林寺の歴史』竹林寺・（財）律宗戒学院

奈良国立文化財研究所 1991『平城宮発掘調査報告書』Ⅻ　奈良国立文化財研究所学報 50 冊

濱島正士 1975「多宝塔の初期形態について」『日本建築学会論文報告集』第 227 号

藤澤一夫 1956「墳墓と墓誌」『日本考古学講座』第 6 巻　歴史時代（古代）河出書房

真鍋俊照 1983「「南天鉄塔図」について」密教文化 141 号　密教研究会

吉澤　悟 2020「行基墓誌断片から見た行基集団」『論集　東大寺と行基菩薩』ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第 18 号　東大寺

吉田靖雄 2013『行基』ミネルヴァ書房

関連資料

図 76 ～ 78　検出遺構配置略図
表 1 ～ 3　報告遺物一覧（1）～（3）
表 4 ～ 7　検出遺構および出土遺物一覧（1）～（4）

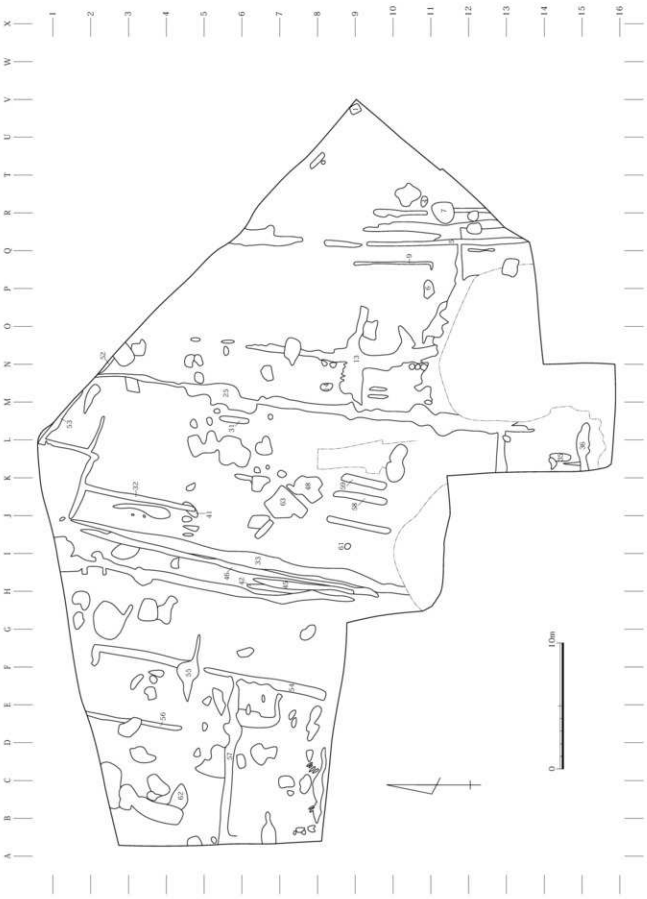


図 76　南区上層検出遺構配置略図（S=1/300）

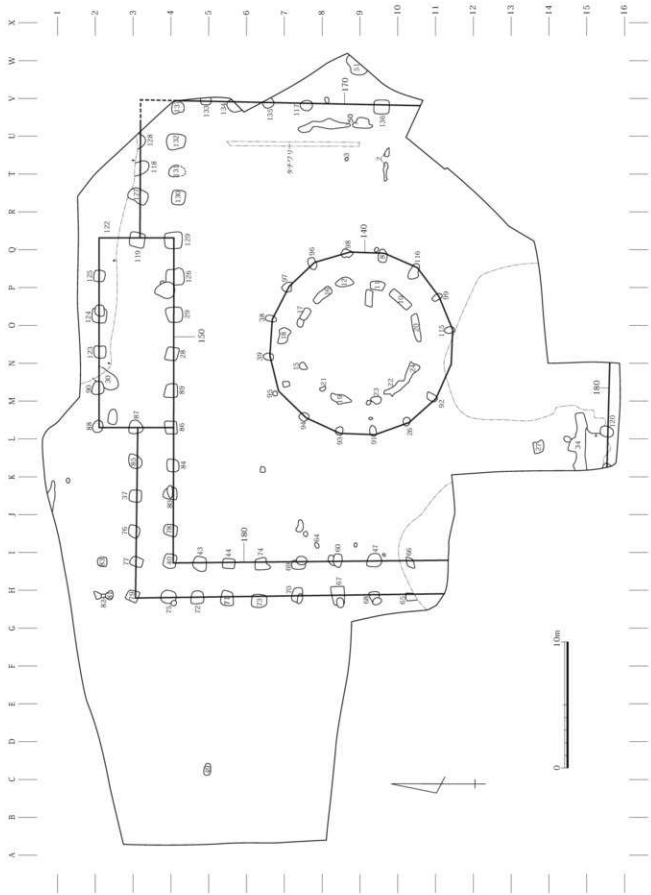


図 77　南区検出遺構配置略図（S=1/300）

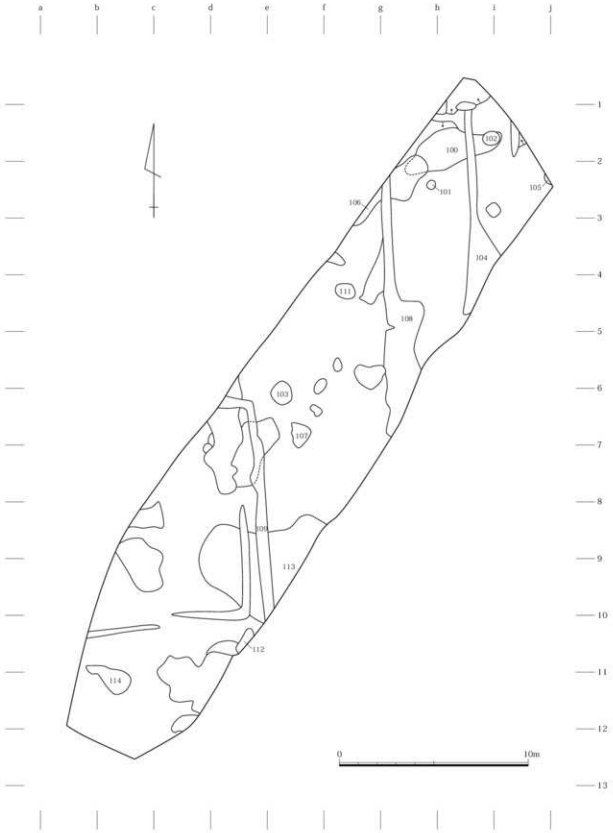


図 78　北区検出遺構配置略図（S=1/200）

表 1　報告遺物一覧（1）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
1	図 27	図版 35	SC150c 掘方	土師器 杯	(20.2)	3.9	(15.0)		25%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 2.5YR6/8	杯 B
2	図 27		SB150a	土師器 皿	*	(1.4)	*		体部片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR7/6	皿 C
3	図 27	図版 35	SB150a	須恵器 杯	*	(1.4)	*		口縁部片	密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
4	図 27	図版 35	SB150d 掘方	須恵器 杯	*	(2.9)	*		体部片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	不良 灰白 N8/0	杯 A
5	図 27	図版 35	SB150m	瓦 軒平瓦	(5.7)	(14.0)	(5.8)			粗 ～ 6mm 石英・長石・チャート	不良 浅黄橙 10YR8/3	6711B 型式
6	図 27	図版 35	SC150c 抜取	瓦 丸瓦	(12.8)	(11.8)	5.6			粗 ～ 10mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 灰 N4/0	小型瓦
7	図 27		SC150c 掘方	瓦 丸瓦	(10.8)	(5.9)	(5.0)			やや粗 ～ 4mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 2.5Y8/1	小型瓦
8	図 27		SC150c 掘方	瓦 平瓦	(11.4)	(6.8)	(3.2)			粗 ～ 8mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰白 2.5Y8/1	小型瓦？
9	図 27		SC150c 掘方	瓦 平瓦	(12.1)	(9.7)	(4.2)			粗 ～ 9mm 石英・長石・チャート	不良 灰白 2.5Y8/1	小型瓦
10	図 27	図版 35	SC150a	瓦 平瓦	(7.3)	(8.4)	(4.1)			やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒・チャート	不良 灰白 N7/0	小型瓦
11	図 27	図版 35	SC150b	金属製品 鉄鏃	(4.8)	(3.5)	2.1	(22)		鉄		
12	図 28	図版 36	SC160w 抜取	瓦 丸瓦	(14.6)	9.7	4.7			やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	小型瓦
13	図 28		SC160x 抜取	瓦 丸瓦	(5.1)	(3.8)	(5.2)			やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰白 2.5Y8/1	小型瓦
14	図 28	図版 36	SC160s・t 抜取	瓦 丸瓦	(16.9)	(4.6)	(5.2)			やや粗 ～ 4mm 石英・長石・角閃石	不良 暗灰 N3/0	小型瓦
15	図 28		SC160s 抜取	瓦 丸瓦	(8.0)	(7.5)	(4.6)			粗 ～ 5mm 石英・長石・角閃石	不良 灰 N4/0	小型瓦
16	図 28		SC160w 抜取	瓦 丸瓦	(10.0)	(10.9)	(3.5)			粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	不良 灰白 2.5Y8/1	
17	図 28		SC160w 掘方	瓦 丸瓦	(13.6)	(8.6)	(7.7)			やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 灰白 2.5Y8/2	
18	図 29	図版 36	SC160t 抜取	瓦 平瓦	(15.7)	(14.2)	4.2			粗 ～ 10mm 石英・長石	不良 灰白 2.5Y8/1	小型瓦？
19	図 29	図版 37	SC160g 掘方	瓦 平瓦	(8.5)	(7.2)	(4.6)			粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	不良 灰白 N8/0	
20	図 29	図版 37	SC160w 抜取	瓦 平瓦	(24.8)	(13.7)	4.9			粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 灰白 2.5Y8/2	朔製斗瓦？
21	図 30	図版 37	SC160h 掘方	瓦 平瓦	(13.8)	(14.8)	5.9			粗 ～ 10mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 暗灰 N3/0	
22	図 30	図版 37	SC160m 抜取	瓦 平瓦	(20.7)	(10.1)	(2.8)			粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 灰白 2.5Y8/1	朔製斗瓦？
23	図 31	図版 38	SC160h 掘方	金属製品 鉄製円盤	6.0	6.0	1.0	47		鉄		
24	図 31	図版 38	SC160g 掘方	金属製品 鉄製円盤	(5.9)	5.9	1.3	(41)		鉄		
25	図 31	図版 38	SC160c 掘方	石材 切石	(5.7)	(9.8)	(6.4)	(291)		凝灰岩		
26	図 32	図版 38	SA180a 掘方	瓦 平瓦	(11.7)	(8.9)	(1.9)			粗 ～ 7mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 灰白 2.5Y8/1	
27	図 33	図版 39	SA170t	土師器 皿	*	(1.8)	*		体部片	粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR7/6	
28	図 33		SA170t	瓦 丸瓦	(9.7)	(5.0)	(6.0)			やや粗 ～ 2mm 石英・長石・チャート	不良 灰 N4/0	
29	図 33	図版 39	SA170d 抜取	瓦 丸瓦	(16.5)	(10.6)	6.9			やや粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰 N4/0	
30	図 34	図版 39	SA170a 抜取	瓦 平瓦	(6.4)	(6.9)	(3.7)			やや粗 ～ 6mm 石英・長石・チャート	良 灰 N6/0	
31	図 34	図版 39	SA170t	瓦 平瓦	(10.2)	(12.7)	6.0			やや粗 ～ 4mm 石英・長石・チャート	不良 灰白 N8/0	
32	図 34	図版 39	SA170t	瓦 平瓦	(12.0)	(17.0)	5.7			やや粗 ～ 2mm 石英・長石	不良 灰 N4/0	
33	図 34	図版 39	SA170h 抜取	瓦 平瓦	(13.9)	(11.1)	(4.7)			粗 ～ 10mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 灰 N6/0	
34	図 34	図版 39	SA170b 抜取	金属製品 鉄釘	(5.9)	0.8	1.1	(10)		鉄		
35	図 35	図版 40	SD034	瓦 軒平瓦	(13.0)	(15.4)	(7.3)			粗 ～ 5mm 石英・長石	不良 灰白 2.5YR8/2	6711B 型式

表 2　報告遺物一覧（2）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
36	図35	図版40	SD034	瓦 軒平瓦	(11.9)	(21.2)	(6.8)			中粗 ～2mm 石英・長石	不良 灰 N5/0	671B 型式
37	図35	図版40	SD034	瓦 丸瓦	(22.8)	(13.7)	6.6			粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 浅黄橙 7.5YR8/4	
38	図36	図版40	SD034	瓦 平瓦	(17.1)	(14.3)	6.4			粗 ～5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 灰 N5/0	
39	図36	図版40	SD034	瓦 平瓦	(8.6)	(10.8)	(2.3)			粗 ～2mm 石英・長石・黒色粒	不良 灰 N6/0	
40	図36	図版41	SD034	瓦 平瓦	(15.4)	(10.6)	6.4			粗 ～4mm 石英・長石・チャート	不良 浅黄橙 10YR8/3	
41	図37	図版41	SD034	瓦 平瓦	(13.3)	(16.6)	6.5			粗 ～6mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 黄灰 2.5Y6/1	刻印「西」
42	図37		SD034	瓦 平瓦	(15.9)	(16.0)	6.4			粗 ～3mm 石英・長石・クサリ礫	不良 浅黄橙 10YR8/3	
43	図38		SD034	瓦 平瓦	(21.3)	(11.0)	(5.4)			粗 ～13mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 灰 N6/0	
44	図39	図版41	整地土	土師器 杯	*	(3.0)	*		体部片	粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 7.5YR7/6	杯 A
45	図39	図版41	整地土	土師器 皿	(18.4)	2.1	*		25%	粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR6/8	
46	図39	図版41	整地土	土師器 皿	*	(1.3)	*		口縁部片	粗 ～5mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 浅黄橙 7.5YR8/4	
47	図39	図版41	整地土	土師器 椀	*	(3.8)	*		体部片	中粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 7.5YR7/6	
48	図39	図版41	整地土	土師器 鉢	*	(5.9)	*		体部片	中粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 浅黄橙 7.5YR8/6	
49	図39	図版41	整地土	土師器 高杯	*	(1.7)	*		口縁部片	中粗 ～5mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR7/6	
50	図39	図版41	整地土	土師器 甕	*	(3.1)	*		口縁部片	粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 黄橙 7.5YR8/8	
51	図39	図版41	整地土	須恵器 蓋	*	(1.1)	*		口縁部片	密 ～3mm 石英・長石・チャート	良 灰白 5Y7/1	
52	図39	図版41	整地土	須恵器 蓋	*	(1.3)	*		口縁部片	密 ～2mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
53	図39	図版41	整地土	須恵器 杯	*	(1.4)	(11.2)		底部片	中粗 ～2mm 石英・長石	良 褐灰 10YR5/1	杯 B
54	図39	図版41	整地土	須恵器 皿	*	(2.1)	*		体部片	中粗 ～6mm 石英・長石	良 灰白 2.5Y8/1	皿 C
55	図39	図版41	整地土	須恵器 甕	*	(3.0)	*		口縁部片	密 ～3mm 長石	良 灰 N6/0	
56	図39	図版42	整地土	瓦 軒丸瓦	(1.6)	(4.2)	(1.6)			粗 ～2mm 石英・長石・チャート	不良 灰 N5/0	6236D 型式
57	図39	図版42	整地土	瓦 軒平瓦	(22.0)	(13.5)	7.2			中粗 ～2mm 石英・長石	不良 灰 N5/0	671B 型式
58	図40		整地土	瓦 丸瓦	(8.2)	(6.2)	4.9			粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰 N6/0	小型瓦
59	図39	図版42	整地土	瓦 丸瓦	(16.3)	13.4	6.8			粗 ～3mm 石英・長石・黒色粒	不良 浅黄橙 7.5YR8/3	
60	図40	図版42	整地土	瓦 丸瓦	(28.7)	(15.6)	8.4			粗 ～4mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 黄橙 10YR8/6	
61	図41	図版43	整地土	瓦 平瓦	(15.7)	(13.9)	5.8			中粗 ～3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N5/0	瓦質？
62	図41	図版43	整地土	瓦 平瓦	(32.2)	(12.9)	4.9			粗 ～6mm 石英・長石・チャート・黒色粒	良 灰 N6/0	瓦質？
63	図42	図版43	整地土	瓦 平瓦	34.5	14.4	5.0			粗 ～8mm 石英・長石・チャート・黒色粒	良 灰白 N7/0	瓦質？
64	図47	図版44	SK100	土師器 杯	*	(3.3)	*		体部片	中粗 ～1mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 2.5YR6/6	杯 A
65	図47	図版44	SK100	土師器 杯	(18.4)	2.8	*		25%	中粗 ～1mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR6/8	杯 A
66	図47	図版44	SK100	土師器 杯	*	(3.5)	*		体部片	中粗 ～1mm 石英・長石	不良 橙 2.5YR6/8	杯 C
67	図47	図版44	SK100	土師器 杯	*	(3.1)	*		体部片	中粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 2.5YR6/8	杯 C
68	図47	図版44	SK100	土師器 杯	(17.0)	3.6	*		50%	粗 ～2mm 石英・長石	不良 橙 2.5YR6/8	杯 C
69	図47	図版44	SK100	土師器 椀	17.6	4.0	*		100%	中粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫	良 橙 2.5YR6/8	椀 D
70	図47	図版44	SK100	土師器 甕	(10.6)	(5.3)	*		25%	粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR7/6	

表 3　報告遺物一覧（3）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
71	図 47	図版 44	SK100	土師器 甕	(27.2)	(24.5)	*		25%	粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR7/6	甕 A
72	図 47	図版 44	SK100	須恵器 皿	(19.6)	2.3	*		25%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰白 5Y7/1	皿 F
73	図 47	図版 44	SK100	須恵器 蓋	(28.0)	(4.3)	*		25%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色泥粒	不良 灰白 N8/0	皿 B 蓋
74	図 47	図版 45	SK100	須恵器 盤	(35.2)	(8.0)	*		10%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石	不良 灰白 2.5Y8/1	
75	図 47	図版 45	SK100	土製品 土馬	(12.1)	(6.4)	(5.3)			やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR7/8	
76	図 47	図版 45	SK100	土製品 粉状土製品	5.9	8.8	1.8			密 ～ 1mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
77	図 48	図版 46	SK100	瓦 丸瓦	(9.9)	(8.3)	5.0			粗 ～ 4mm 石英・長石・チャート	良 灰白 N7/0	小型瓦
78	図 48	図版 46	SK100	瓦 丸瓦	(20.4)	(11.0)	6.0			粗 ～ 5mm 石英・長石・チャート	不良 灰 N4/0	
79	図 48	図版 46	SK100	瓦 丸瓦	(16.5)	(13.5)	6.0			やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 灰白 N8/0	
80	図 49	図版 46	SK100	瓦 平瓦	(8.2)	(11.5)	4.6			粗 ～ 4mm 石英・長石・チャート	不良 灰 5Y6/1	小型瓦？
81	図 49	図版 47	SK100	瓦 平瓦	(10.6)	(9.0)	(1.8)			やや粗 ～ 4mm 石英・長石	不良 浅黄橙 10YR8/3	
82	図 49	図版 47	SK100	瓦 平瓦	(23.9)	(15.9)	6.2			粗 ～ 3mm 石英・長石	不良 灰 N6/0	
83	図 50	図版 47	SK100	瓦 平瓦	(13.9)	(19.9)	6.4			粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰 N3/0	
84	図 50	図版 47	SK100	瓦 平瓦	(25.3)	(22.1)	6.6			粗 ～ 4mm 石英・長石	不良 灰 N6/0	
85	図 51	図版 48	SK100	瓦 平瓦	30.5	(16.1)	5.2			粗 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 にぶい橙 7.5YR7/4	別製斗瓦？
86	図 52	図版 48	SK100	瓦 平瓦	35.3	(19.0)	7.5			粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 7.5YR7/6	別製斗瓦？
87	図 53	図版 49	SK100	瓦 平瓦	35.4	(15.3)	5.8			粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰 N6/0	別製斗瓦？
88	図 54	図版 49	SK102	土師器 杯	(16.0)	2.9	*		35%	粗 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 橙 5YR7/6	杯 A
89	図 54	図版 49	SK102	土師器 杯	(18.0)	3.3	*		25%	粗 ～ 2mm 石英・長石	不良 橙 2.5YR6/8	杯 C
90	図 54	図版 49	SK102	須恵器 皿	(21.0)	2.3	*		20%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 灰白 N8/0	皿 C
91	図 55	図版 49	表採	土師器 皿	(16.0)	(3.0)	*		10%	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR7/8	皿 A
92	図 55		表採	土師器 椀	*	(4.5)	*		体部片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 2.5YR6/8	椀 A
93	図 55	図版 49	表採 A 地点	土師器 甕	*	(4.8)	*		体部片	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 2.5YR7/6	
94	図 55	図版 50	表採 A 地点	須恵器 蓋	(23.5)	(1.6)	*		25%	密 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	皿 B 蓋 転用硯？
95	図 55	図版 50	表採	須恵器 壺	*	(3.7)	(3.8)		底部片	密 ～ 1mm 石英・長石	良 灰白 N7/0	壺 M
96	図 55	図版 50	表採	瓦 軒丸瓦	(3.7)	(10.1)	(3.8)			粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	不良 灰白 N7/0	6299A 型式 小型瓦
97	図 55	図版 50	表採	瓦 軒丸瓦	(5.3)	(9.6)	(6.0)			粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰白 2.5Y8/1	6316Dc 型式
98	図 55	図版 50	表採	瓦 軒丸瓦	(4.8)	(11.3)	(10.2)			粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰白 2.5Y8/2	6316Dc 型式
99	図 55	図版 51	表採 (整地土か)	瓦 軒平瓦	(7.4)	(10.3)	(3.3)			やや粗 ～ 10mm 石英・長石・黒色泥粒	良 灰白 N7/0	6765A 型式
100	図 56	図版 51	表採 (整地土か)	瓦 丸瓦	(15.3)	11.2	5.1			粗 ～ 5mm 石英・長石・チャート	不良 浅黄橙 10YR8/3	小型瓦
101	図 56	図版 51	表採 A 地点	瓦 丸瓦	(20.4)	13.6	6.8			粗 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 橙 7.5YR6/6	
102	図 56	図版 51	表採 北区周辺	瓦 平瓦	(4.9)	(5.3)	1.6			やや粗 ～ 2mm 石英・長石	良 灰白 N8/0	

数値の単位は法量 cm、重量 g

表４　検出遺構および出土遺物一覧（1）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
1			撹乱	深さ１～2cm	土師器（古代）細片	U9・10
2			溝	円へとりつく側溝か 玉砂利多数に出土	玉砂利	T・U10
3			ピット		平瓦	U9
4			ピット	撹乱	植物遺体	T11
5			溝	撹乱	平瓦、国産白磁皿、国産陶器鉢	R12～14
6			土坑	撹乱	須恵器（古代）細片、瓦細片、国産染付椀	P・Q11
7			溝	撹乱	平瓦、国産陶器椀	T11・12
8	SB140L	抜取	ピット		平瓦	Q10
9			溝	撹乱	土師器（古代）細片、瓦細片、国産陶器擂鉢・細片	Q10・11
10	SB140Ak		土坑			P10・11
11	SB140Aj		土坑			P・Q10
12	SB140Ai		土坑			Q9
13			溝	撹乱（素掘溝）	土師器（古代）細片、桟瓦・近世瓦片、瓦質土器鉢、国産染付椀、国産陶器椀・擂鉢、鉄釘	N～P7～11
14			土坑	撹乱	国産陶器壺	N9
15	SB140Af		土坑			N・O8
16	SB140Ah		土坑			P8・9
17	SB140Ag		土坑			P8
18	SK018		土坑			O7・8
19	SB140Ad		土坑			M・N9
20	SB140AL		土坑			O・P11
21	SB140Ae		土坑			N8・9
22	SB140Ab		土坑			N10・11
23	SB140Ac		土坑			M・N10
24	SB140Aa		土坑			N・O11
25			溝	撹乱	土師器（近世）鉢・細片、平瓦、国産染付椀、国産陶器椀・鍋	M・N3～14
26	SB140b	抜取	ピット		土師器（古代）細片	M11
27		掘方	ピット		平瓦	L14
		抜取			瓦細片	
		柱痕跡			平瓦	
28	SB150d	掘方	ピット	擂鉢は混入	須恵器（古代）杯、国産陶器擂鉢	O4・5
		抜取			土師器（古代）細片	
29	SB150c	掘方	ピット		土師器（古代）皿、丸瓦・平瓦	P4・5
		抜取			丸瓦	
30			土坑			N3
31			土坑	撹乱	土師器（古代）細片、瓦質土器細片、国産陶器細片	M6・7
32			溝	素掘溝	土師器（中世～）不明品、国産染付皿、不明鉄製品・不明金属製品	K2～5
33			溝	素掘溝	須恵器（古代）細片、国産白磁椀、国産染付鉢、国産陶器椀・甕・擂鉢、平瓦・平瓦（近世）、鉄釘	H～J2～11
34	SD034		溝	南端南落溝か 切田近出土	土師器（古代）細片、花崗岩片・凝灰岩片、軒平瓦・丸瓦・平瓦・瓦細片、玉砂利	L・M15
35			土坑	撹乱	瓦質土器細片、国産染付鉢、丸瓦、不明鉄製品	L15
36			溝	撹乱	土師器（古代）甕、国産染付椀、平瓦・瓦細片	L・M15・16
37	SC160m		ピット	近世平瓦は混入	平瓦・平瓦（近世）、炭	K3・4
38	SB140h		ピット		土師器（古代）細片	P7
		抜取			平瓦	
39	SB140g		ピット		須恵器（古代）細片	O7
40	SC160r	抜取	ピット	SP043 と接合	平瓦	I4・5
41			土坑	撹乱	国産染付椀	K5
42			溝	撹乱	国産染付椀・皿、国産陶器皿	I7・8

表 5　検出遺構および出土遺物一覧（2）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
43	SC160s	抜取	ピット		丸瓦	I5
44	SC160t	抜取	ピット	SP040 と接合	瓦細片	I6
					丸瓦・平瓦	
45			溝	視見	瓦質土器細片	I7 ～ 9
46			溝	視見	平瓦（近世）	H ～ J2 ～ 10
47	SC160x	掘方	ピット		土師器（古代）皿、平瓦・瓦細片	I10
					丸瓦	I4・5
		抜取			凝灰岩片、平瓦	I4・5
48			土坑	視見	国産染付椀	K・L8・9
49	SK049		土坑		土師器（古代）甕	D5・6
50			溝	雨落溝か 深さ 3cm 玉砂利混土 釜は混入	土師器（古代）細片、土師器（中世～）釜、須恵器（古代）細片、平瓦・瓦細片	V8 ～ 10
51			ピット	視見	平瓦	W・X9・10
52			溝	視見	須恵器（古代）甕	N・O3
53			溝	視見	土師器（古代）細片、丸瓦・平瓦・瓦細片	M・N1・2
54			溝	視見	国産染付椀、平瓦・平瓦（近世）	F・G3 ～ 9
55			溝	視見	国産陶器鉢	F・G5
56			溝	視見	瓦質土器鉢、国産染付椀、国産陶器鉢	E3 ～ 5
57			溝	視見	国産染付椀、国産陶器瓶	B ～ F6
58			溝	視見	土師器（古代）細片	K9・10
59			溝	視見	国産陶器鉢	K・L9・10
60	SC160w	抜取	ピット	小型瓦出土	土師器（古代）細片、丸瓦・平瓦	I9
		掘方			丸瓦	
61			ピット	視見	土師器（古代）細片	J9
62			土坑	視見	国産染付椀	C5
63			土坑	視見	国産染付椀	J・K7・8
64			ピット		丸瓦	J8
65	SC160b		ピット			H11
66	SC160a		ピット			I11
67	SC160d	抜取	ピット		丸瓦	H・I9
68	SC160c	掘方	ピット		凝灰岩片、瓦細片	H10
69	SC160v	掘方	ピット		土師器（古代）甕・細片、瓦細片	I8
		柱穴			土師器（古代）細片	
70	SC160e	掘方	ピット		凝灰岩片、平瓦	H・I8
71	SC160g	掘方	ピット		平瓦、鉄製円盤	H6
72	SC160h	掘方	ピット		平瓦、鉄製円盤	H5
		抜取			土師器（古代）甕・細片	
73	SC160f	掘方	ピット		平瓦	H7
74	SC160u	抜取	ピット		瓦細片	I7
75	SC160i	抜取	ピット		平瓦	H4・5
76	SC160L		ピット			J3・4
77	SC160k		ピット			I3・4
78	SC160q	抜取	ピット		平瓦	J4・5
79	SC160j	掘方	ピット		須恵器（古代）甕	H3・4
80	SC160p		ピット			K4・5
81			ピット			H3
82			ピット			H3
83			ピット			I3
84	SC160o		ピット			L4・5
85	SC160m		ピット			L3・4
86	SB150f		ピット			M4・5

表６　検出遺構および出土遺物一覧（3）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
87	SB150g		ピット			M3・4
88	SB150h		ピット			M2・3
89	SB150e		ピット			N4・5
90	SB150i		ピット			N2・3
91	SB140c		ピット			M10
92	SB140a		ピット			N11・12
93	SB140d		ピット			M9
94	SB140e		ピット			M8
95	SB140f		ピット			N7
96	SB140j		ピット			Q8
97	SB140i		ピット			P・Q7・8
98	SB140k		ピット			Q・R9
99	SB140m		ピット			P11・12
100	SK100		土坑	瓦・土器大量投棄	土師器（古代）皿・壺・甕・高杯・、須恵器（古代）皿・鉢・蓋、丸瓦・平瓦、土馬、炭	h～j2・3
101			土坑	炭化物充填		h3
102	SK102		土坑	土器多数出土	土師器（古代）皿、須恵器（古代）皿、平瓦	i・j2
103	SK103		土坑			f6・7
104			溝	攪乱	土師器（古代）細片、平瓦（近世）、国産陶器壺・細片、薬瓶	i・j2～5
105			ピット		土師器（古代）甕	j3
106			溝		土師器（古代）鉢・細片	g・h2～4
107			土坑	攪乱	国産陶器土瓶	f7・8
108			溝	攪乱	平瓦（近世）	h3～7
109			溝	攪乱	土師器（古代）細片、須恵器（古代）壺	e・f7～11
110	欠番					
111			土坑	攪乱	土師器（古代）杯	g5
112			土坑	攪乱	平瓦（近世）、国産白磁椀	e11
113			土坑	攪乱	輸入青磁椀、平瓦、国産染付椀、国産陶器灯明皿・土瓶、火打金	d～g9～11
114			土坑	攪乱	土師器（古代）細片	b・c11・12
115	SB140o		ピット		土師器（古代）細片	O12
116	SB140m		ピット			Q11
117	SA170b		ピット		丸瓦・平瓦、閃緑岩片	V8
		抜取	ピット		丸瓦・平瓦	
118	SA170h		ピット		平瓦	T・U4
		抜取	ピット		丸瓦・平瓦、鉄釘	
119	SB150m		ピット		軒平瓦・丸瓦・平瓦	R3・4
		抜取	ピット		丸瓦・平瓦	
120	SC180a	抜取	ピット		平瓦	M16
		掘方	ピット		土師器（古代）細片・丸瓦・平瓦	
121	欠番					
122			落ち込み	攪乱	土師器（古代）細片、平瓦・桟瓦、国産染付椀	N～U2～4
123			ピット			O2・3
124		掘方	ピット		凝灰岩片	P2・3
125			ピット			Q2・3
126	SB150b		ピット		土師器（古代）細片、丸瓦・平瓦、不明鉄製品	Q4・5
127	SA170i		ピット		土師器（古代）皿、丸瓦・平瓦	T3・4
128	SA170g		ピット		平瓦	U・V4
129	SB150a		ピット		土師器（古代）皿・細片、須恵器（古代）蓋、平瓦	R4・5
130			ピット			T5
131			ピット			T・U4・5
132			ピット			U・V4・5

表７　検出遺構および出土遺物一覧（4）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
133	SA170e		ピット		丸瓦・平瓦	V5・6
134	SA170d	抜取	ピット		丸瓦・平瓦	V6
135	SA170c		ピット			V7
136	SA170a		ピット		瓦細片	V10
		抜取	ピット		丸瓦・平瓦	
137	SA170f		ピット		土師器（古代）細片、平瓦、不明金属製品	V5
140	SB140		円形建物	内周土坑 10、11、12、15、16、17、19、20、21、22、23、24、SK018 外周柱穴 8、26、38、39、91、92、93、94、95、96、97、98、99、115、116		
150	SB150		北側建物	28、29、86、87、88、89、90、119、126、129		
160	SC160		回廊	37、40、43、44、47、60、65、66、67、68、69、70、71、72、73、74、75、76、77、78、79、80、84、85		
170	SA170		塀	117、118、127、128、133、134、135、136、137		
180	SC180		回廊	120		
整地土					土師器（古代）皿・杯・鉢・甕・高杯、須恵器（古代）皿・杯・壺・蓋、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦	
表土　南区					土師器（古代）細片、国産青磁椀、国産染付椀・鉢、国産陶器椀・鍋、丸瓦・平瓦、火打石	
表土　北区					土師器（古代）杯・甕・細片、須恵器（古代）皿・壺・蓋・細片、国産白磁杯、国産染付椀、国産陶器甕・鍋、丸瓦・平瓦、鉄滓	
表採　南区東斜面				小型瓦なし	土師器（古代）鉢、須恵器（古代）杯・壺、国産白磁椀、国産染付椀、国産陶器灯明皿・壺、丸瓦・平瓦、不明鉄製品	
表採　南区北斜面					土師器（古代）鉢・細片、須恵器（古代）甕、国産青磁皿、国産陶器擂鉢・火鉢、軒平瓦・平瓦、凝灰岩片	
表採　南区南東					丸瓦	
表採　北区周辺					土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）皿・蓋・細片、丸瓦・平瓦・残瓦、極原石板片	
表採　A地点					土師器（古代）皿・杯・甕、須恵器（古代）杯・鉢・蓋、丸瓦・平瓦、土馬	
表採　B地点					土師器（古代）細片、国産陶器擂鉢、丸瓦・平瓦	
表採				須恵器窯は9C	土師器（古代）皿・杯・鉢・甕・高杯・細片、須恵器（古代）皿・鉢・壺・甕・蓋・細片、瓦質土器土管、国産染付椀、国産陶器皿・灯明皿・甕・鉢・蓋、軒丸瓦・丸瓦・平瓦、土製円板	
表採　整地層か					土師器（古代）皿・甕、須恵器（古代）皿・杯、軒平瓦・丸瓦・平瓦	
カクラン　南区					土師器（古代）細片、国産陶器皿・甕・壺	
カクラン　南区東端					土師器（中世～）皿・細片、国産染付椀、国産陶器椀・擂鉢・鍋、丸瓦・平瓦、土製円板	

地区はアルファベット大文字が南区、小文字が北区

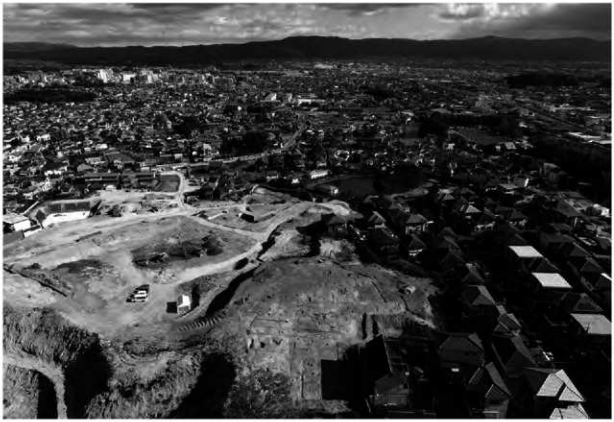
写真図版

調査前風景（西から）

重機掘削状況（西から）

図版 2

調査地全景（北から）



調査地全景（西から）

南区全景（西から）

南区全景（北から）

図版 4

調査地垂直写真（右が北）

南区垂直写真（上が北）

SB140・150 垂直写真（左が北）

北区垂直写真（右が北）

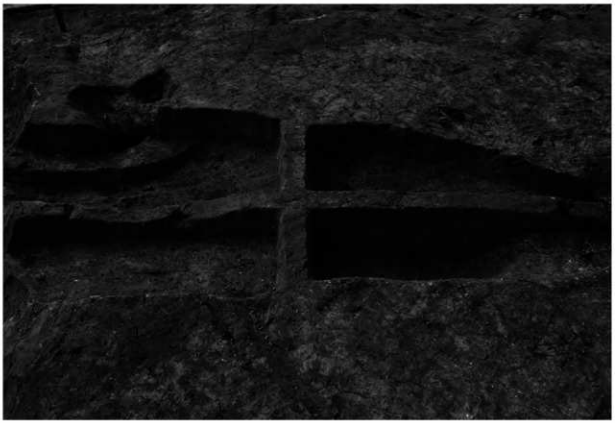
図版 6

南区西半遺構検出状況（南東から）

SB140 検出状況（北から）

SB140 内周土坑列 Aj・Ak 検出状況（北西から）

SB140 内周土坑列 Aj 検出状況（西から）



SB140 内周土坑列 Aa 土層断面（北東から）

SB140 内周土坑列 Ab 土層断面（北東から）

SB140 内周土坑列 Ac 土層断面（北東から）

SB140 内周土坑列 Ag 土層断面（南西から）

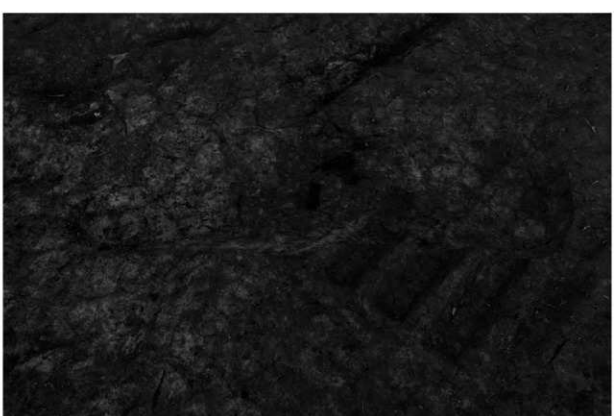
SB140 内周土坑列 Aj 土層断面（西から）

SB140 内周土坑列 Al 土断面（北から）

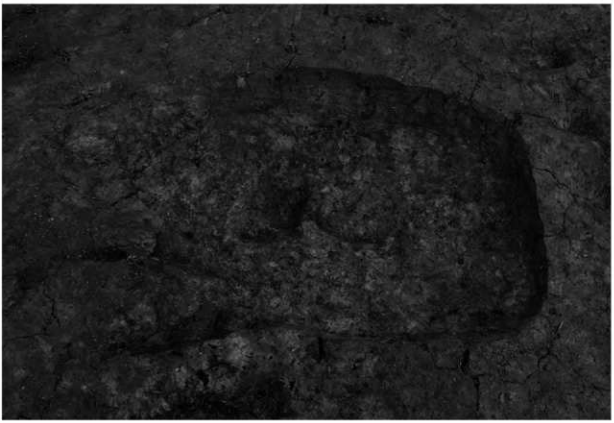
SB140 内周土坑列 Aa 完掘状況（北東から）

SB140 内周土坑列 Ab 完掘状況（北東から）

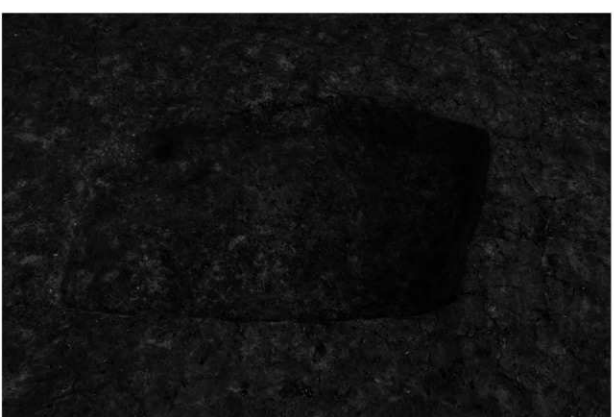
SB140 内周土坑列 Ag 完掘状況（南西から）



SB140 内周土坑列 Ah 完掘状況（南西から）



SB140 内周土坑列 Ai 完掘状況（西から）



SB140 内周土坑列 Aj 完掘状況（西から）

SB140 内周土坑列 Ak 完掘状況（北西から）

SB140 全景（北東から）

SB140 全景（西から）

SB140 全景（西から）柱あり

図版 16

SB140 全景（北東から）

SB140 全景（北東から）柱あり

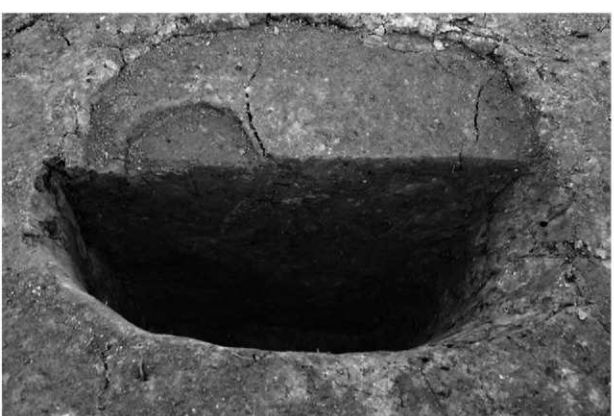
SC160 北辺全景（西から）

SC160 北辺・SB150 全景（東から）

SC160 西辺全景（北から）

SC180 全景（東から）

SB140 外周柱穴列 b 土層断面（南から）



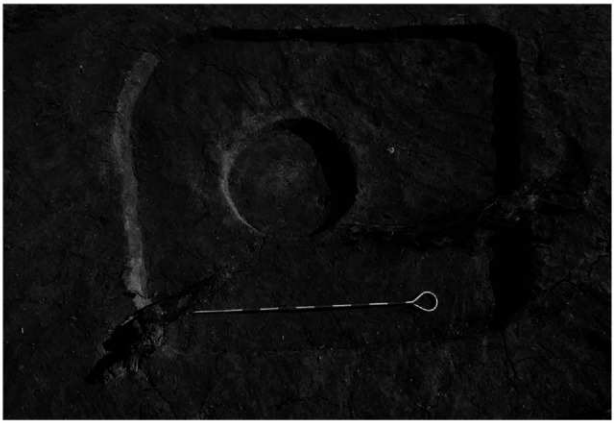
SB140 外周柱穴列 d 土層断面（南から）

SB140 外周柱穴列 e 土層断面（南西から）

SB140 外周柱穴列 o 土層断面（東から）

SB150b 土層断面（東から）

SB150 m土層断面（東から）



SB150c 検出状況（西から）

SB150g 土層断面（東から）

SB150d 掘方内須恵器出土状況（北西から）

SC160c 土層断面（南から）

SC160d 土層断面（南から）

SC160h 土層断面（南から）

SC160l 土層断面（西から）

SC160s 土層断面（南から）

SC160v 土層断面（南から）

SC160w 土層断面（南から）

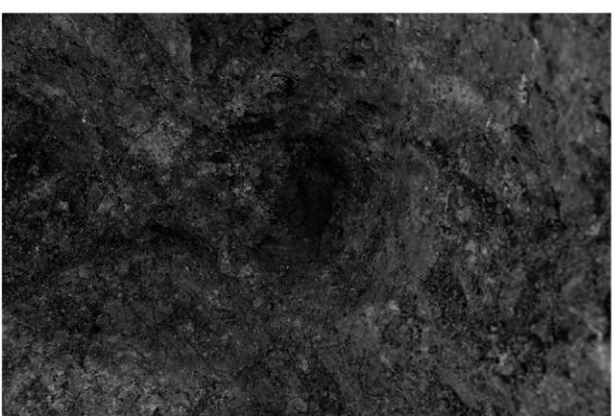
SC160x 土層断面（南から）

SC160s 遺物出土状況（東から）

SC160c 根固め石検出状況（南から）

SC160d 根固め石検出状況（南から）

SC160v 掘方内土師器出土状況（南から）



SC160g 掘方内鉄製品出土状況（北西から）

SA170f 土層断面（西から）

SD034 遺物出土状況（南から）

SD034 遺物出土状況（西から）

SD034 土層断面（西から）

図版 32

北区北半部全景（南から）

北区南半部全景（北から）

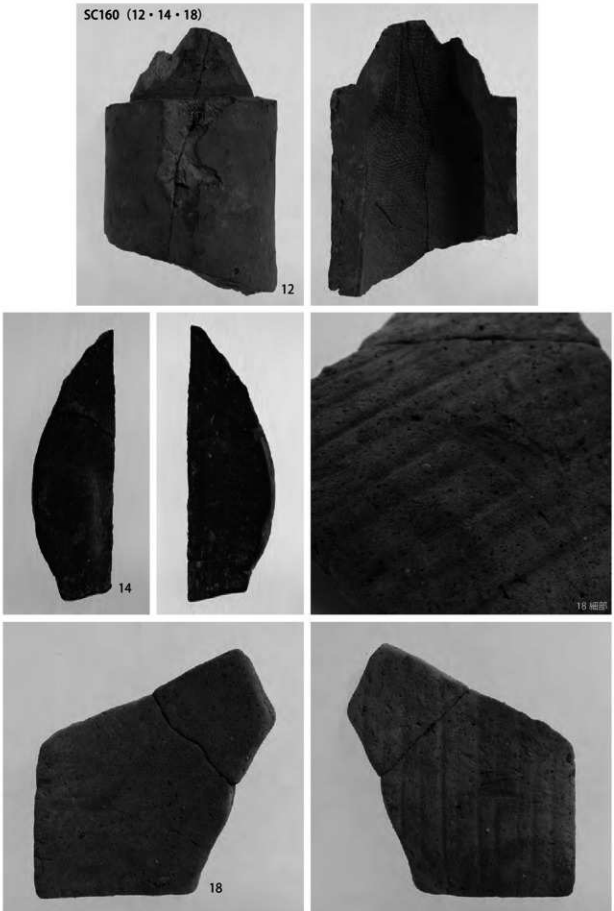
SK100 遺物出土状況（北から）

SK100 完掘状況（北西から）

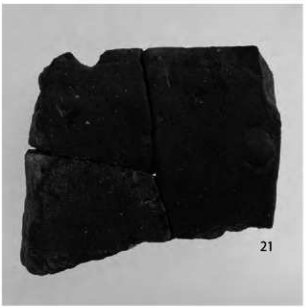
SK100 土層断面（西から）

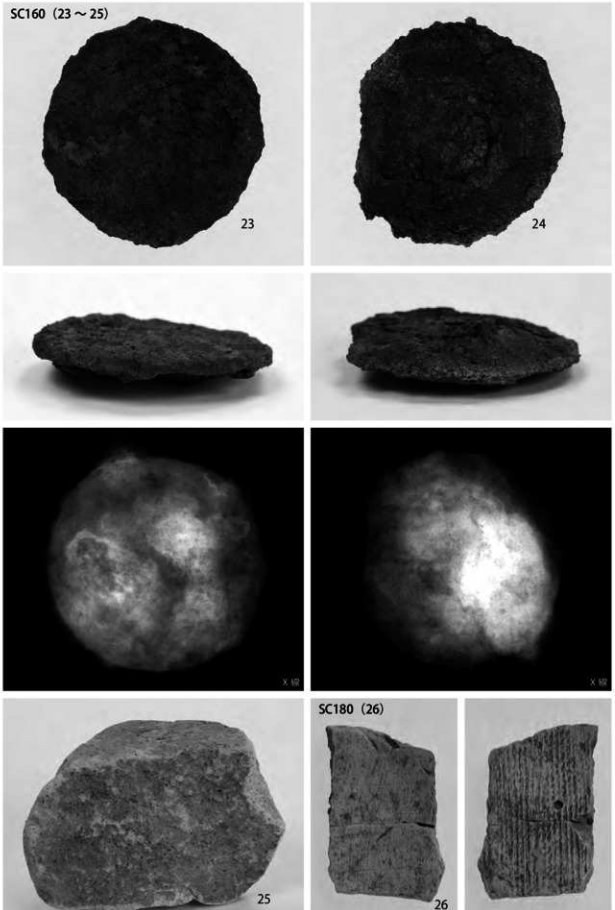
SK102 遺物出土状況（南西から）

SB150（1・3～6・10・11）

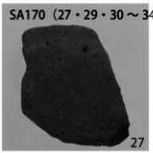

SC160（12・14・18）
12
14
18 細部
18

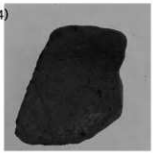
SC160（19～22）

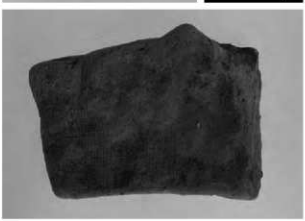


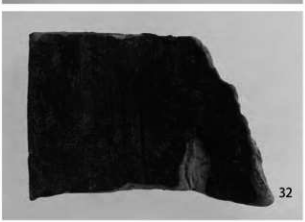

SC160（23～25）
23
24
X 線
X 線
25
SC180（26）
26

SA170（27・29・30～34）

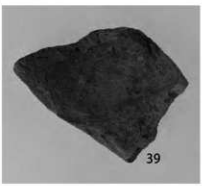


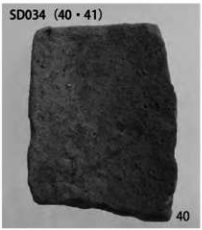






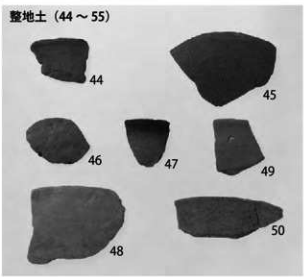
SD034（35～39）

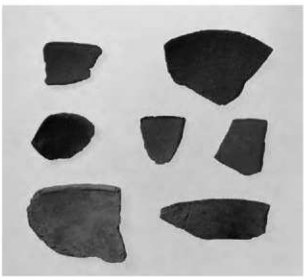


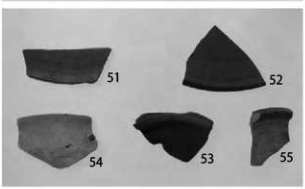

SD034（40・41）
40

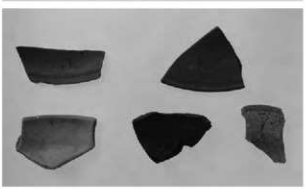
41 裏面

41

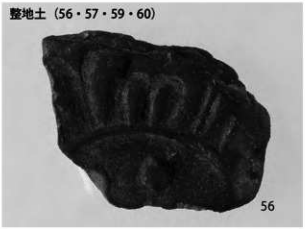

整地土（44～55）
44
45
46
47
49
48
50

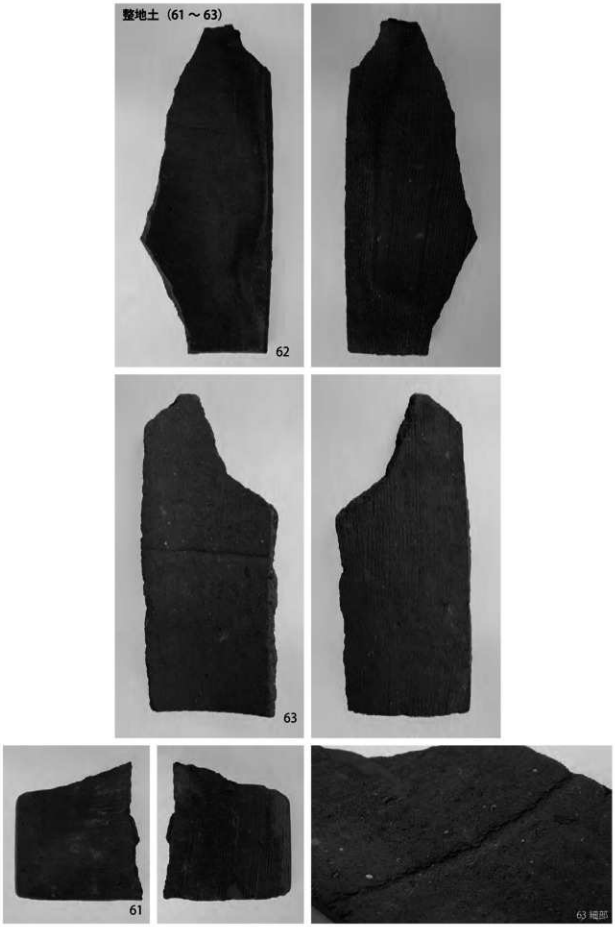


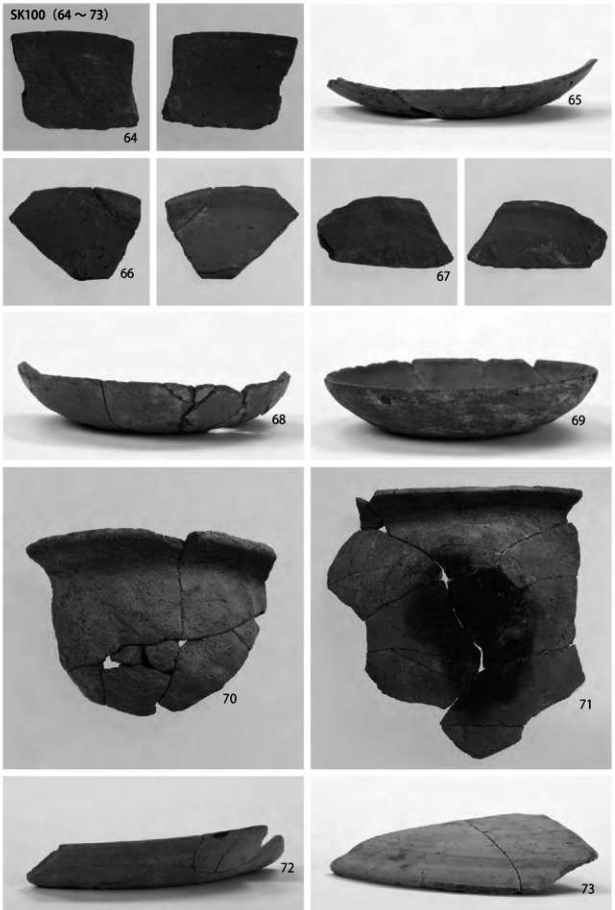

51
52
54
53
55



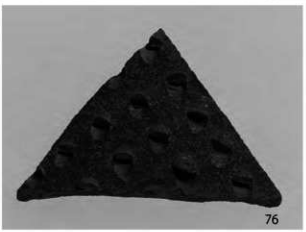
整地土（56・57・59・60）

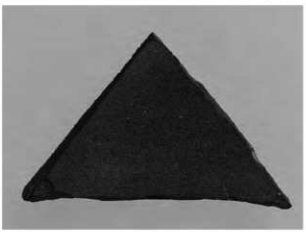


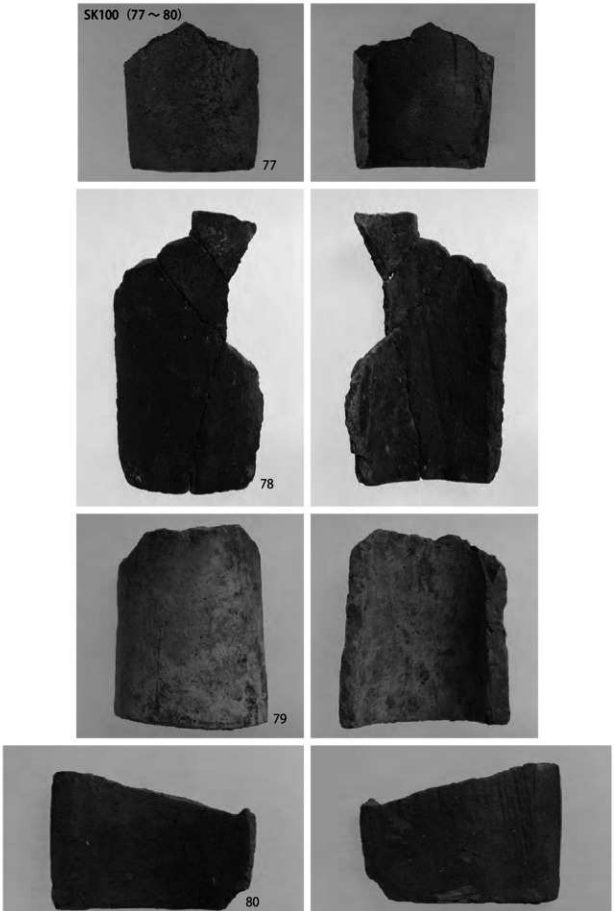

整地土（61 ～ 63）
62
63
61
63 縁部

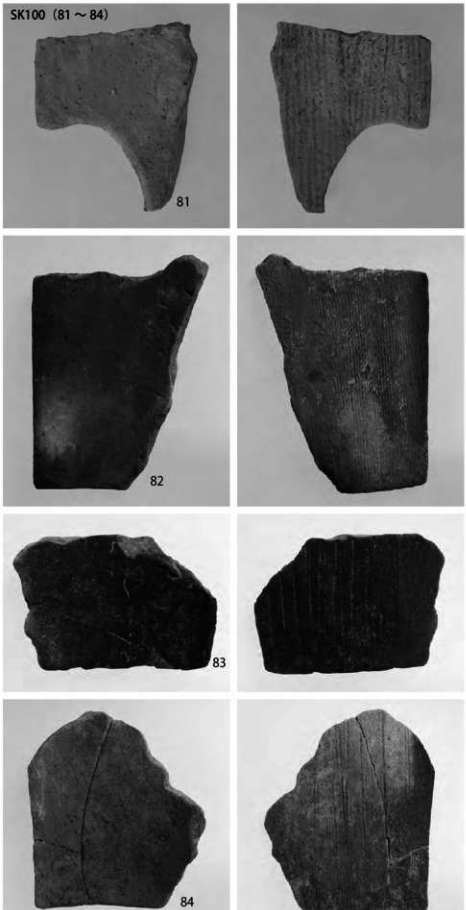

SK100（64～73）
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73

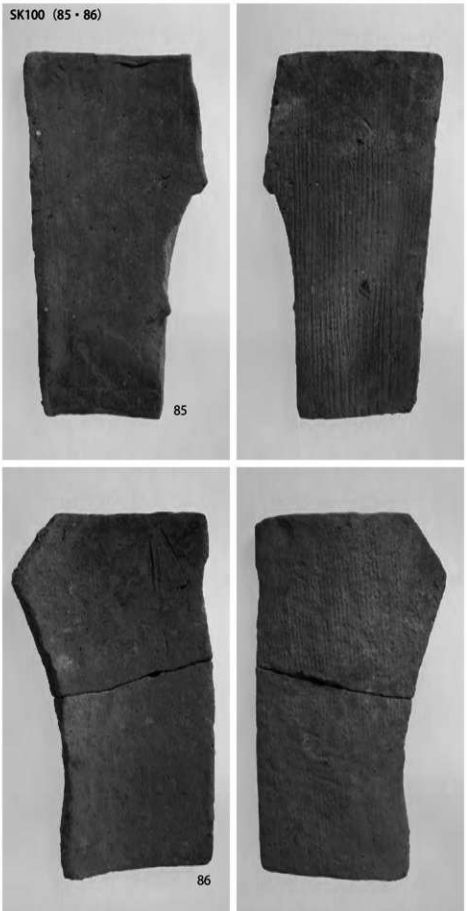
SK100（74～76）






SK100（77～80）
77
78
79
80


SK100（81～84）
81
82
83
84

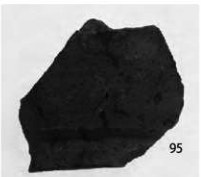

SK100（85・86）
85
86

SK100（87）

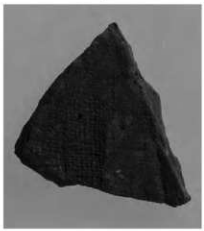
SK102（88～90）

表採（91・93）

表採（94～98）



表採（99～102）



報告書抄録

ふりがな	すがはらいせき
書　　名	菅原遺跡
副 書 名	令和２年度発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	佐藤亜聖・江浦　洋・村田裕介・箱崎和久・北脇翔平・松田青空
編 集 機 関	公益財団法人 元興寺文化財研究所
所　在　地	〒 630-8392　奈良市中院町 11 番地　　Tel 0742-23-1376
発行年月日	西暦　2023 年 3 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
菅原遺跡（すがはらいせき）	奈良県奈良市疋田町（ならけんならしひきだちょう）4 丁目 143	292010		34° 41′ 16″	135° 46′ 00″	20201026 ～ 20210115	1,960㎡	宅地造成

種　別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
寺院跡	奈良時代	掘立柱建物 回廊 塀 溝 土坑	土師器 須恵器 瓦 土馬 鉄製品	柱穴から鉄製円盤が出土 「西」刻印をもつ平瓦、凸面押圧技法による平瓦が出土

要　約

北区、南区とした２箇所を調査した。

このうち、南区とした調査区では丘陵頂部の平坦面から回廊と塀で構成される奈良時代の方形囲繞を検出、その内側から平面略円形（十六角形）の特異な建物跡を検出した。

当該地では 1981 年に奈良大学が中心となって調査が行われており、基壇建物跡 1 棟を検出し、小型瓦を含む瓦類が出土した。その年代観から『行基年譜』に記された「長岡院」との関連が指摘されていた。

今回の調査で出土した土器や瓦類も 8 世紀中ごろで、ほぼ同時期であることが判明し、両者は一体の施設であったことが明らかとなった。

当地は東に東大寺を望み、行基終焉の地となった菅原寺からもさほど遠くない立地であり、推定される創建年代が行基入滅年と近いことなどから、行基の供養堂であった可能性も高い。

菅原遺跡
－令和２年度発掘調査報告書－

2023.3.31

（発行・編集）公益財団法人　元興寺文化財研究所
（印刷）株式会社　明新社